1　最近10年間をふり返って

（1）最近の10年間の主催事業のとりくみから

公民館白梅分館では、この10年間継続して行われている主催事業がある。それは、幼児を対象にした保育室事業、少年を対象にした自然たんけん隊、夏休み昆虫をさがそう、親子や一般を対象とした親子映画会、自然かんさつ会、学習ハイキング、高齢者対象の熟年ひろば、コール白梅、そして、利用者とともに作り出す白梅まつりなどである。(事業名は一番最近の名称)

これらの事業のうち、10年間にわたって担当職員が変わらず継続して事業を行っている事業もある。この10年間の間に職員集団は変化しているにも関わらず、上記の事業が継続して行われているには、それなりの意味がある。

保育室事業に関していえば、公民館では幼児も学習に参加しているのであり、親の学習活動にくっついてきて「預けられている」のではない、との基本的な考え方のもと、公民館保育が実施されてきた。

現実には幼児が一人で公民館白梅分館まで歩いてくることができるわけではないので、親が参加する主催事業に付随した公民館保育室事業という展開となっている。

三多摩各市の公民館では、保育室の設置や運営に関してその市独自の発展形態があり、また、市民からの様々な要求の過程があって、福生市公民館は福生なりの発展で今日まで進んできたといえる。

福生市公民館の場合、かつて公民館保育室関連予算が市議会で「予算の執行凍結」という結論が出されたことがあり、当時の公民館運営審議会が「公民館保育室について」と題する答申文を出し予算の執行が可能になった経緯がある。この結果、自主的なサークル活動には保育が保障されず主催事業のみ対象事業となった。

予算執行凍結という「事件」の発端が、子どもを公民館保育室にあずけて親がテニスに行っていたり歯医者に行っていたりということが判明していたので、当時の議会関係者には公民館保育室が一時預かり的な託児所というイメージが拭えなかった。

現在では、公民館三館が合同で行う「公民館のつどい」など、公民館が主催する一日の催しに幼児を抱える母親が参加する際、公民館保育を希望する声がある。

単純に考えれば「主催事業」なので、通常の公民館保育室事業と同様に考え実施できるはずである。

公民館保育者側からは、公民館保育の性格上一時預かり場ではないので、子どもの人権を重視した上でキチンとした対応を考えたいとの声もある。

今後、「保育室事業」そのものが、公民館主催事業のみに行う事業であると限定すれば、夜間の事業や一日の事業などへの対応も検討を進めるべきであるし、昼間の時間に参加できる人のみ対象とする根拠は薄れる。

最優先順位が母親の学習権保障なのか、子どもの生理や心理的な発達要因などを考え、昼間にのみ、しかも一回限りの保育（場合によっては託児とよぶこともある）ではなく継続した保育室事業を開催すべきなのか。通常、仕事をしている母親は子どもを保育園にあずけて仕事をしているので、そのような未利用者に対しての保育室の位置づけも含め、公民館保育室の性格を明確にする時期に来ているのではないか。

生活するために労働する女性を、公民館という教育機関が保育室事業の側面から考えても、やや強引な言い方をすれば「生存権」と「学習権」の共存の方途をさぐる必要があるのではないか。

高齢者対象の事業については、“高齢期”の定義が問題になるだろう。人によっては「前期高齢期」「中期高齢期」「後期高齢期」と分けているようだが、高齢者も年齢だけでは単純に“分類”できるものではない。年齢的には「前期」であっても、精神的には「後期」の方もいるだろうし、その逆も当然考えられる。

ただし、中野区が作成した「ゴールドプラン」にも見られるように、高齢の方が実際に移動できる範囲は年齢とともに狭くなる事は事実であり、また、新たなものへの対応力や柔軟性が弱くなるのも確かである。

毎週決まった時間に白梅分館へ行くという行為が、高齢者の方々には仲間との交流の場でありかけがえのない時間でもある。その意味では地域の高齢者にとっては重要な場所であり大きな役割を果たしていることは確かである。

しかし、主催事業としての高齢者対象事業では、どうしても一律というのには無理があることも事実である。現状としては、会社を定年で辞めたばかりの人は健康にも自信を持ち自ら移動できる手段を持っていて、仕事から離れた開放感と自らを取り戻すために充実した時間を過ごしている人も数多くみられる。このような人たちを前期高齢期の人と呼ぶとすれば、健康に不安を抱え自分では移動手段を持たず移動範囲も狭まり不自由になりつつある人たちを後期高齢期の人とよべるだろう。この前期の人と後期の人を、一緒の対象とすることは現実的に難しい。

また、主催事業を終了し、自主的なサークル活動を自分たちの手でといっても、実際にはいくつかの援助をしていくことが前提となる。

高齢者のサークルだから特別な援助が必要なのか否か考える部分もあるが、実際には援助の部分が多いのは確かなことだと思う。

福祉センターでもなく、ましてや老人保健施設でもない公民館が、教育機関として単なる集会施設以上の機能をどのように発揮していくか、それは、あらたなと対応となって職員の質や専門性も問われてくるのかも知れない。埼玉県の浦和市では、保健婦を配置している公民館もあるとのことなので、これからの公民館での対応方法も多角的に考える必要があるだろう。

高齢者を対象とした事業と関連するが、公民館白梅分館では特筆できる事業がいくつかある。そのうちの一つに定年退職前後の人を対象にした生きがいさがし教室があげられる。

この事業は、主に50歳代で定年を迎える人を対象に開かれたものだが、趣味を見つけるのに苦労している年代であり、そのほとんどが地域の人間と交流する機会を持っていなかった。

簡単に他人と「交流」すればよいといっても、何をどのようにしてよいか分からない人にとっては、交流という言葉や文字が長い人生経験の中ではかなりの障壁になっていることも事実である。

その意味でも、バブル崩壊以後に開かれたこの教室は、地元で自らの生き方を考え関係を持ちたいという人たちに貴重なチャンスを与えたと評価できる。しかも、この趣味を見つけるためにいろいろな体験を繰り返す中で、本来の交流ということを見いだした人も多く、趣味を見つけることより地域で話しができる人を見つけたことが大きな収穫となった人もいる。

このことは、「人が人と話しをできる」という一番基本的な関係を身近なところで実践していくという力であり、一人ひとりの力が地域での生活課題を見いだし解決・解消していくための学習を民主的な方法で実践していくといった共同学習の基本であると思われるからで、公民館事業の真髄を見いだすことができるのではないか。

また、最近の自然志向というか野外での活動を実践する事業も特筆できる。この事業には、少年期を対象とした「自然たんけん隊」「夏休み昆虫をさがそう」、一般を対象とした「学習ハイキング教室」「自然かんさつ会」がある。

学習ハイキングについては、単なる自然志向を公民館事業と位置づけたわけではなく、自らの足で歩き見聞きし学んだことを、ハイキングマップとして作成し広く市民に配布をしたことである。

この事業の参加者の中には、一人では山歩きができないので、だれかに連れて行ってほしいという人もいたが、地図やコンパスの使い方の学習、現地での植物や野鳥の観察など、専門家からみれば充分満足いくレベルのものとは言い難いかもしれないが、学習の成果を市民に還元し、またそのマップを見た人が新たな学習をはじめるという、不特定多数の人に影響を与えている。そして、自主サークル化した段階でも公民館白梅分館を定期的に利用し、山行計画など事前準備を行っている。

また、かつて主催事業に参加した人たちが自主化してから10年を経て、白梅分館利用者中心に呼びかけたハイキングも実施できる力を身につけたり、白梅まつりでは、山行記録をもとに地図や写真を展示をしたり、コーヒーやクッキーの販売などの模擬店を出し、そこに来た利用者との話しも広がっている。

自然かんさつ会の事業は、公民館が開館した当時からの事業で、白梅分館の主催事業として行うようになったのは16年前（1985年）からである。

この自然かんさつ会では、年間を通して10回前後の観察会を開いてきたが、特に野鳥の観察会に参加していた市民が、現在では山階鳥類研究所の標識調査員を務めることのできるレベルまで向上した。

現在多摩川の永田橋から羽村大橋までの約１.６km区間を、国土交通省が中心となって「生態学術研究多摩川グループ」といった専門家集団を作り、地形や河川工学上の問題、あらゆる生物を調査・研究しているが、この学術研究の野鳥の調査員メンバーとしても参加を要請され、毎月野鳥の調査を行っている。

長い間継続して学習を積み重ねれば、学術調査ができるレベルまでの学習が展開できることを実践している例として評価できる。また、これらの調査は参加希望があればだれでも参加でき、一般の市民にも開放されている。近いうちに、身近な多摩川での野鳥の増減や移動距離といったかなり専門的な領域のデータが公表される予定だそうで、地域住民が学術的な内容を地域住民に還元していくことになる。

少年を対象に野外で行う事業（自然たんけん隊、夏休み昆虫をさがそう）は、担当者が白梅分館に来てから16年間、公民館職員になってから22年間継続している事業である。

これらの事業は、少年期から野外での実際の遊びを通して共同協力する力を養ったり、実際の生物を観察したり捕獲したりすることで、少年時代の自然環境を体験的に記憶しておくことである。また、仲間と地域を歩き回ることで地域の自然の様子や歴史的な建造物の位置などを知り、地域の成り立ちを知る機会とすることもである。

これらの活動から、自然環境や人間の営みとしての歴史を抜きに自分たちが生活している現在のまちを語りあうことはできず、体験の伴わない理論は何の説得力もないことを理解するきっかけとなればと思い、進めてきた。

現状としては、少年対象の事業そのものへの参加者数はかつてほど多くはない。子どもたちは遊びの時間さえもこまぎれのごとく忙しく遊び、そして、仲間関係もこまぎれのごとくしっかりとした関係を作りにくい状況にある。しかし、野外で身体一杯使って遊んだ経験や仲間との交流が本当に豊かなものであれば、自然に仲間として関係が広がっている。

「自然たんけん隊」や「夏休み昆虫をさがそう」に講師として来ていただいているのは、前述の学術調査に参加している人たちであったり、調査に参加できるレベルにまで引き上げた講師陣であったりするので、専門家集団と子どもたちが有機的な関係を維持できている。

しかし、このような事業は福生の公民館のみならず、東京の公民館全体の中でも特異な事業かもしれない。それは、同一の担当者が長い間市民の中の専門家をお願いし、社会教育事業の位置づけと専門性を考慮し実践できる環境にあったからで、だれでも同じ環境が生み出されるとは考えにくい。

地域の住民が少年期から青年期を通して一人の公民館職員とともに、地域の自然や環境を専門的なレベルで継続して学習していくといったことは、公民館でしかできないかもしれないが、それほど単純な条件設定ではないことも確かである。

これからの公民館職員は、異質な専門家を一つの集団として運営していくだけの専門性を求められる一方、役所の異動サイクルの中に組み込まれていく可能性が大きく、公民館職員の専門性を問う事自体が非常に難しくなるだろう。

この10年間、白梅分館では比較的小規模の人事異動であったため、かなり事業の質が深まったといえるが、このままいつまでも続くとは限らないからこそ、職員が住民とともに作り上げてきたものを、きちんと次の世代に伝えていく重要性が課題として残っている。

（2）自主サークルの変遷

自主サークルの利用について、今までも利用料は有料あるいは無料であるべきだとの論議がされてきたが、公民館利用するサークル活動の本質に迫るような議論は少なかったように思う。

しかし、ここ数年公民館は無料（福生の場合減免）で利用するが、利用者交流会などの役員を引き受けるようならばサークル利用をやめる、あるいは有料で使う方が気が楽だといった意見を公然と口にする利用者も増えてきている。

本来、税で運営されている公的な施設を利用する場合であっても、一部の人間だけの利用という見方が行政側には強く残っている。しかも、福生市の場合は体育施設はすべて有料利用という状況下で、公民館だけ減免利用というのは公平性に欠けるという意見もある。

このような状況の中で、公民館利用者が自ら公民館利用の公益性を語れないと、公民館を「単なる仲良しサークルが無料で集まっている場所」としか見られなくなってしまう危険性があるが、どうも職員が感じる危機感覚と利用者の間には“温度差”があるように感じる。それが杞憂で終わればそれに越した事はないのだが……。

以下に1997年度（平成９年度）の福生市公民館紀要（1998年３月発行）で自主サークルの最近の特徴などを記述してあるので、参考にされたい。

また、2000年度（平成12年度）の公民館紀要（2001年３月発行）でより具体的に自主サークルのことも取り上げているので、より詳しくはそちらを参照してほしい。

以下の文章の中でも指摘しているが、「役員になりたくない症候群」が特に勢力を広げているようで、1997年度当時より一層その傾向が強まっているように感じている。だれかに役員を押しつけることができれば万々歳といった言動が目立ち、税によって運営されている公民館を利用する社会的責任を明確にしているサークル活動は、減少の一途？なのかと案じている。

１　はじめに

今回の小論は、公民館本館の10～11月の自主的サークル利用の実数と、白梅分館の12月の自主的サークル利用の実数を比較することから、現在の自主的サークル利用の実態と、公民館利用の傾向を見ようとするものである。

なお、公民館本館は工事中のため、事務所と部屋を一時的に福祉会館を使用してい

る。そのため、本来ならば公民館を利用しているであろう各サークルが、公民館分館や市内各地の地域会館を利用している実態もある。また、各サークルの活動内容によっては公民館分館や地域会館では本来の利用目的を遂行するための制限が生じるため、一時的な活動中止になっているサークルや希望の回数が開けていないなど、本来の公民館利用の実態とは若干異なる数値での比較になっているのではないか？という心配がある。

また、当然のことだが、この小論は職員が勝手に記述しているもので、公民館利用者に原稿内容でチェックしてもらっているということはない。中には職員の一方的な識見というものが見えるかと思うが、研究的な部分もあることを承知願いたい。

2　公民館利用の実態比較

◇6～10人での利用割合が高く、本館は夜間に、分館は平均して利用

9～10ページにあるように、今回のデータは、公民館本館（福祉会館）と白梅分館の利用実態を統計処理したものである。

この表やグラフからもわかるが、毎回の活動実人数が10人以内での活動割合は、公民館本館の場合は全体の56.46％、白梅分館の場合は63.49％に達している。

この数値は、あるサークルが先週の利用では11人を越えていても、今週10人以下で利用した場合は10人以下の利用実数として回数をカウントしているので、サークルの数を示しているものではなく、あくまでも利用した実人数から利用実態を示したものである。

利用割合を人数別に見てみると、公民館本館では、6～10人での利用割合が33.51％、白梅分館では42.86％と際だって多いことがわかる。また、時間帯で比較してみると、公民館本館の場合は午前35.88％、午後20.32％、夜間43.80％で、夜間が午後の2倍以上で、全体の約半数近くが夜間利用となっている。

また、白梅分館の場合は、午前31.75％、午後35.71％、夜間32.54％と比較的均一に利用されていることがわかる。

これらのデータから、公民館本館では夜間に6～10人で利用していることが多く、白梅分館ではやはり6～10人で、昼夜同じように利用されていることがわかる。

3　数値からかいま見える利用の実態

◇圧倒的な利用者を占める主婦層

今までは、数値上の利用状況を見てきたが、実際に6～10人で利用しているサークルとはどういう種類のサークルが多いのだろうか？また、それはなぜなのかということに関心が向く。

そこで、白梅分館を6～10人で利用したサークルを抽出してみると合計54回の利用があったが、大まかに以下のように分類できた。

（なお、私は白梅分館職員であり、公民館本館の利用実態については詳しくわからないので、ここでは白梅分館のみのデータで判断する）

- ○　伝統的な日本の文化に関するサークル　15回
- ○　学習サークル　15回
- ○　創作サークル・手芸サークル　14回
- ○　音楽関係サークル　5回
- ○　体を動かすサークル　5回

上記のような分類から利用者層を見いだしてみると、圧倒的に主婦層が多い。学習サークルにおいても、PTAとボーイスカウトを除くと、ほとんどが乳幼児を抱える主婦や子育て後の主婦のサークルが多い。

また、比較的男性利用者が見られるのは日本の伝統的な文化活動をしているサークルではあるが、それでも数的には女性が圧倒している。

4　公民館職員と利用者の関係？

今年度、東京都公民館連絡協議会の職員部会が、公民館職員の実態調査を行った。本格的な調査を行ってからすでに12年ほど経過していて、今日の職員の実態を知る必要があったため実施した調査であったが、その設問の中に、「公民館とカルチャーセンターの違い」を聞く項目を用意してみた。

回答を寄せた271人の半数以上の140人が3年未満の職員のためとはいえ、ほとんどの職員が公民館とカルチャーセンターの違いを施設や予算の充実度、そして講座の講師の違いで比較していた。

回答した職員の中には管理の部門に所属する職員もいたのですべてが事業を担当す

る職員ではないが、事業を主催する公民館職員として意識しなければならない基本的な視点としては、少なくとも公民館とカルチャーセンターは施設や予算や講師のレベルで比較することではないはずである。

公民館職員は、地域の実態を自分の足で歩き自分の目で見て、歴史的にも実体的にも分析していることが必要であることは論を待たないであろう。

また、公民館での学習が共同の形態をとっていることは、実は「単なる集団」の共同学習ではなく、地域課題や家庭での生活課題を地域住民の学習課題として編み上げていく集団である必要がある。その集団としての学習プロセスを住民自らが作り上げていく時に、職員が求めに応じて指導・助言できるわけで、市民の要求に応え得る指導・助言をするためには、今地域で起こっている問題や課題を正確に把握している必要があることは言うまでもない。

学習する住民にとって、聞きたい・学びたい時に必要十分な学習情報を得る時間・タイミングというものが非常に重要なことは明らかで、「自分の学習意欲を十分満足させてくれ、それ以上に新たな広がりのある視点や学習方法を提供してくれる職員が身近にいることは、大きな励みになる」と、住民の方から聞いたことがある。

必要十分な情報を提供することと、短時間に付加価値をつけて情報を提供できるかということが、職員としての評価となるのだと思う。

それだからこそ、公民館には地域状況を理解している職員が必要なのであって、単なる知的好奇心を満足させるためや、好きな人間同士が集まって時間を費やす相手として、公民館に公民館職員が配置されているわけではないはずである。

ところが、実態としては先述のように職員の大半が3年未満で異動している実態であり、市民の学習要求に十分応えられる職員に育つには不十分ではないかと思わざるを得ない。

では、現実の問題として、白梅分館を利用している住民からどのような学習要求があり、どのように対応しているのか？という疑問が起こる。

学習要求の形態は様々であり一つの形式で示すことは難しいが、それでも自主的に利用しているサークルの中心利用者＝主婦層から、学習要求をよりひろげ深めるために職員としてのノウハウを尋ねられるということは、回数的に少ないのが実態である。

5　現状の課題と本来の公民館像との乖離

住民側の課題と職員側の課題

利用者交流会や連絡会で「役員をやりたくない症候群」が現れてから久しい。このため、利用者が中心になって準備実施してきた「利用者のつどい」「利用者祭り」「公民館まつり」などが、開けなくなった公民館がいくつもある。

公民館を利用している市民がなぜ自分の問題として公民館の現状や課題を話し合ったり考えたり、そして利用者交流会などの役員をやれなくなってきているのか。なぜ、やりたくない層が増えているのだろうか。

利用している主婦層（おそらく専業主婦層）は、利用できない夫（ほとんどがサラリーマンと思われる）に対して、地域でのコミュニケーション作りの実態や主婦としての力をどのようなことで地域とつながっているかなど、話し合っているだろうか。

公民館を利用することが、地域の中での暮らしや健康、そして生活課題や地域課題と自分の生きている現状をつなげて考える、すなわち地方自治の問題の中で自立した一個人としての生き方を学習課題として学ぶステップを共同で進めていることを、どのように話しているのだろうか。

公民館を公民館として考えるのではなく、「自分の関心や気のあった少数の仲間と自分の趣味などで利用できる空間」として考えている層が増えているのではないだろうか。

上述の調査分析からでも、公民館を利用している実態は10人以下のサークル活動で、なおかつ学習サークルと分類できるサークルでも、話し合い中心の学習形態が少なくなっている。

話し合い中心の学習サークルだけが公民館活動にふさわしいというのではないが、公民館を利用して公民館でなければならないような、生活課題や地域課題を解決するために歴史的必然性のある共同学習という形態は、現在では少ないのは事実である。

では、公民館職員側には何も問題も責任もないのだろうか。公民館職員も、住民からの要求がなければ何もしなくてよいのだろうか？前年度に引き続き、適当に自分の関心のある講座や主催の事業をやっていればよいのだろうか。

情報化・国際化・高齢化社会の到来に対処して……などといわれていて、しかも生涯学習という言葉の中で事業さえやっていればよいと考えている職員もいなくはないだろう。

しかし、高齢化社会の中で対応しなければならない地域の住民の個々の課題は何なのか、本質を明らかにし住民として生きていくために何が不足で具体的にはどのような関係性を生み出すことが必要なのか、また、そのために具体的な方法はどのように提案できるのか、今こそ公民館職員の本質が問われているのではないか。

行政改革と地方分権、そして生涯学習構想と具体的な展開の早さの中で、公民館職員として必死な戦いが起こっているはずなのに、ここしばらくの間、職員は無風地帯にいたと感じていたようで、公民館職員としての感度が鈍くなっていたのではないか。

地方分権がささやかれている現在だからこそ、公民館を真剣に思う職員と住民で新たな公民館像を提案できるはずであり、そうでなければ、その裏側に潜んでいる「だれかにやってもらいたい症候群」を打破できない。また、このままで何も具体的な手を打てなければ、公民館職員は「カルチャーセンター的利用者層」を再生産し続けることになる。

現実には、「公民館では個人の多様な要求を実現できる場」と勘違いしている利用者もあるようで、職員側も「多様な時代だからこそ多様な要求に応えうるのが公民館の役割である」と考えやすいこともあるのではないか。

しかし、単なる個人の多様な要求が集まったサークル活動が公費で保障されるという論理は理解しにくいし、多くの住民からも指示されないだろう。少人数の要求であっても公的な意味を持つ、または少人数でも地域課題を学習課題としている中の多様な要求なのか冷静に判断する必要があるが、このことこそ現在の公民館職員の持つべき視点ではないか。そして、今こそ、公民館職員としてのあり方を真剣に話し合い、具体的な展開力を集団で見直す時期に来ている。

このことは、日本中の公民館でも起きていることなのかもしれない。

公民館白梅分館　1997年12月の利用実態

1997年12月　白梅分館の自主グループ利用実回数

時間＼会場	集会室	会議室	和室	学習室	作業室	計
午前	10	6	4	10	10	40
午後	11	11	5	10	8	45
夜間	16	9	10	6	0	41
計	37	26	19	26	18	126

注　右表の利用実数31人以上で、７回のうち２回はコンサートや発表会利用のため、定期的な利用実体は５回である。

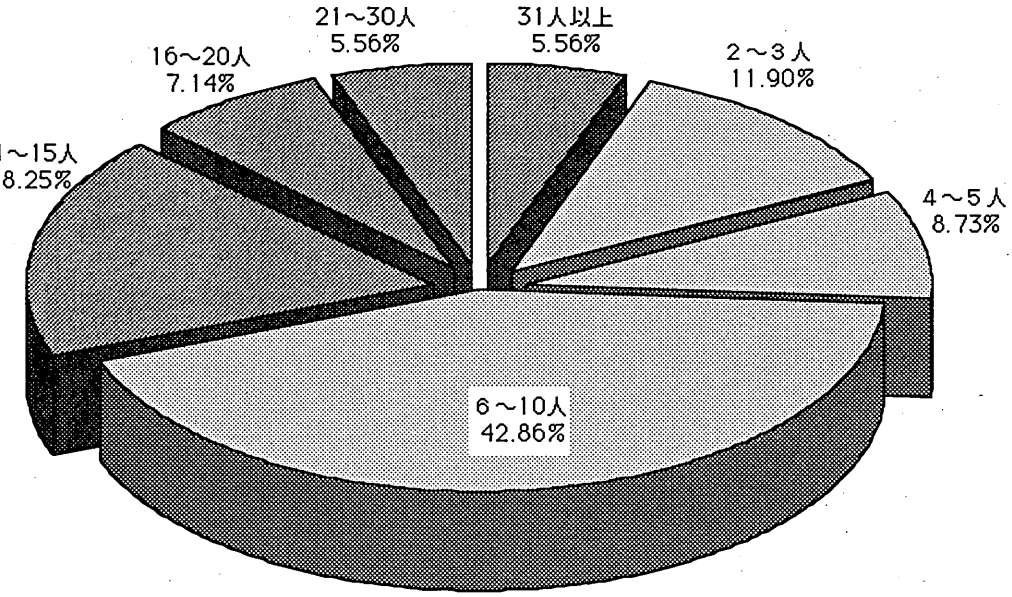
利用実数からみた実質利用構成割合

利用実数	実利用回数	全利用回数の割合%
2～3人	15	11.90
4～5人	11	8.73
6～10人	54	42.86
11～15人	23	18.25
16～20人	9	7.14
21～30人	7	5.56
30人以上	7	5.56
	126	100

☆　上記の表の数値は、1997年12月に白梅分館を自主的なサークル活動として利用した実数を統計処理したもので、主催事業・地域会館を有料使用などによる利用についてはカウントしていない。

☆　下図は、全利用回数126回のうち、人数別に利用回数を表にし割合を求めたものをグラフ化したものである。

利用回数と人数の関係



□　上記表・グラフから、10人以下の利用実態が63.49%に達していることがわかる。

□　特に、6～10人のサークルの利用が42.86%と際だって多いことがわかる。

□　回数的には、夜間の集会室の利用率が一番高い。最小は午前の和室である。

□　数値からみると、午後の利用率が一番高い。

□　作業室を除くと利用回数が一番低いのは和室であるが、白梅分館の場合は和室が２階にあることと、膝や足首に傷害経験を持つ方が増えているのだろうと思われ、利用が減少している。

□　部屋別では、集会室の利用が多く、椅子や机を配置していない空間は、ダンスや幼児を抱えるサークル、コーラスやリトミックなどの音楽サークルには利用しやすいようで、利用が集中している。

公民館本館（福祉会館）1997年10～11月の利用実態

1997年10～11月　福祉会館での自主グループ利用回数

時間　会場	第一会議室	第二会議室	視聴覚室	和室	ホール	大広間	計
午　前	27	31	25	19	28	6	136
午　後	9	20	20	12	9	7	77
夜　間	25	27	30	36	46	2	166
計	61	78	75	67	83	15	379

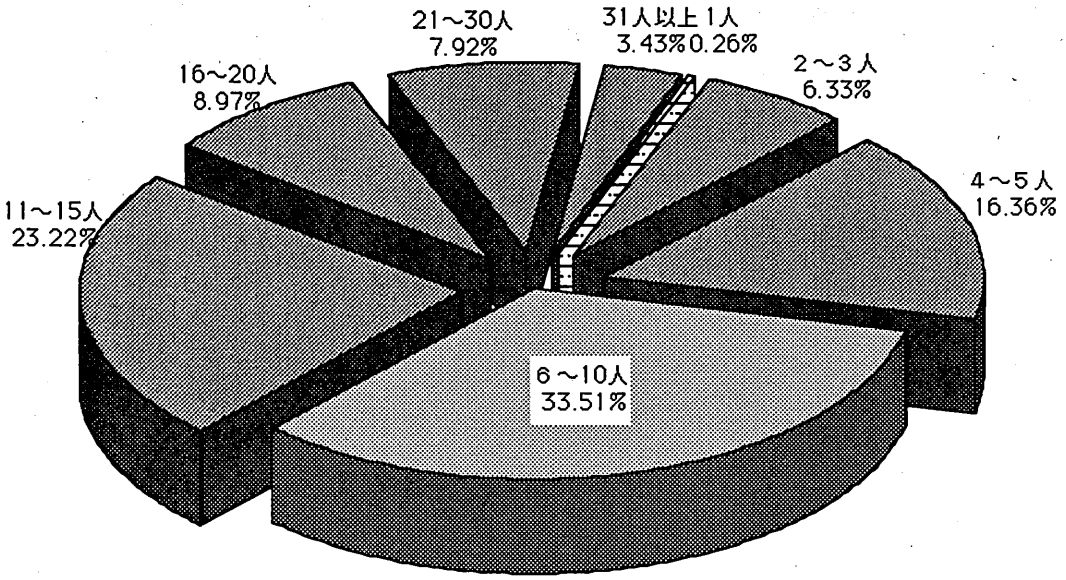
利用実数からみた実質利用構成割合

利用実数	実利用回数	全利用回数の割合%
1人	1	0.26
2～3人	24	6.33
4～5人	62	16.36
6～10人	127	33.51
11～15人	88	23.22
16～20人	34	8.97
21～30人	30	7.92
31人以上	13	3.43
	379	100.00

☆　上記の表の数値は、1997年10～11月に福祉会館を自主的なサークル活動として利用した実数を統計処理したもので、主催事業・有料使用などによる利用についてはカウントしていない。

☆　下図は、全利用回数379回のうち、人数別に利用回数を表にし割合を求めたものをグラフ化したものである。

公民館本館の利用人数と割合



□　上記表・グラフから、10人以下の利用実態が56.46%に達していることがわかる。

□　特に、6～10人のサークルの利用が33.51%と際だって多いことがわかる。

□　夜間のホールの利用回数が最多で、最小は大広間を除くと、午後のホールと第一会議室である。

□　数値からみると、夜間の利用率が一番高い。

□　大広間を除くと利用回数が一番低いのは第一会議室であるが、隣りの声や音が聞こえてしまうことと、残音のため会話が聞き難いなど、構造的に利用しにくいと思われる。また、和室も3階にあることやエレベーターがないことなどから、同じく利用しにくいようだ。

□　部屋別では、ホールの利用が多く、椅子や机を配置していない空間は、ダンスやコーラスなどのサークルには利用しやすいようで、利用が集中している。

白梅まつりの様子から

2　最近10年間のあゆみ

（1）10年間の利用統計（表とグラフ）

最近10年間の利用の様子を次ページ以降の表やグラフから判断すると、以下のようなことがいえるだろう。

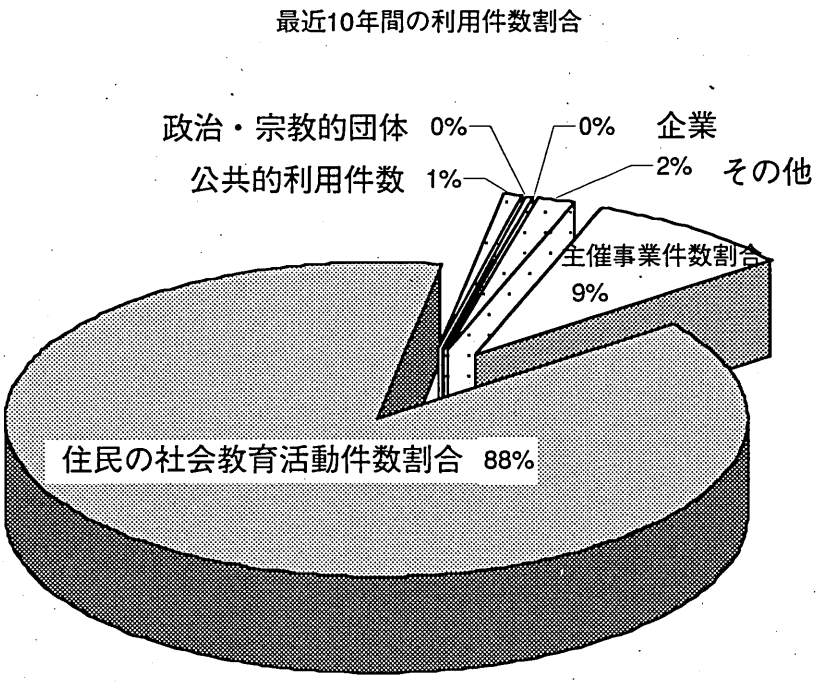
1　主催事業件数・参加者の増減

この10年間の公民館白梅分館利用件数のうち主催事業の占める割合は、平均で９％であるが、最近では12.17％であるので、若干主催事業の件数の割合が上昇している。

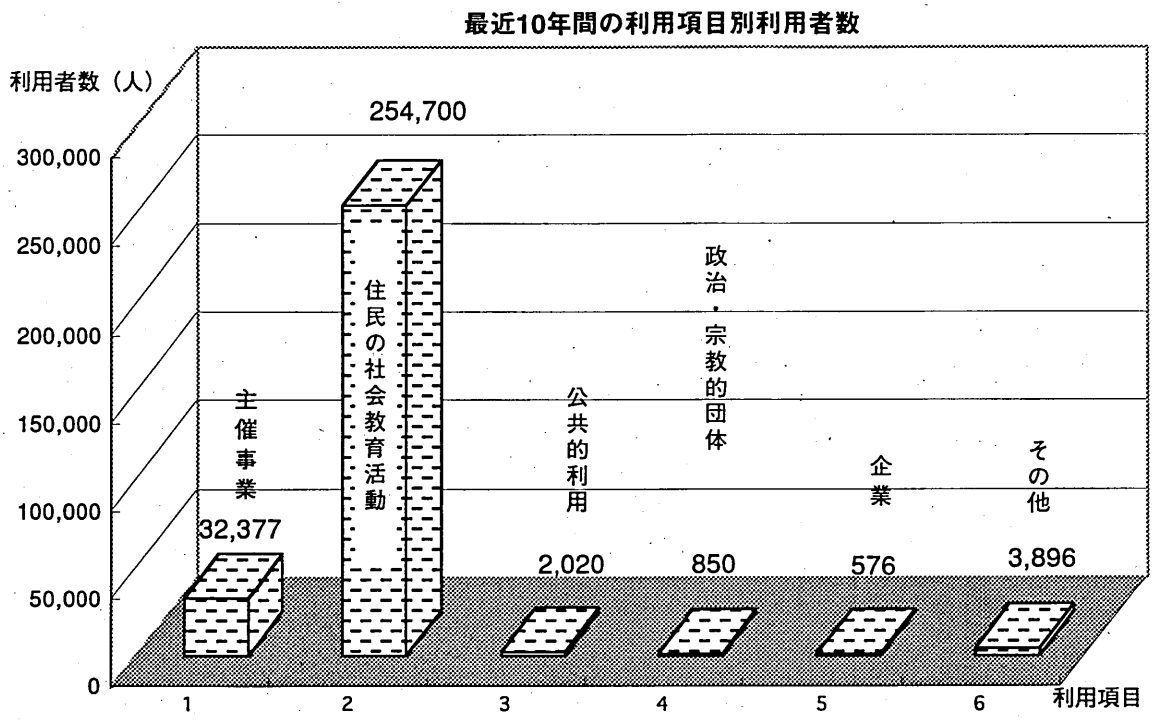
10年間の主催事業参加者数の平均は3277人である。1999年度の主催事業参加者数とほぼ同じである。1991年度の利用件数はかなり少ないが、この年は、相対的に主催事業件数が少なく5.96％ほどだった。総利用件数が少なかったわけではなく、主催事業参加者数は3198人と比較的多かったので、少ない件数に参加者数が多かった年と考えられる。

また、1996年度も同様に件数は219件なのに参加者数は4417人と今までで一番多く、この年は新たな分野に積極的に事業展開を行ったため、主催事業に追われて一年を過ごすという状況であった。その結果が参加者数に反映されていると言えなくはない。

職員数や職員の配置されている条件によって、この主催事業件数と参加者数は大幅に増減する。それは、公民館職員１年目の職員がいる状態と少なくとも３人の職員がそれぞれに企画・実践できる力を充分に身につけている状態では、大きく異なる。また、職員のけがや病気といったことでも件数が変わってしまう。

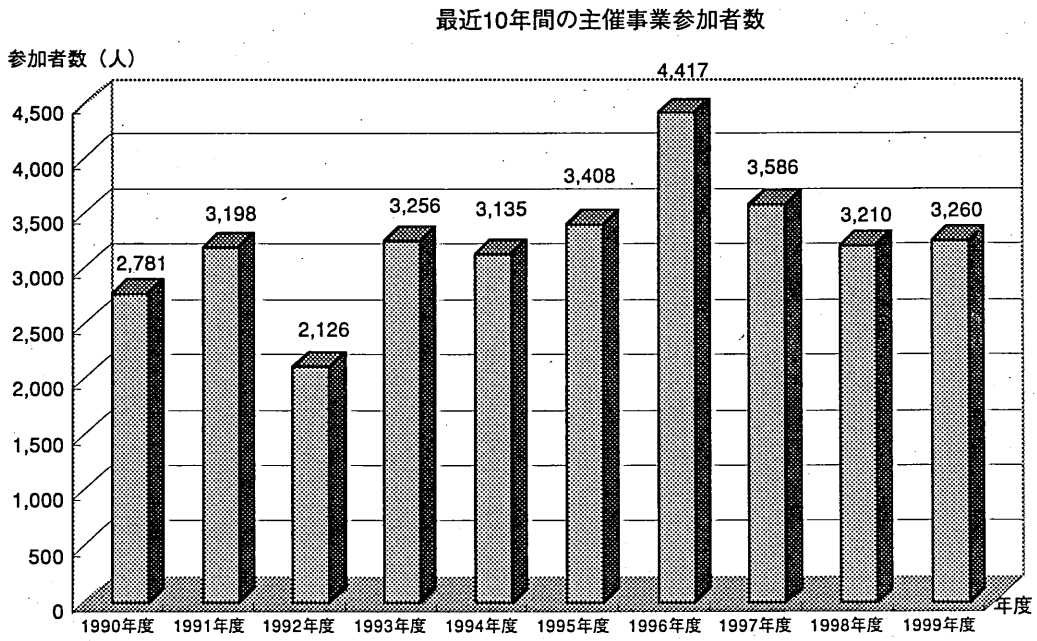


来年度（2002年度＝平成13年度）以降、公民館白梅分館や松林分館には嘱託職員の配置という状況になり、



また、職員の異動サイクルも短くなってきているので、今まで以上の主催事業件数は実質的に難しいのではないだろうか。

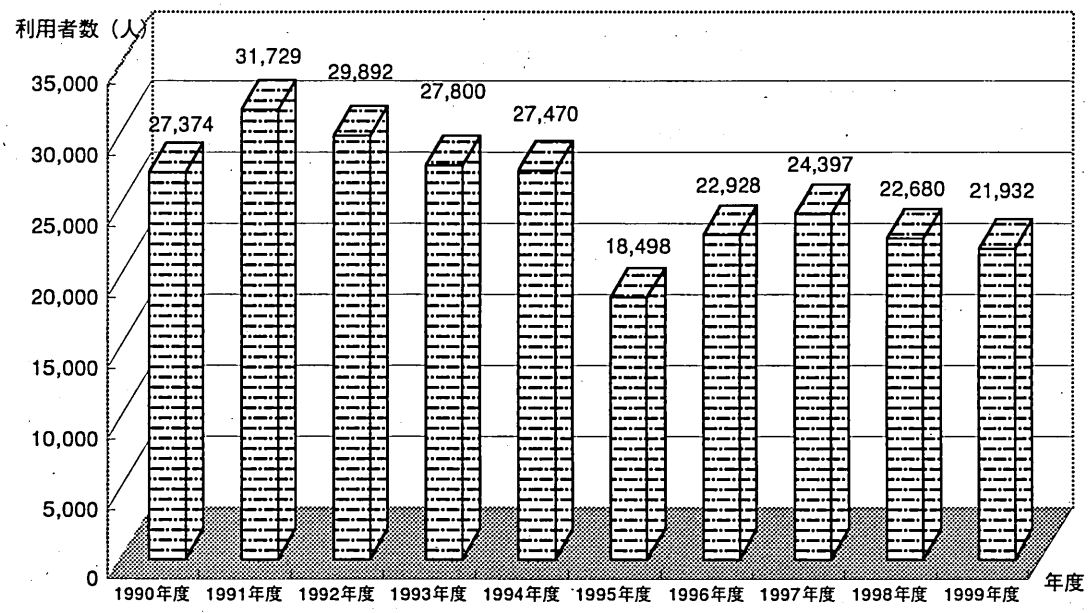
しかし、主催事業参加者が多いことがすべての判断の基準指数だとは思わないが、主催事業は件数だけに単純比例するわけではなく、内容と方法の努力によっては参加者数に反映するだろう。



2　住民の社会教育活動

この10年間の公民館白梅分館利用件数のうち住民の社会教育活動の占める割合は、平均で88％である。公共的利用や、政治・宗教的団体利用、企業やその他の利用件数のほとんどが０～２％であるので、実質的には、住民の社会教育活動がほとんどであるといえる。

最近10年間の住民の社会教育活動者数

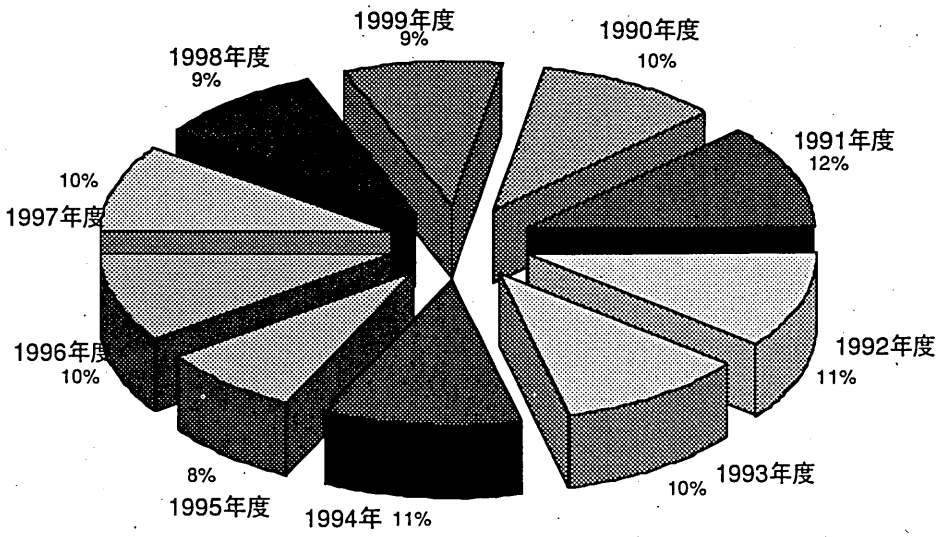


この10年間の平均利用者数は25470人であるが、最近５年間は平均を下回っている。

しかし、1995年には冷暖房施設の改良工事のため半年間閉館ということだったので、単純に人数だけでは比較できないだろう。

最近５年間の利用人数が減少しているにも関わらず、最近５年間の利用件数割合は大幅に変わっているわけではない。実質利用件数も1995年に比べ1996年以降の４年間は増加している。

最近10年間の住民の社会教育活動利用件数割合



これらのことからも、住民の社会教育活動団体として利用している各サークルの実質的な構成員数が減少していることが類推できる。

このことは、前章の「１最近10年間をふり返って（２）自主サークルの変遷」で指摘した通りである。

今後もこの傾向は続くと思われるので、住民の社会教育活動の質にも変化が起きてくるのではないか。

３その他

公民館白梅分館を利用する団体は、前期の主催事業と住民の社会教育活動が99％に達しているので、これ以外の利用については、多くの紙面を割いて論評を加える必要はないと思われる。

ただし、今後も公民館として地域の中で「認知」されていくためには、主催事業や自主的なサークルに参加されている方々にはもちろん、未利用者により多くの情報をとどけ、参加を促すような事業を展開する必要性があることと、自主的な活動を有機的な組み合わせによって、新たな利用者層の開拓が必要であるので、今後の課題としたい。

最近10年間の利用状況表

		1990年度	1991年度	1992年度	1993年度	1994年度	1995年度	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	合計
主催事業	件数	177	136	158	184	148	183	219	201	255	229	1,890
	人数	2,781	3,198	2,126	3,256	3,135	3,408	4,417	3,586	3,210	3,260	32,377
住民の	件数	1,852	2,103	1,944	1,879	1,976	1,380	1,793	1,755	1,661	1,586	17,929
社会教育活動	人数	27,374	31,729	29,892	27,800	27,470	18,498	22,928	24,397	22,680	21,932	254,700
公共的団体	件数	55	24	24	5	3	21	8	19	16	9	184
	人数	239	370	470	50	16	319	85	151	220	100	2,020
政治・宗教的団体	件数	24	2	2	5	5	0	5	0	0	3	46
	人数	210	30	80	190	80	0	180	0	0	80	850
企業	件数	25	1	0	4	6	1	1	1	0	1	40
	人数	337	10	0	49	30	30	30	70	0	20	576
その他	件数	98	15	17	48	15	12	19	20	21	53	318
	人数	950	349	308	366	299	188	395	329	329	383	3,896
合計	件数	2,231	2,281	2,145	2,125	2,153	1,597	2,045	1,996	1,953	1,881	20,407
	人数	31,891	35,686	32,876	31,711	31,030	22,443	28,035	28,533	26,439	25,775	294,419

最近10年間の項目別利用状況表

（2）各年度の主催事業一覧

◆ 1990年度（平成２年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	30回	375人
少年	たんけん教室	17回	240人
女性	幼児教育学級「たのしい子育てひろば」	15回	225人
	身近な自然環境を考える	15回	120人
	婦人のひろば	５回	75人
一般	巣箱を作ろう	３回	16人
	私達のまちづくり	８回	80人
	自然観察会	10回	307人
	白梅利用者発表会	１回	609人
	白梅親子映画会	７回	176人
	白梅利用者発表会実行委員会	８回	135人
	白梅会館利用者交流会	３回	44人
	白梅会館利用者研修会	１回	12人
高齢者	白梅コース	４回	140人
	人生をうたおう会	10回	400人

◆ 1991年度（平成３年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	17回	221人
	ちょっと早いクリスマス	１回	70人
少年	たんけん教室	12回	187人
	夏休み自然教室	５回	20人
女性	人形劇を創る	17回	210人
	保育室利用交流会	１回	10人
一般	あなたの福生はどんなまち	８回	48人

	自然観察会	8回	244人
	白梅利用者発表会	1回	571人
	白梅親子映画会	10回	278人
	ほのぼの人形劇公演	1回	95人
	白梅分館10周年記念陶壁作成	2回	45人
	陶芸サークル連絡会	1回	8人
	白梅利用者発表会実行委員会	4回	70人
	白梅会館利用者交流会	1回	30人
	白梅会館利用者研修会	1回	25人
高齢者	白梅熟年ひろば	10回	275人
	人生をうたおう会	10回	320人
	白梅七宝教室	10回	223人

◆ 1992年度（平成4年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	18回	144人
少年	たんけん教室	16回	206人
	夏休み自然教室	4回	20人
女性	人形劇を創る	18回	126人
一般	ひとにやさしいまちづくり	7回	40人
	自然観察会	10回	187人
	中学生　性・友人・進路	4回	23人
	白梅利用者発表会	1回	450人
	白梅分館10周年記念陶壁作成	20回	78人
	家族新聞をつくる	1回	3人
	白梅親子映画会	11回	182人
	白梅利用者発表会実行委員会	5回	87人
	白梅会館利用者交流会	3回	63人
	白梅会館利用者研修会	1回	16人

	親子トントン教室（親子で楽しみま専科）	3回	60人
高齢者	白梅熟年ひろば	11回	340人
	人生をうたおう会	10回	350人

◆ 1993年度（平成5年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	24回	120人
	歌と音楽と人形劇	1回	140人
少年	たんけん教室	18回	207人
	夏休み川原で遊ぶ	4回	20人
女性	人形劇を作る	24回	120人
一般	親子で巣箱を作ろう	1回	5人
	ミニコミの作り方	4回	48人
	身近な環境問題	7回	56人
	自然観察会	10回	257人
	リアルバードカービング教室	12回	94人
	大正琴教室	10回	119人
	白梅利用者発表会	1回	450人
	白梅親子映画会	12回	86人
	人形劇上演	1回	120人
	白梅利用者発表会実行委員会	6回	109人
	白梅会館利用者交流会	3回	77人
	白梅会館利用者研修会	1回	8人
高齢者	熟年ひろば	11回	352人
	人生を唄おう会	14回	504人

◆ 1994年度（平成6年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）

幼　児	保育室事業	21回	168人
少　年	たんけん教室	14回	109人
	子ども昆虫博士になろう	6回	41人
女　性	人形劇を作る	21回	158人
一　般	自然観察会	7回	169人
	私たちのまち福生を診断する	8回	50人
	リアルバードカービング教室	14回	176人
	おとうさんの実践アウトドア教室	3回	14人
	白梅親子映画会	10回	291人
	白梅ハイキング	1回	25人
	人形劇公演	1回	140人
	水墨画教室	15回	272人
	野山や河原を歩こう会	16回	219人
	利用者交流会	3回	102人
	利用者研修会	1回	32人
	利用者発表会実行委員会	4回	52人
	利用者発表会	1回	650人
高齢者	熟年ひろば	12回	356人
	人生を唄おう会	12回	488人

◆　1995年度（平成7年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼　児	保育室事業	34回	340人
少　年	しぜんたんけん隊'95	18回	228人
	子ども昆虫博士になろう	4回	16人
女　性	影絵劇をつくる	17回	68人
	影絵劇上演	1回	60人
一　般	リアルバードカービング	13回	98人
	福生の社会教育を考える	7回	42人

	自然かんさつ会	12回	218人
	巣箱やえさ台を作ろう	2回	27人
	白梅親子映画会	9回	241人
	趣味を見つけよう会	40回	402人
	野山や河原を歩こう会	20回	348人
	利用者交流会	3回	88人
	利用者発表会実行委員会	6回	107人
	利用者発表会	1回	750人
高齢者	熟年ひろば	12回	360人
	コール白梅	13回	559人

◆ 1996年度（平成8年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	26回	130人
少年	たんけん教室	19回	233人
	夏休み昆虫をさがそう	6回	30人
女性	影絵劇を作る	26回	208人
	影絵劇発表会	1回	90人
	保育室交流会	2回	17人
一般	巣箱やえさ台を作ろう	1回	5人
	やさしい生物の話	10回	99人
	自然観察会	8回	165人
	リアルバードカービング教室	8回	56人
	表現力のあるチラシ作り	4回	46人
	川原や丘陵の自然を楽しむ	6回	80人
	白梅利用者発表会	1回	700人
	趣味開発講座	51回	663人
	学習ハイキング	14回	238人
	白梅親子映画会	13回	408人

	人形劇上演	1回	105人
	白梅利用者発表会実行委員会	4回	97人
	白梅会館利用者交流会	3回	70人
	白梅会館利用者研修会	1回	8人
高齢者	熟年ひろば	12回	372人
	コール白梅	13回	585人

◆ 1997年度（平成9年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	16回	96人
少年	たんけん教室	23回	339人
	夏休み昆虫をさがそう	5回	31人
女性	家庭内リサイクル考	16回	96人
一般	巣箱やえさ台を作ろう	1回	5人
	自然観察会	13回	234人
	やさしい生物の話	10回	97人
	リアルバードカービング教室	10回	100人
	趣味開発講座	46回	429人
	学習ハイキング	17回	225人
	太極拳	10回	157人
	中学生を持つ悩める親の会	7回	42人
	白梅まつり	1回	450人
	白梅親子映画会	12回	378人
	人形劇上演	1回	30人
	白梅まつり実行委員会	5回	80人
	白梅会館利用者交流会	3回	52人
	白梅会館利用者研修会	1回	10人
高齢者	熟年ひろば	12回	384人
	コール白梅	12回	611人

◆ 1998年度（平成10年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	保育室事業	18回	90人
少年	自然たんけん隊'98	19回	231人
	夏休み昆虫をさがそう	5回	32人
女性	子育ての日常環境を考える	18回	126人
一般	福生の多摩川を隅々までのぞいてみよう	7回	94人
	自然かんさつ会	10回	161人
	利用者研修会	1回	24人
	趣味開発講座	40回	414人
	学習ハイキング教室	24回	354人
	巣箱やえさ台を作ろう	1回	3人
	説得力のあるチラシ作り	4回	54人
	おもしろい生物の話	10回	92人
	白梅親子映画会	11回	259人
	白梅サマーシアター	1回	26人
	金属工芸教室	12回	200人
	利用者交流会	4回	71人
	利用者発表会実行委員会	4回	79人
	利用者発表会	1回	500人
高齢者	白梅熟年ひろば	11回	287人
	コール白梅	10回	557人

◆ 1999年度（平成11年度）主催事業一覧

対象	事業・活動名	回数	参加者（延人数）
幼児	公民館保育室	16回	173人
少年	自然たんけん隊'99	24回	169人
	夏休み昆虫博士になろう	5回	21人
女性	子どもの食事「好き嫌い」	16回	137人

一　般	生きがいさがし教室	29回	290人
	学習ハイキング教室	25回	280人
	移動公民館	6回	274人
	説得力のあるチラシ作り	4回	35人
	リアルバードカービング	10回	85人
	利用者研修会	1回	24人
	多摩川の自然とふっさ	6回	94人
	巣箱やえさ台を作ろう	1回	6人
	自然かんさつ会	8回	127人
	白梅親子映画会	10回	191人
	白梅サマーシアター	1回	36人
	おしろい生物の話	6回	55人
	利用者交流会	7回	121人
	白梅まつり	1回	550人
	白梅まつり実行委員会	5回	115人
高齢者	熟年ひろば	7回	199人
	コール白梅	7回	408人

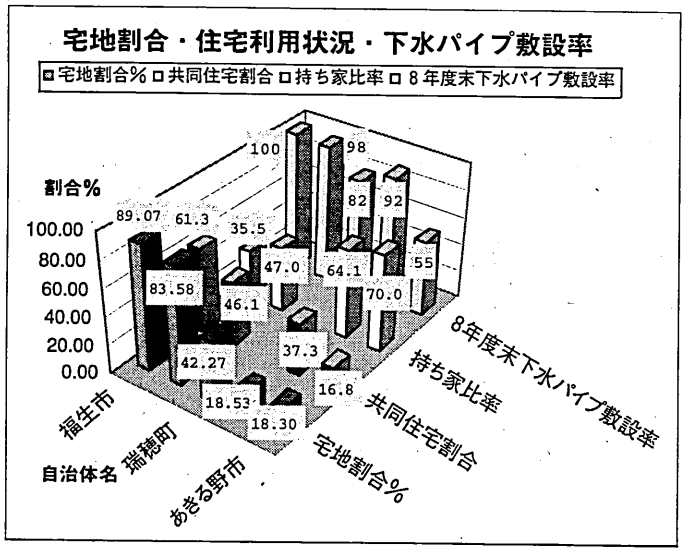
（3）平成12年度公民館白梅分館運営方針

今日の社会状況

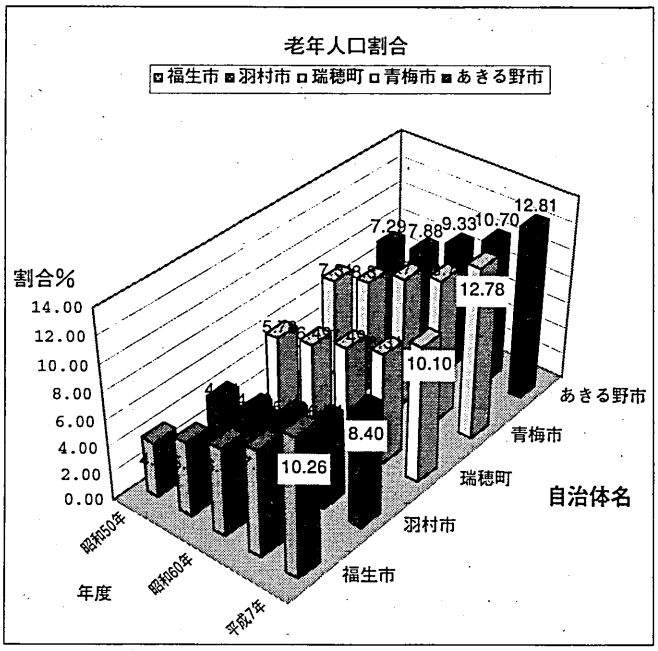
◆ふっさって、いま、どういう「まち」なのか？

福生市の人口や世帯については、明治22年（1902年）「福生村熊川村組合役場設置」以降、統計的な数値が残されている。明治22年当時は世帯数で493、人口で3,111人であったことが分かっている。

それから60年あまり経過した昭和35年ころから人口・世帯数とも急増をはじめ、昭和50年には世帯数15,034、人口45,418人を数えることになり、「福生市」となった。明治22年から約100年後の今日の人口は62,000人を越え、世帯数も26,500世帯を越えている。



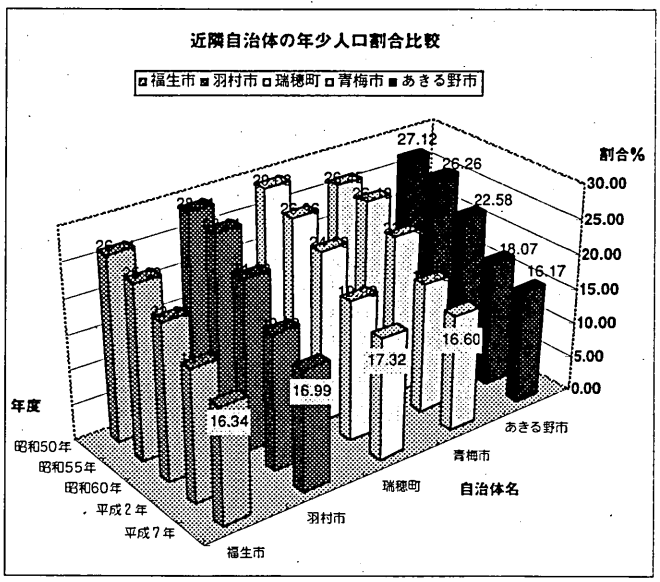
明治から昭和20年までは農業と養蚕業しかないまちであったが、第二次世界大戦終了後、アメリカ進駐軍が横田基地を利用することになり、新たな産業が加わった。一時は「基地のまち」とまで呼ばれ、アメリカ兵相手のさまざまな商売が生まれ、同時に多くの問題も発生し、他方では独特の文化を築いてきた。現在では、円とドルの経済的な価値が相対的に変化したため、アメリカ兵相手の商売は衰退してしまった部分は否定できないが、それでも福生独特の看板や商売・文化の名残を見てとることはできる。

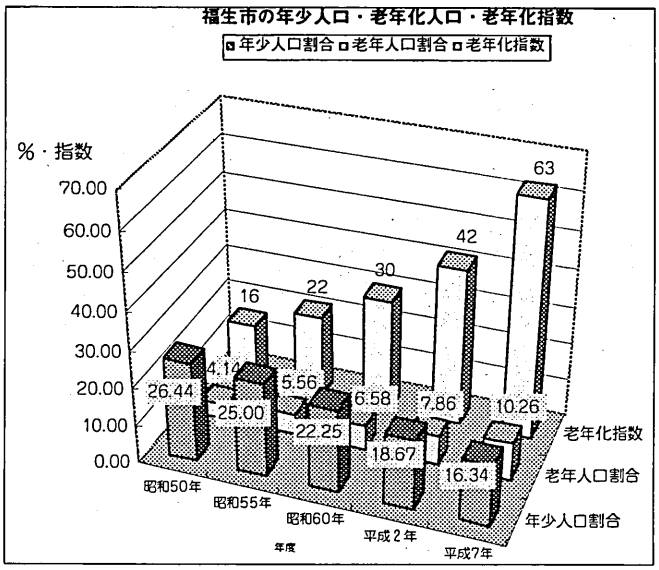


福生市の財政部分では、基地関係の名目での歳入が総歳入の１割前後となっている。近隣の自治体と比較してもこの歳入金額は突出している。

福生市は、地方自治の行財政専門家（大学教授）から聞いたところ、基地を抱えているまちの中でも、「一般財源を基地関係名目費に大きく依存している特異な自治体」と見られているとのことで、今後、横田基地の役割が変化したり、基地の状況によっては基地関係名目費の減少が予想され、福生市としての社会的サービス部分が後退することも考えられなくはないだろう。

現在の、福生市と近隣市町村をいくつかの分野で比較してみた。住宅地の割合と持ち家率の割合では、福生はほとんどが宅地となってしまっていることと、共同住宅割合が高く、持ち家率が低いことが見てとれる。また、人口密度や老年化指数などを近隣の自治体と比較してみても、福生も少子高齢化が進行していることがわかる。





◆白梅分館のある熊川地区って、いま、どうなっているのか

2000年３月１日現在、「熊川」という地番の人口は19,053人となっていて、福生の人口の約1/3を占めている。（「熊川」という実質的な町会単位での人口は、22,265人である）

熊川地域の特徴としては、南、内出といった古いまちなみを維持している町会と、その旧村落の次・三男が「新家」として振興住宅地を作った鍋一・鍋二町会、そして福東や玉川台、富士見台などの、福生とは縁もゆかりもなかった人たちが構成している新興住宅地というように、旧村落から振興住宅地までがモザイク状に存在している。そして、福東・福栄・富士見台などでは、都営の高層住宅や民間のアパートなどの貸

家の割合が高い。

熊川地域の中でも特に白梅分館周辺（鍋一・鍋二）では、どんな特徴が考えられるのだろうか。また、他の地域に対して優位に立てるモノや内容はあるのだろうか。

先述のように、熊川でも旧村落の面影を残している部分の中には、造り酒屋があったり、ケヤキの大木が広い敷地の中にそびえていたり、茶やツツジの生け垣が美しい部分もある。また、段丘沿いに静かな佇まいを見せている「熊川分水」や、神社仏閣などの歴史的建造物などもある。

これらの歴史的な遺産として考えられる部分をプラスの評価をすること、旧村落の中で培われてきた今日でも充分通用するコミュニケーションのノウハウがあるとすれば、それを発見することも重要なことではないだろうか。

また、拝島駅北口などでは、区画整理も未整備な部分に民間アパートが多数集中していることと、都営の高層住宅との混在が新たな人の流入という形で、新しい価値を見いだせる可能性が大きいとも考えられる。特に、人が持っている「資源」としての価値を引き出すことが、重要な方向性を示しているのではないだろうか。

社会教育をとりまく、さまざまな変化

◆公民館が置かれている状況の変化

約50年前に生まれた社会教育法や27年前に生まれた「三多摩テーゼ」などでは、公民館は地域住民が民主主義を学び実現する拠点であり、まちづくりのために地域住民が集い話しあう住民自治と地方自治実現の場であり、地域文化の創造と発展の場であると理解されている。

東京の公民館職員は、社会教育法や三多摩テーゼの精神を学び発展させることによって、公民館を中心として数多くの地域文化を作り発展させてきた。

そして、「三多摩テーゼ」が生み出されたころの市民の学習は、自らが学ぶ楽しさ・地域の課題を共同で学ぶことや意味が公的に認められ、将来に向かって継続的に自らを高めていく勢いと自覚のある営みであった。

しかし今日ではNPO法人等の出現によって、まちづくりや文化創造と発展という期待や役割は、公的教育機関としての公民館だけのものでは無くなりつつある。

これらの変化の背景にあったのは、個人所得の向上、自治体による生活基盤整備・

社会教育施設の充実、また、自治体による社会教育事業という枠組みだけでは説明しきれない、さまざまな民間教育事業が数多く生まれていたこともあった。そして、一部では今までの社会教育行政に依存しない学習や活動が進んでいったことなどが考えられる。

個人所得向上の結果、モノに不足しない生活スタイルの実現という大きな変化は、個人の学習という側面では、学習スタイル・学習の中身の選択や参加の方法を変えてきている。そして、個人対応が進むことによって集団中心から極小集団ないし個人中心へと、時代の流れが変わっている。

◆学習権保障の質的・制度的変化

東京の多くの公民館職員は、長い間「住民の学習要求を実現する」「住民の学習ニーズに応えられる主催事業」と言ってきたが、本来は単なる住民の学習ニーズではなく、「地域で暮らす住民にとってよりよい地域を創造発展させるために学ばなければならないことを共同で学ぶ」という意味での学習ニーズであったはずが、いつの間にか「単なる個人要求レベルを実現するための学習要求」になっていた部分の違いを、はっきりと精査していなかったのかもしれない。

また住民各自の“学習権”を、個人のレベルで実現すべきことと、公的な意味での“学習権”を保障するということを、強く意識してこなかったのではないだろうか。

では、公民館で保障すべき学習権とはどのようなものなのだろうか。地域住民が地域の生活課題のレベルからの疑問を解決・解消していくために、誤解を恐れず言葉をかえていえば、地域でよりよく生きていくために、地域の住人として学ばなければならないことを民主的に学ぶ場、そして、新たな文化を常に生み出し発展させていくべき学びの総体を、公民館での学習権の保障と言えるのではないか。

大胆に言い直してみれば、公民館職員も利用者も、“個人レベルの学習権の保障”要求を、地域住民の学習ニーズという言葉でひとくくりにしてきたのではないだろうか？

1999年７月に国会で成立した「地方分権関連一括法」の中には、社会教育法などが含まれていて、公運審そのもののあり方や選出方法などが改正された。

この地方分権関連一括法そのものは、「地方分権を進めるために」設置されたり改正されたものであり、今後も地方分権は「規制緩和」を伴って進むことは確実であろう。

◆個人の情報収集・コミュニケーションの方法が変わった

「三多摩テーゼ」が生まれたころには、今日のようにファックスやパソコンに囲まれて仕事をする公民館職員像は想像できなかった。そして、ほんの少し前までは、友だちに連絡するということは友だちの家に電話をかけることであって、各自が携帯する電話に常時連絡できると考えられなかった。また、パソコンは、電卓の延長だったものが、インターネットの出現によって、世界中のどこへでも瞬時に通信もできてしまう、コミュニケーションツールとしての使用が主になってきたのではないか。

そして、特にこの10年は、携帯電話とパソコンの急速な普及が、人々のコミュニケーションの方法を変えてしまったと言えるだろう。

これらの情報機器の発達は、いうまでもないが個人の利用を前提にしている。集団で顔を見合わせ、生の言葉の圧力を感じながらコミュニケーションが成立していた時代から、直接の“人”の圧力を感じない、あるいは避けることのできるコミュニケーションの時代になってきていたのではないか。

また、コンピューターを中心とする情報ネットワークの出現は、個人レベルで多様な学習情報の入手や参加の機会を探すことが容易になってきている。この時代の流れは、個人のさまざまな学習や文化的要求を容易に実現できる方向へと、加速している。

◆新たな時代に対応した公民館へ～重厚長大から軽薄短小の時代背景～

この20年ほどの間、社会構造は集団から個人へ、あるいは大きな集団から非常に小さい集団へと考えられるようになっていたにも関わらず、公民館ではそのような移りつつある状況を対岸の火事のように見ていたのではないか。

だが、すべての公民館職員が全く手をこまねいていたわけではない。コンピュータ利用やその他の情報機器に必要以上に依存し、対人コミュニケーションの仕方が下手になってきている現状に警鐘をならし、少年期から地域で体験を伴ってコミュニケーションを深め、人間としての生きていく知恵を身につけていくような事業も、ささやかであったが実践してきた。

しかし、公民館での実践には地域や社会を変えていけるだけのエネルギーが不足していたのと、今から思えば本気でその流れを乗り切っていくという、教育機関としての思いの強さが不足していたのではないだろうか。

今年度の白梅分館としての基本的な考え方

前記までの分析の上で、白梅分館としては公民館の機能と役割を以下のように考え、その視点をもとに下記のような主催事業や自主サークル援助を行なう予定である。

【公民館の機能と役割】

1　公民館はまちづくりに参画する市民の学習の拠点である

2　公民館は地域文化の創造と発展の場である

3　公民館は、情報と知恵の集中する場である

◇主催事業

公民館の主催事業は、公民館が地域の顕在化・潜在化している諸問題や生活課題を、解決・解消しようという市民の学習の側面を援助することにある。そのためには、今までの主催事業そのものを真摯に振り返り、住民にとっての学習要求を、地域にとって公民館でなければ実現しえないかどうかを検討し、単なる個人レベルの文化的学習要求と、地域課題や今日的な学習課題なのかを選別し、実施するものとする。

具体的には別紙を参照されたい。

◇自主サークル援助

地域文化の創造や発展は、市民自らの継続的な学習をなくしては成し得ない。しかし、その基盤整備としての施設や発展のための環境醸成や「援助」も必要である。しかし、この「援助」の中身については、時代とともに、そして、社会的なニーズによっても異なることは明かである。

また、必要以上の援助は本物の文化として根付かないばかりか、時には衰退を助長しかねない。そのため、全体的な流れや過去からの実績、そして利用者の総意を把握する中から、援助の中身を決定する必要があるのではないか。

◇白梅分館としての特有な活動

■情報の発信と共有── 市民と公民館が情報を共有するには？

市民にとって、あるいは公民館利用者にとって有用な情報とは何か？という問題が

あるが、少なくとも、以下のような情報を公民館側から継続して提供し、関心を広め深めるなかで、共同・協働するための共通基盤ができるのではないだろうか。

○現在起きている地域の問題・現在や将来に関わる地域の課題に関すること
○乳幼児や乳幼児を育てている父母に関すること
○少年期や青年期の生活実態や教育に関すること
○地域の福祉や高齢者の問題に関すること
○地域の自然環境に関すること
○地域の文化創造と発展に関すること
○地域の暮らしと健康に関すること

上記のような情報を、今までの「白梅分館だより」だけでは間に合わないと思われるので、今後は月１回A３サイズ両面くらいのもので、公民館利用者を中心に提供するものとする。

ただし、この情報提供は一方的にされ、終わるものであってはならない。この情報を共有することで、地域で暮らす市民としての共通の認識をもつことが一次的なものであるとすれば、二次的には共通認識の上で新たな方向性の実践を試みる必要がある。

■共同の学習 ── 市民と公民館がともに学習をするには？

今まで、「市民」として市政や公共施設での公的な発言をする事はほとんどなかった方々を対象に、福生で単に生活している一人の市民として、何ができるのか具体的な側面を明らかにしたい。そのためには、新たなことに積極的に実験的な取り組みをしていきたい。

手始めとして、白梅まつりなどでは、新たな関係づくりや取り組みを実践し、作り出す側と裏方のあり方を考える機会としたい。

試みとして、市民が主体となってさまざまな事業を企画・立案する機会を提供してみるのはどうだろうか。

■参画・共働（協働） ── 市民と公民館がともに参画し協働するには？

具体的には、市民とともに福生市の行財政分析を行なうことで、公民館の位置付けや職員のあり方などを明らかにしていきたい。

また、自然かんさつ会などに参加するセミプロ的な知識や能力を有する人たちとと

もに、福生のかんさつや調査の実態を映像記録し、福生の自然の側面と人を記録し報告をしていく。

白梅分館のめざすもの

熊川という地域特性を考慮して行なうべき事業と、公民館として全体的に考えるべき事業の２通りに考えて行なうべきではないだろうか。特に全体を対象とする場合、市内全域や福生を含めた三多摩・東京などを視野に入れておこなう事業などがあると思われるからである。

＜熊川地域を対象とした事業＞

1　幼児やその母親を対象とした事業

個人的な移動距離の問題と、コミュニケーションの不足にともなう人的な広がりを持てない環境の人たちである。このような人を対象に、目の前にある課題を解消する手段や考え方の提示は、大きな支えになる。

そして、そのことを集団の中で獲得するという方法論を工夫する必要がある。

・映画会や人形劇や演劇などの鑑賞事業

・保育をともなう母親対象の事業

2　少年を対象とした事業

子どもにとっての移動距離は小学校区内と考えられている。この範囲の中で仲間を知り、地域全体の自然を知ることには限界があるので、公民館として年間を通して地域を知るための機会を提供する意味はある。

しかも、これからは地域の自然環境の意味を理解する「環境教育」の比重が高まる予想があるので、公民館としても今まで以上に対応を検討する必要があると考える。

・子ども同士の共同・協力する力を再発見する（Ex: 自然たんけん隊 '2000）

・子どもにとっての地域の自然のありようを体験する（Ex:夏休み昆虫博士になろう）

3　高齢者を対象とした事業

個人的な移動距離の問題と、コミュニケーションの不足にともなう人的な広がりを持てない環境の人たちである。これらの人々に共通する第一義的な要求は仲間と一緒

に時間を過ごすことであり、健康についての情報収集であると考えられる。しかも身近な内容で話を聞くという体制を求めているので、対応を配慮する必要がある。

特に、今まではひとくくりにしていた「高齢者」を、前期・中期・後期高齢者として位置付け、それぞれの高齢者対象事業を行うことを、研究する。

4　お父さんを対象とした事業

白梅分館としては特別な施設がないので、特別な施設を利用しない内容や、野外で参加できる講座を開設する必要があると考えられる。特に、孤立分散化して、家族中心の生活をしている30代から40代の若い父親には、参加に値する講座を開設する必要が急務であると考えられる。また、定年予備軍としての中年男性を対象とした、生きがいや趣味を開発し、地域での仲間作りのきっかけとなる事業を行う必要がある。

そして、リストラを代表するように、企業や社会全体の構造的変化に対応する、一人の人間としての生き方を考える機会を提供する必要がある。そのことが、生涯学習の中身であり、教育機関の役割になるのではないか。

5　近隣自治体との関係や、今後の“まちの形”を考える事業

福生市としての独自性や歴史的な発展経過、そして今後の福生をどのような方向に導く必要があるのか。市民各自が考えを主張しまとめていく必要がある。

具体的には、市民参加を前提とした福生市の行財政分析を行なうことなどから、市民参加を具体的なレベルで明らかにしていく必要がある。

6　国籍を越えて、日本の文化や日本語学習しようという人を対象とした事業

現在、数多くの国から日本にやってきて福生に暮らす人たちがいる。彼らにも日常生活を快適に暮らす権利があるが、それらに対応するインフォメーションが出されていないというのが現状ではないだろうか。

これらは、ボランティアの人たちとコンピュータを利用することによって、最低限の生活情報を提供できる体制作りをすすめる必要がある。このことから、学習する要求があれば学習の機会を用意したり、交流の希望や内容を検討することからはじめればと考えられる。

7　高齢化にともない発生する、様々な分野に関係する事業

2000年４月から実施された「介護保険」であるが、５日の間に全国で1000件を越える苦情などが寄せられている。福生市も確実に高齢化社会に飲み込まれる（33ページのグラフ参照）が、高齢化社会の中で考えなければならない年金や保険などのことも含め、介護と地域福祉の関係やそこに参画するボランティアとしての市民の育成など、社会福祉協議会や市役所の各機関職員とも連携して事業を展開する必要がある。

8　地域の生活環境に関する事業

ゴミの問題を他の自治体の問題として考えるのではなく、私たちが加害の側に回っているということを中心に、三多摩全域を考えて事業を展開する必要がある。具体的には、昨年から実施されているゴミの分別収集だけではなく、例えば、生ゴミだけを集め一括して肥料を生産し、その肥料を地域の農家に還元して、生産と消費が循環できるようなシステム作りに関わるような研究をすべきではないか。

単にゴミや容器を法律に従って分別・収集して終わるというこではない、新たな循環を提案していくような事業が必要ではないか。

また、地域の自然環境と日常的な生活環境の関連を、各自が自分の足と目で確認しデータを元に考える機会を作ることは、大変意味の大きいことである。

特に、水の側面からみれば、多摩川流域については運命共同体なので、上流域の奥多摩から中流域の福生を含め、河口付近の下流域まで一括して考える必要もある。

9　郷土としての福生の成り立ちやこれからを考える事業

福生市民が福生の成り立ちを知ることは、福生の将来を担う上で必要不可欠なことである。それは、単なる郷土史を知識として学ぶのではなく、現在の福生から過去を知り、人を知ることを通して、将来の福生を大切に思う気持ちを育てるために必要なことである。

10　地域の教育環境に関する事業

子どもたちの遊びは室内で気心の知れた仲間数人で「遊ぶ」ことが主流になっていることが、新聞の調査結果などでも明らかになっている。今日では、地域の教育環境はPTAだけの問題ではなく、そこに暮らす大人共通の問題である。

特に2002年４月からは「学習指導要領」の変更にともない、子どもたちの地域での教育環境については、新たな提案をする必要があるだろう。

11　横田基地に関する問題

横田基地は、軍事基地である。そして、公民館としては軍事的な関連を持つことは犯してはいけない一線であることは論を待たない。

今まで、横田基地住人を対象に公民館事業を行う必要性があるとは思っていなかったが、果たしてそうなのだろうか？基地周辺の商店や住民はどのように考えているのか？リサーチなどを通して、福生の住民にとって本当に横田基地がどのような位置にあるのか、新たな取り組みをする時期に来ているのかもしれない。

特に地元という点で、石原都知事の発言や言動に関心を持たざるを得ない。都知事として考え実行できることと、公民館職員がやれることは異なるので、地元の市民の関心をよく参考にしてすすめていく必要があるだろう。

12　その他

公民館をより多くの市民に理解していただき利用してもらうためには、利用者同士の交流や未利用者を公民館にきてもらう努力を怠ることのないようにすることが必要である。

そのため、公民館利用者交流会の内容の充実、白梅まつりの地域的な広がりのある内容など、利用者の力を結集しよりよい利用法などを考えていくために、多くの時間を裂く必要がある。今後は、公民館主催事業と同様なウエイトをおいて利用者交流会の実施を考える。

自然たんけん隊の様子から

3　最近10年間の白梅分館の実践記録から

（1）幼児対象（保育室）事業の10年

幼児対象保育室事業は、具体的な事業内容の紹介はなく、統計的なデータとして各年度の主催事業一覧の中に数値が記載されている。

以下には、保育室事業以外の幼児対象主催事業を記録するものとする。

1991年度（平成３年度）ちょっと早いクリスマス

白梅分館を利用している共同保育のサークルに呼びかけ、それぞれの持っている力を出し合って、日常的な付合いのある子ども達だけではなく、公民館に関わりのない若い母子に参加の機会を提供し、みんなで楽しい時間を過ごす目的で開いた。

日　時　1991年（平成３年）12月14日　全１回

会　場　白梅分館　２階集会室

参加者　70人

内　容　パネルシアター、リトミック、手あそび、人形劇の上演など

総括　共同保育サークル間の交流はほとんどなく、他のサークルがどのようなことをやっているのかもほとんど知らない状況では、一年に一度でも各サークルの情報交換も含めて交流の機会を用意する必要がある。今後も続けていくつもりである。

1993年度（平成５年度）歌と音楽と人形劇

いままで「うたと音楽と人形劇」をジョイントした、感性を豊かにするプログラムは多く実践されてこなかった。また、子育て期の母親たちは、身近なところで本物の人形劇などを観賞する機会に恵まれているとはいえない状況にあるので、今回は新たな催しとして実施してみた

期　間　1994年（平成６年）３月25日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　140人

出演者　クニ河内

　　人形劇団「ビバボ」

日時	テ　ー　マ	内　　容
3.25	うたと音楽と人形劇	クニ河内さんのうたと音楽、そして、大井弘子さんと人形劇団ビバボによる、幼児むけの人形劇

総括　人形劇にうたとピアノが素晴らしいハーモニーをみせ、幼児から大人までが感心をした。まだ実験的な段階ということだが、今後も新たな可能性を求めて実践をしていきたい。

（2）少年対象事業の10年

1990年度（平成２年度）たんけん教室

身近な丘陵や多摩川などの自然の中で身体を使って仲間と遊ぶことを通して、経験としての自然体験を内在化する。また、林の成り立ちを見て歩いたり、奥多摩の林との比較をする機会として実施した。

期　間　1990年（平成２年）５月12日～1991年（平成３年）３月21日　全17回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵他

参加者　延べ参加者数　240人

講　師　岡田紀夫氏他、ほとんどの回を実技指導員数名で対応した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
5.12	白梅会館	オリエンテーリング	自己紹介とこの教室の紹介など
5.20	滝山丘陵	滝山オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方を知る
6.10	草花丘陵	草花ネイチャーゲーム	草花丘陵での遊びに挑戦する
6.30	白梅会館	自転車点検	自転車の入念な点検
7.1	滝山丘陵	滝山ネイチャーゲーム	自転車を利用し滝山丘陵で遊ぶ
7.18	白梅会館	夏休み打ち合わせ	夏休みの事業の注意点の説明
8.17	滝山丘陵	野宿に挑戦	本来の野外活動の実体を知る
8.18	同上	同　上	近くの滝山丘陵で野宿の体験をした
9.15	天覧山	フリークライミングに挑戦	フリークライミングに挑戦
9.23	草花丘陵	菅生丘陵を歩く	菅生丘陵の自然かんさつ
10.10	滝山丘陵	味覚のたんけん	栗、アケビなどを採集し食べた
10.28	狭山丘陵	狭山丘陵たんけん	狭山丘陵の動植物のかんさつ
12.08	白梅会館	たんけん望年会	今年の活動の様子をふり返る
12.16	滝山丘陵	初冬の滝山丘陵	滝山丘陵の二次林を見て歩く
1.27	草花丘陵	冬の菅生丘陵	冬の菅生丘陵を自転車で歩く
2.11	浅間尾根	冬の山登り	厳冬期の奥多摩浅間嶺登山
3.21	肝要峠	ファミリーハイキング	一年間に身につけた力を披露する

総括　台風や雨天のため中止になったプログラムがあり残念である。しかし、全体的にはかなり順調に実施できた。

子どもたちは自然の中ではほっておいても仲間と草木に働きかけて遊ぶ力は残っているが、全体的に弱くなっている。また、意欲も弱くなっているように思う。

栗ひろいなどにも、関心が深い子どもと全く関心を示さない子どもの差が大きくなっている。今後は、ますますやりにくくなるような気がする。

1991年度（平成３年度）たんけん教室

「仲間との遊びを通して地域での思い出を作る」。これが今年のたんけん教室のテーマで、20回におよぶプログラムを作成した。今年は天候不順で中止になった回数が多く、結果的には12回しか実施出来ず、職員・参加者共に不満が残った。

しかし、一年間を通して地域の中で遊んだことが仲間関係を深く豊かにし、滝山丘陵や多摩川の自然が一層身近に感じることができた。

期　間　1991年（平成３年）５月11日～1992年（平成４年）２月２日　全12回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵

参加者　延べ参加者数　187人

講　師　岡田紀夫氏ほか、実技指導員数名がほとんどの回を対応した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
5.11	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	自己紹介と教室の内容説明など
6.30	滝山丘陵	滝山ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ	地図とコンパスの使い方を学ぶ
7.14	白梅分館	夏休み打合せ	夏休みプログラムの説明など
8.1	滝山丘陵	野宿に挑戦	滝山丘陵の中で、野宿を体験する。夜間には、
8.2	同　上	同　上	昆虫の観察も行う
8.4	大丹波川	沢のぼりに挑戦	自然の川の中を、洋服を着たまま上る
9.15	滝山丘陵	滝山ﾈｲﾁｬｰｹﾞｰﾑ	滝山の林を使った遊びを考える
9.22	草花丘陵	何でも食べよう	草花丘陵で秋の味覚の栗を食べてみる
11.10	狭山丘陵	狭山丘陵の自然	佐山丘陵と滝山丘陵の比較をする
11.23	横沢入	横沢の自然観察	五日市町の横沢の自然や環境を観察
12.7	白梅分館	子ども忘年会	今年の活動をVTRなどで振り返る
12.15	滝山丘陵	滝山ﾈｲﾁｬｰｹﾞｰﾑ	初冬の滝山丘陵でネイチャーゲーム
2.2	滝山丘陵	同　　上	雪の残る滝山丘陵で雪と遊ぶ

総括　今年度は天候不順のために、予定した約半分の内容しか実施できなかった。しかし、滝山丘陵を利用したネイチャーゲームは、かなり多くのことができた。毎年、ネイチャーゲームを数多く取り入れてみることにより、福生的な環境教育のテキストが完成出来ると思っている。

参加する子ども達に関して言えば、年々、自然環境に働き掛けることを避けたがる傾向にあり、自然の草木から関心が薄れ、益々地域の自然環境とかけはなれた生活をすることになる。

その意味でも、地域の自然・環境と自分の生活の成り立ちの両面から考えられるような環境教育の必要性は、今後高まることが十分予想される。

1991年度（平成３年度）夏休み自然教室

福生の川原でも最近まで日常的に見ることができた「カワラバッタ」が減少しているらしいとのことで、バッタの生活や生息状況を調べてみた。

期　間　1991年（平成３年）７月29日～８月28日　全５回

会　場　白梅分館・多摩川

参加者　延べ参加者数　20人

日時	会　場	テーマ	内　　容	講　師
7.29	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	教室の説明など	
8.9	かに坂公園	昆虫の観察	土手の昆虫を中心に観察	栗原　仁氏
8.16	中央公園	同　上	トノサマバッタの捕獲実験などを行う	同　上
8.26	南公園	同　上	川原の中で主にカワラバッタを探す	同　上
8.28	白梅分館	まとめ	今までの観察結果をまとめる	

総括　8月に入ると、昆虫は成虫になっていた。クルマバッタは少なくなっていたが、確認された。しかし、カワラバッタはついに確認することができなかった。

トノサマバッタのオスを黒い木片でつろうとしたが、関心を示したくらいに留まった。クルマバッタモドキのオスは関心を示した後で飛び乗った。

カワラバッタについては、数年調査を続ける必要があると思った。

1992年度（平成４年度）たんけん教室

「身近な多摩川や滝山丘陵で徹底的にあそぼう」。これが今年のたんけん教室のテー

マで、20回におよぶプログラムを作成した。今年は天候にも恵まれ、予定の回数や内容をほぼ実施できた。

一年間を通して地域の中で遊んだことが仲間関係を深く豊かにし、多摩川や滝山丘陵の自然を一層身近に感じることができた。

期　間　1992年（平成４年）５月16日～1993年（平成５年）３月28日　全16回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵

参加者　延べ参加者数　206人

講　師　岡田紀夫氏ほか、実技指導員数名がほとんどの回を対応した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
5.16	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	自己紹介と教室の内容説明など
5.31	滝山丘陵	滝山ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ	地図とコンパスの使い方を学ぶ
6.14	草花丘陵	草花ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ	地図とコンパスの使い方を学ぶ
7.19	多摩川	どろんこあそび	多摩川でどろの中を裸足であそぶ
7.26	大丹波川	沢のぼりに挑戦	自然の川の中を、洋服を着たままのぼる
7.30	滝山丘陵	野宿に挑戦！	滝山丘陵の中で、一日の移り変わりを体験する
7.31	同　上	同　上	同　　上
9.13	多摩川	ﾊﾞｰﾄﾞｳｫｯﾁﾝｸﾞ	多摩川の野鳥をかんさつする
9.23	草花丘陵	何でも食べる！	草花丘陵で栗とあけびを食べる
10.10	滝山丘陵	滝山の秋を探す	滝山丘陵の植物や昆虫を観察
11.03	狭山丘陵	オオタカを探す	狭山丘陵のオオタカをかんさつする
11.22	多摩川	焼き芋ごろごろ	川原の枯れ枝などで焼き芋を作る
12.20	滝山丘陵	冬のﾈｲﾁｬｰｹﾞｰﾑ	滝山丘陵で落ち葉などであそぶ
1.31	草花丘陵	冬の二次林	枯れ葉のつもる山道を楽しく歩く
2.11	三頭山	雪合戦をやろう	雪山の寒さや楽しさを体験する
3.28	御岳山	ﾌｧﾐﾘｰﾊｲｷﾝｸﾞ	家族や仲間と一緒にハイキング

総括　今年は多摩川と滝山丘陵を利用した遊び（ネイチャーゲーム）が、かなり多くの成果をあげることができた。福生的な遊び場の開発や遊びながら自然の仕組みや働きを覚える機会を、これからも継続していく必要性を感じているが、何といってもスタッフを育てる問題が急務だと考えている。そのような意味で、職員が研修をする場が必要ではないだろうか。

参加する子ども達に関して言えば、年々、自然の草木から関心が薄れ、益々地域の自然環境とかけはなれた生活をしているようにみえる。その意味でも、地域の自然・環境と自分の生活の成り立ちの両面から考えられるような環境教育の必要性は、今後高まることが十分予想される。

1992年度（平成４年度）夏休み自然教室

昨年に続き、市内の多摩川原の昆虫を中心にかんさつをした。特に「カワラバッタ」が減少しているとのことなので、バッタの生活や生息状況を調べてみた。

期　間　1992年（平成４年）７月29日～８月24日　全４回

会　場　白梅分館・多摩川

参加者　延べ参加者数　20人

日時	会　場	テーマ	内　容	講　師
7.29	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	教室の説明など	
8.10	中央公園	昆虫の観察	川原の観察やバッタの捕獲実験などを行う	栗原　仁氏
8.17	南公園	同　上	川原の中で、主にカワラバッタを探す	同　上
8.24	かに坂公園	同　上	川原の中で、バッタの捕獲と調査	同　上

総括　昨年からはじめた多摩川のカワラバッタの調査。夏の間に見つけることができなかったが、10月になってやっと一匹見つかった。夏休み以降もさがしていた子どもが、ついにみつけたが、なんともさびしいかぎりである。来年も引き続き調査を続けたい。

1993年度（平成５年度）たんけん教室

「多摩川や滝山丘陵でネイチャーゲームなどをしてあそぼう」。これが今年度のたんけん教室のテーマで、約20回におよぶプログラムを作成した。今年度は天候にも恵まれ、予定の回数や内容をほぼ実施できた。

期　間　1993年（平成５年）４月24日～1994年（平成６年）３月27日　全18回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵

参加者　延べ参加者数　207人

講　師　岡田紀夫氏ほか、実技指導員数名がほとんどの回を対応した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
4.24	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	自己紹介と教室の内容説明など
5.16	滝山丘陵	滝山ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ	地図とコンパスの使い方を学ぶ
6.13	滝山丘陵	滝山ﾈｲﾁｬｰｹﾞｰﾑ	丘陵の地形や植物などで遊びを考える
7.4	草花丘陵	草花ｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ	草花の地形を利用してのｵﾘｴﾝﾃｰﾘﾝｸﾞ
7.29	滝山丘陵	野宿に挑戦！	滝山丘陵の中で、一日の移り変わりを体験する
7.30	同　上	同　上	同　上
8.19	大丹波川	沢のぼりに挑戦	洋服を着たまま沢を上流に向かって歩く
9.12	狭山丘陵	ｻｼﾊﾞｳｵｯﾁﾝｸﾞ！	狭山丘陵のサシバやオオタカの観察
9.26	草花丘陵	何でも食べる	草花丘陵の栗やアケビを食べる
10.10	滝山丘陵	滝山再発見	いつもとちがう滝山丘陵を見つける
10.17	富士山	富士山の自然	富士山の秋の植物を見に行く
11.14	草花丘陵	秋の草花丘陵	「横沢入」の紅葉の様子を観察する
11.23	草花丘陵	二次林を見る	二次林と利用の状況を見てあるく
12.19	滝山丘陵	焼き芋をつくる	秋川で枯れ枝で芋を焼く
12.25	白梅会館	たんけん忘年会	活動をＶＴＲなどでふりかえる
2.11	棒ノ折山	雪合戦に挑戦	雪山の体験と大勢で雪合戦を楽しむ
3.23	白梅会館	ミーティング	ファミリーハイキングの打合せ
3.27	滝山丘陵	ﾌｧﾐﾘｰﾊｲｷﾝｸﾞ	家族や仲間と一緒にハイキング

総括　滝山丘陵を利用した遊び（ネイチャーゲーム）が、かなり多くの成果をあげることができた。自然を利用して遊ぶためには、人間、場所、プログラムの３つが必要だと言われているが、福生的な遊び場の開発、遊びながら自然の仕組みや働きを伝えることのできるリーダー、そしてそれらのリーダーを育てるプログラムそのものはまだまだ充分ではない。そのような意味で、職員が研修をする場が必要で急務な課題ではないだろうか。

参加する子ども達に関して言えば、ますます自然の草木から関心が薄れ、ますます地域の自然環境とうすい生活をしている。その意味でも、地域の自然・環境と自分の生活の成り立ちの両面から考えられる境教育の必要性は、今後ますます重要性が高まると思うのだが、時間と施設、スタッフが不足している。

1993年度（平成５年度）夏休み川原で遊ぶ

昨年に続き、市内の多摩川で「カワラバッタ」を探してあるき、川原での遊びをいろいろと実験してみた。

期　間　1993年（平成５年）７月27日～８月24日　全４回

会　場　白梅分館・多摩川

参加者　延べ参加者数　20人

日時	会　場	テーマ	内　　容	講　師
7.27	白梅分館	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	教室の説明など	
8.3	かに坂公園	魚を知る	川原で魚を手で捕まえてみる	栗原　仁氏
8.17	中央公園	バッタを知る	川原の中で、主にカワラバッタを探す	同　上
8.24	南公園	同　上	川原の中で、バッタの捕獲と調査	同　上

総括　一昨年からはじめた多摩川のカワラバッタの調査。昨年の10月になってやっと一匹見つかったが、今年度はついに見つけることができなかった。また、川原に対する子どもたちの意識が、子どもたちで「自由に創造できる遊びの空間」という意識がなくなっていることが、少々気がかりである。

1994年度（平成６年度）たんけん教室

「滝山丘陵でいろいろな遊びを体験しよう」。これが今年度のたんけん教室のメインテーマで、約20回におよぶプログラムを予定した。しかし、今年度は天候に恵まれず、予定の回数や内容を満足には実施できなかった。

期　間　1994年（平成６年）５月７日～1995年（平成７年）４月２日　全14回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵

参加者　延べ参加者数　109人

講　師　岡田紀夫氏ほか、実技指導員数名を依頼した。ほとんどの回を実技指導員で対応した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
5.7	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容説明
6.12	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
7.23	大丹波川	沢のぼり	洋服を着たまま川で泳ぐ
8.10	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で

8.11	同　上	同　上	一日を過ごす体験をする
9.11	狭山丘陵	トトロの森たんけん	自転車で狭山丘陵を観察にいく
9.23	草花丘陵	なんでも食べよう	クリやアケビを探して食べる
10.16	滝山丘陵	滝山再発見	滝山でもクリを探してみる
11.13	滝山丘陵	笛を作ろう	シノタケを使って手作りの笛を作る
12.18	滝山丘陵	枯れ葉で遊ぶ	滝山丘陵で枯れ葉を使った遊び
12.22	白梅分館	たんけん望年会	今年を振り返って話し合う
2.4	白梅分館	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱を作る
2.11	浅間嶺	雪山に挑戦	冬の二次林の様子を観察する
3.19	長淵丘陵	二次林観察	長淵丘陵の自然の様子を観察する
4.2	滝山丘陵	ファミリーハイキング	親や友人を誘ってハイキング

総括　昨年同様多くの時間をさいて滝山丘陵で遊んだが、参加者は、滝山の地形や植物の様子が分かってきたようだ。滝山の生物一般の様子を知ることは一番大きな目的ではないが、遊びの中で生物の種類をおぼえていくことは重要なことだと思われる。

今後も、身近な生物の様子などを遊びを通して観察することを増やしていきたいと考えている。

1994年度（平成６年度）子ども昆虫博士になろう

昨年まではカワラバッタを集中的に追いかけ、そのことから川原の昆虫の生態系の変化をみようとしていたが、今年は、草花丘陵や滝山丘陵、そして富士山などの昆虫もみてみようと計画してみた。

期　間　1994年（平成６年）７月26日～８月30日　全６回

会　場　白梅分館・多摩川・草花丘陵・滝山丘陵・富士山

参加者　延べ参加者数　41人

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容	講　師
7.26	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容紹介	栗原　仁氏
8.2	かに坂公園	水辺の昆虫	トンボや水生昆虫の観察	〃
8.9	草花丘陵	林の昆虫	セミと甲虫を観察する	〃
8.16	滝山丘陵	林の昆虫	シデムシやカナブンの観察	〃

8.23	富士山	富士山の自然観察	富士山と福生の自然の比較	〃
8.30	南公園	鳴く虫の観察	コオロギなどの鳴く構造の観察	〃

総括　今年度は、身近な林まで観察対象を広げてみた。さすがに富士山とは比較にはならないが、セミや小さな甲虫はなんとか見られる。しかし、昆虫を気持ち悪い対象物と考えている子どももいて、昆虫や身近な植物に、日常的に関心を持っていないことがよく分かった。

1995年度（平成７年度）自然たんけん隊'95

昨年度に引き続き、滝山丘陵でできるだけ自然との体験を通して感性を育む機会として実施した。20回以上のプログラムを予定したが今年度は天候にも恵まれ、予定の回数や内容をほぼ実施できた。今後も、身近な生物の様子などを、遊びを通して観察することを増やしていきたいと考えている。

期　間　1995年（平成７年）４月26日～1996年（平成８年）４月７日　全18回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵など

参加者　延べ参加者数　228人

講　師　岡田紀夫氏ほか、実技指導員数名を依頼した。

日時	会場	テーマ	内容
4.26	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容説明
5.21	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.18	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
7.23	大丹波川	沢のぼり	洋服を着たまま川で泳ぐ
8.1	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で
8.2		〃	一日を過ごす体験をする
9.9	市内公園	フリークライミング	自分の手足で岩山に登ってみる
9.23	草花丘陵	なんでも食べよう	クリやアケビを探して食べる
10.14	滝山丘陵	なんでも食べよう-2	滝山でジネンジョなどを食べる
11.23	多摩川原	焼き芋を作る	川原で、焼き芋パーティー
12.9	滝山丘陵	枯れ葉で遊ぶ	滝山丘陵で枯れ葉を使った遊び
12.26	白梅分館	たんけん望年会	今年を振り返って来年を話し合う
1.15	多摩川原	ウサギ追い	川原でウサギを追いかけてみる

2.11	高水三山	雪山に挑戦	冬の二次林と降雪の様子を観察する
3.16	白梅分館	ミーティング	ファミリーハイキングの内容の決定
3.20	滝山丘陵	下見調査	ファミリーハイキングの下見調査
3.27	白梅分館	資料作成	下見調査からパンフレットを作成
4.7	滝山丘陵	ファミリーハイキング	親や友人を誘ってハイキング

1995年度（平成７年度）子ども昆虫博士になろう

今年は、多摩川や草花丘陵・滝山丘陵の昆虫を観察したが、若干時期的に早かったためか、数は多く見られなかった。数年前から観察を続けているカワラバッタは、７月に２匹見られたに過ぎなかった。今後もカワラバッタの動向と川原に生活する他のバッタや昆虫も観察し、変化を記録する必要があると思われる。

最近では、午前中の野外でのプログラムへの参加者が少なくなっている。夏休みに入ると公園や川原から子どもの姿が消えてしまうのは、学校のプール参加が多いためだと思われるが、夏休みには学校のプールへ以外にも、見るべきものがあるということを伝える方が大変な感じがする。

期　間　1995年（平成７年）７月25日～８月８日　全４回

会　場　多摩川・草花丘陵・滝山丘陵

参加者　延べ参加者数　16人

日時	会場	テーマ	内容	講師
7.25	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容紹介	栗原　仁氏
7.28	かに坂公園	水辺の昆虫	トンボや水生昆虫の観察	〃
8.3	草花丘陵	林の昆虫	セミと甲虫を観察する	〃
8.8	滝山丘陵	林と草原の昆虫	シデムシやカナブンの観察	〃

1996年度（平成８年度）自然たんけん隊’96

昨年度に引き続き、近隣の多摩川や滝山丘陵で、ほぼ同年代の仲間と自然の中での直接体験を通して感性を育む機会として実施した。20回以上のプログラムを予定したが天候にも恵まれ、予定の回数や内容をほぼ実施できた。

今後も、身近な生物の様子などを遊びを通して観察することを増やしていきたい。

期　間　1996年（平成８年）４月27日～1997年（平成９年）４月13日　全19回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵など
参加者　延べ参加者数　233人
講　師　佐久間直冬氏などの実技指導員数名を依頼した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
4.27	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容説明
5.19	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
5.25	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.2	草花丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.22	横沢入	ヘビをみつけよう	谷戸で生活する生物を実際にみる
7.30	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で
7.31		〃	一日を過ごす体験をする
8.3	大丹波川	沢のぼり	洋服を着たまま川で泳ぐ
9.28	草花丘陵	なんでも食べよう	クリやアケビを探して食べる
11.3	市内公園	フリークライミング	自分の手足で岩山に登ってみる
11.17	生藤山	なんでも食べよう-2	滝山でジネンジョなどを食べる
12.8	多摩川原	焼き芋を作る	川原で、焼き芋パーティー
12.14	巣箱作り	シジュウカラ用巣箱	シジュウカラの利用する巣箱を作る
12.22	滝山丘陵	枯れ葉で遊ぶ	滝山丘陵で枯れ葉を使った遊び
12.26	白梅分館	たんけん望年会	今年を振り返って来年を話し合う
3.11	雪合戦	冬山を体験する	雪のある浅間嶺で雪と遊ぶ
3.8	多摩川原	ウサギ追い	川原でウサギを追いかけてみる
3.22	白梅分館	資料作成	ファミリーハイキング資料作成
4.13	滝山丘陵	ファミリーハイク	親や友人を誘ってハイキング

1996年度（平成８年度）夏休み昆虫をさがそう

今年は、市内公園・多摩川・高月下の草原で昆虫を観察したが、数は多く見られなかった。しかし、数年前から観察を続けているカワラバッタは10匹近く（大量に）みられ、驚いた。

市内を流れる多摩川は、この11年間ほど大水がなく安定した植生となっているためか、昆虫も限られた少数種が多数みられる傾向にある。引き続き、川原の移り変わり

を調べて昆虫の状況などと比較する意味は大きいと思う。

最近では、午前中の野外でのプログラムへの参加者が少なくなっている。夏休みに入ると公園や川原から子どもの姿が消えてしまうのは、学校のプール参加が多いためだと思われる。子どもの中にはプールが嫌いな子どももいるが、すべての子どもが昆虫を探しに参加するとも思えない。

夏休みには学校のプールへ以外にも、楽しく地域の有り様をみるような機会を提供していかないと、ますます子どもは夏休みは涼しいところでゲーム三昧ということになってしまうのではないか。

期　間　1996年（平成８年）７月24日～８月27日　全６回

会　場　多摩川・草花丘陵・滝山丘陵

参加者　延べ参加者数　30人

日時	会場	テーマ	内容	講師
7.24	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容紹介	栗原仁氏
8.1	かに坂公園	土手の昆虫	土手で観察できるバッタ類	〃
8.7	中央公園	草原の昆虫	草原の昆虫や甲虫など	〃
8.14	南公園	川原の昆虫	川原でカワラバッタを中心に	〃
8.21	高月下草原	草原の昆虫	林の近くの昆虫を中心に	〃
8.28	白梅会館	まとめ	観察記録から昆虫の生活をみる	〃

1997年度（平成９年度）自然たんけん隊’97

異年齢集団で、近隣の多摩川や滝山丘陵で遊びや共同・協力する直接体験を通して、人・自然に対して豊かな感性を育む機会として実施した。今年は天候にも恵まれ、予定の回数や内容をほぼ実施できた。今後も、身近な生物の様子などを遊びを通して観察することを増やしていきたい。

期　間　1997年（平成９年）４月26日～1998年（平成10年）４月５日　全23回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵など

参加者　延べ参加者数　339人

講　師　佐久間直冬氏などの実技指導員数名を依頼した。

日時	会場	テーマ	内容
4.26	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介ゲームと教室の内容説明

5.17	中央公園	コンパスと遊ぶ	ゲームをしながらコンパスに親しむ
6.15	滝山丘陵	林の中で鬼ごっこ	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.28	滝山丘陵	ターザンごっこ	林の中でロープを使って遊ぶ
7.26	多摩川	川原で遊ぶ	夏の川原ではどんな遊びができる？
8.7	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で一日
8.8	同　上	同　上	を過ごす体験をする
8.17	大丹波川	沢上り	洋服を着たまま川で泳ぐ
8.30	秋川上流	水源地を訪ねる	平井側の上流を実際に見てみる
9.27	草花丘陵	なんでも食べちゃおう	栗やアケビを探して食べてみる
10.10	狭山丘陵	林の中で遊ぶ	狭山丘陵の中で遊びをさがす
10.25	滝山丘陵	遊びを作る	滝山の中で篠竹で遊び道具を作る
11.8	棒の折山	奥多摩たんけん	秋の奥多摩へたんけんにいく
11.23	草花丘陵	もみじをさがす	紅葉している葉をさがす
12.7	滝山丘陵	枯れ葉であそぶ	落ち葉の中へもぐってみよう
12.14	多摩川原	焼き芋を作る	川原で焼き芋パーティ
12.26	白梅分館	たんけん望年会	今年をふり返って来年を話し合う
1.11	多摩川	まゆだまを見る	羽村市郷土資料館へ出かける
2.11	雪合戦	冬山を体験する	雪のある臼杵山で雪と遊ぶ
3.7	白梅分館	ハイキング打合せ	ファミリーハイクの行き先を相談
3.14	滝山丘陵	下見調査	ファミリーハイクの下見調査
3.18	白梅分館	資料作成	ファミリーハイク資料作成
4.5	滝山丘陵	ファミリーハイク	親や友人を誘ってハイキング

1997年度（平成９年度）夏休み昆虫をさがそう

市内の公園・多摩川・高月下の草原で昆虫を観察したが、数は多く見られなかった。数年前から観察を続けているカワラバッタが10匹見られたのは、大きな収穫だった。

市内を流れる多摩川は、ここ12年間ほど大水がなく安定した植生となっているためか、昆虫も限られた少数種が多数みられる傾向にある。引き続き、川原の移り変わりを調べて昆虫の状況などと比較する意味は大きいと思う。全体的には、生息状況が好転している様子ではないように思われる。

夏の川原は暑く、野外で遊んでいる子どもの姿はほとんど見られなかった。夏休みには学校のプール以外にも、楽しく地域の有様をみるような機会を提供していかないと、ますます子どもは夏休みは涼しいところでゲーム三昧ということになってしまうのではないか。

子どもだけの問題ではないが、何とかして野外で遊ぶ子どもの姿を多くする必要があると思う。

期　間　1997年（平成９年）８月１日～８月26日　全５回
会　場　多摩川・草花丘陵・滝山丘陵
参加者　述べ参加者数　31人
講　師　栗原　仁氏

日時	会　場	テーマ	内　容
8.1	かに坂公園	土手の昆虫	土手で観察できるバッタ類をみつける
8.5	中央公園	草原の昆虫	草原の昆虫や甲虫などの観察
8.12	高月下草原	草原の昆虫	林の近くの昆虫を中心に観察
8.19	南公園付近	川原の昆虫	川原でカワラバッタを中心に観察
8.26	白梅分館	まとめ	観察記録から、昆虫の生活を見る

1998年度（平成10年度）自然たんけん隊’98

近隣の多摩川や滝山丘陵で、ほぼ同年代の仲間と自然の中での直接体験を通して感性を育む機会として実施した。

担当職員が膝のけがのため後半の回数が減少してしまい、若干ものたらない部分も残った。しかし、今年の収穫としては大学生から高校生のリーダー層が厚くなり、ますます参加者同士の交流が深まってきて、おもしろい異年齢の集団になりつつある。今後も、身近な生物の様子などを遊びを通して観察することを増やしていきたい。

期　間　1998年（平成10年）４月25日～1999年（平成11年）４月３日　全19回
会　場　白梅分館・多摩川・草花丘陵・滝山丘陵・狭山丘陵など
参加者　述べ参加者数　231人
講　師　佐久間直冬氏などの実技指導員数名を依頼した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　容
4.25	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容説明

5.16	中央公園	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.7	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.27	滝山丘陵	オリエンテーリング	林の中でロープで遊ぶ
7.11	多摩川	多摩川の魚を食べる	多摩川の魚を捕まえて食べる
8.19 8.20	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で一日を過ごす体験をする
9.12	玉川上水	玉川上水たんけん	玉川上水の歴史を歩いて調べる
9.23	滝山丘陵	なんでも食べよう	栗やアケビを探して食べる
10.10	狭山丘陵	トトロはいるか？	狭山丘陵に出かけ、トトロの森をみる
11.3	横沢入	横沢入の風景を見る	貴重な景観となった横沢入をみる
11.15	滝山丘陵	笛をつくる	篠竹を利用して手作りの笛作りに挑戦する
11.29	多摩川	焼き芋を作る	川原の流木などを集め、焼き芋をする
12.13	滝山丘陵	枯れ葉で遊ぶ	枯れ葉を集め、様々な遊びをおこなう
12.25	白梅分館	たんけん望年会	今年をふり返って来年を話し合う
1.15	多摩川	川原で遊ぶ	市内の川原の中をたんけんする
3.13	白梅分館	打ち合わせ	ファミリーハイクの打ち合わせ
3.27	白梅分館	資料作成	ファミリーハイクの資料作成
4.3	滝山丘陵	ファミリーハイク	親や友人を誘ってハイキングにいく

1998年度（平成10年度）　夏休み昆虫をさがそう

今年も市内公園・多摩川・高月下の草原で昆虫を観察したが、数は多く見られなかった。しかも、今年はついにクルマバッタをみることがなかった。数年前からトノサマバッタやカワラバッタとともに姿をみることができにくい種となってしまった。しかし、ここ数年前からずっと観察を続けているカワラバッタは10匹近く（大量に）みられ喜んだ。

市内を流れる多摩川は、1998年８月と９月に５千トン/秒という大水が流れたが、13年ほど大水が出なかったため、乾燥域と流路の段差が大きくなり、河川の中の生物の構成種に変化が見られ出している。今後も川原の移り変わりを調べて昆虫の状況などと比較する意味は大きいと思う。

最近では、夏休みに入ると公園や川原から子どもの姿が消えてしまうのは、涼しい

ところでゲーム三昧ということになっているようだ。しかし、身近な野外でもある川原の楽しみかたを覚える機会を容易しておかないと、「生命観」が身に付かなくなってしまう。この感性の部分は大人になってからでは身に付かないと言われているので、今後も参加者は多くはないだろうが続けていく価値はあると思う。

期　間　1998年（平成10年）７月28日～８月28日　全６回

会　場　多摩川・草花丘陵・滝山丘陵

参加者　述べ参加者数　32人

講　師　栗原　仁氏

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
7.28	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と内容紹介
8.6	かに坂公園	土手の昆虫	土手で観察できるバッタ類をみつける
8.11	中央公園	川辺の昆虫	川辺の昆虫や草原の昆虫かんさつ
8.21	南公園	川原の昆虫	川原でカワラバッタを中心に観察
8.25	高月下草原	草原の昆虫	林の近くの昆虫を中心に
8.28	白梅分館	まとめ	観察記録から、昆虫の生活を見る

1999年度（平成11年度）自然たんけん隊'99

近隣の多摩川や滝山丘陵で、自然の中での直接体験を通して感性を育む機会として実施した。

今年の収穫としては大学生から高校性のリーダー層が厚くなり、ますます参加者同士の交流が深まってきて、おもしろい異年齢の集団になりつつある。反面、参加する子どもの数が減少し、集団の規模が小さくなりつつある。孤立化しつつある子ども集団の中で、友達の“圧力”を感じ、実際の草木のにおいや風を感じる必要はますます大きいと思われているが、実際には継続が難しくなりつつある。

期　間　1999年（平成11年）５月３日～2000年（平成12年）４月８日　全24回

会　場　白梅分館・多摩川・滝山丘陵・草花丘陵・狭山丘陵など

参加者　延べ参加者数　169人

講　師　増尾和彦氏・佐久間直冬氏などの他、実技指導員数名を依頼した。

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
5.3	中央公園	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習

6.12	滝山丘陵	オリエンテーリング	地図とコンパスの使い方の実践練習
6.27	滝山丘陵	オリエンテーリング	林の中でロープで遊ぶ
7.9	白梅分館	スタッフ会議	夏の行事を前に役割分担などの確認
7.11	多摩川	多摩川の魚を釣る	多摩川の魚を釣ってみる
7.25	丹波川	沢のぼりに挑戦	夏の沢のぼりを体験する
8.3	柳山公園	野宿に挑戦	野外で生活するための最小の装備で
8.4		〃	一日を過ごす体験をする
9.12	玉川上水	玉川上水たんけん	玉川上水の歴史を歩いて調べてみる
10.3	滝山丘陵	なんでも食べよう	クリやアケビを探して食べる
10.10	狭山丘陵	ワシ・タカはいるか？	狭山丘陵に出かけ、ワシタカを見る
10.31	横沢入	横沢入の風景を見る	貴重な景観となった横沢入を見る
11.23	多摩川	焼き芋を焼く	川原の流木などを集め、焼き芋をする
12.11	中央公園	炭焼きに挑戦	自作ドラム缶の竈で炭をやく
12.12	〃	〃	作った炭で家族や仲間とバーベキュー
12.19	滝山丘陵	枯れ葉で遊ぶ	枯れ葉を集めて、様々な遊びを行う
12.23	白梅分館	たんけん望年会	今年を振り返って来年を話し合う
1.9	多摩川	川原遊び	市内の川原でウサギやキジを探す
2.11	草花丘陵	歩いて帰る	日の出町から草花丘陵を歩いて帰る
3.10	白梅分館	スタッフ会議	ファミリーハイキングの準備と役割
3.18	白梅分館	打ち合わせ	ファミリーハイキングの打ち合わせ
3.30	滝山丘陵	下見調査	現地を下見して、遊びの中身を考える
3.31	白梅分館	資料作成	ファミリーハイキング資料作成
4.8	滝山丘陵	ファミリーハイク	親や友人を誘ってハイキング

1999年度（平成11年度）夏休み昆虫博士になろう

今年も市内公園・多摩川・高月下の草原で昆虫を観察したが、全体的な数は多く見られなかった。しかも、今年はクルマバッタ、カワラバッタ両種の姿を見ることができなかった。

市内を流れる多摩川は、1999年８月中旬に５千トン／秒以上という大水が流れたが、その影響なのかカワラバッタが姿を見せなくなってしまった。今後も、川原の移り変

わりを調べて昆虫の状況などと比較する意味は大きいと思う。

最近では、夏休みに入ると公園や川原から子どもの姿が消えてしまうのは、涼しいところでゲーム三昧ということになっているようだ。しかし、身近な野外でもある川原の楽しみ方を覚える機会を用意しておかないと、「生命観」が身に付かなくなってしまう。この感性の部分は大人になってからでは身に付かないと言われているので、今後も参加者は多くはないだろうが続けていく価値はあると思う。

期　間　1999年（平成11年）７月28日～８月26日　全５回

会　場　多摩川・滝山丘陵

参加者　延べ参加者数　21人

講　師　栗原　仁氏

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容
7.28	白梅分館	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容紹介
8.5	かに坂公園	土手の昆虫	土手で観察できるバッタ類
8.12	中央公園	川辺の昆虫	川辺の昆虫や草原の昆虫など
8.19	南公園	川原の昆虫	川原でカワラバッタを中心に
8.26	高月下草原	草原の昆虫	林辺の昆虫を中心に

（3）女性対象事業の10年

1990年度（平成２年度）幼児教育学級「たのしい子育てひろば」

期　間　1990年（平成２年）11月15日～1991年（平成３年）３月14日　全15回

会　場　白梅会館

参加者　延べ参加者数　225人

日時	テーマ	内　　容	講　師
11.15	内容紹介	保育室事業参加の話し合い	
11.22	内容紹介	母親の自己紹介、幼児教育学級の進め方	
11.29	幼児期の発達 I	幼児期の発達と原体験	大堀容子氏
12.6	幼児期の発達 II	子どもの動作・行動から心の発達	大堀容子氏
12.13	子育て交歓　I	私の子育て、生活づくり	
12.20	保護者学習会 I	保育室での子どもの様子	保育者
1.10	非行の芽	少年非行と幼児期の子育て	川辺　進氏
1.17	子育て交歓　II	保育室参加の経過から。女性の現状	
1.24	保護者学習会 II	保育室での子どもの様子。父親参加	
1.31	非行の芽	自然の中で豊かな感性を育てよう	川辺進氏
2.7	子育て交歓　III	私たちの生活・人生設計について	
2.21	遊び場作り	世田谷プレーパーク、子どもの成長	天野秀昭氏
2.27	保護者学習会 III	保育室での子どもの様子。家事とは	保育者
3.7	遊び場作り	プレーパーク「親・おとなの活動」	天野秀昭氏
3.14	保護者学習会 IV	子どもの変化、私たちの今後の活動	

総括　終了後、公民館で自主保育活動を開始し、市内の公園で集う活動も実施されている。

1990年度（平成２年度）身近な自然環境を考える

子育て中のお母さんを対象に、公園についての利用方法や今後の利用についてのノウハウを提供する機会とした。

また、特に身近な環境に関心を持つ必要性を理解してもらうよう、プログラムした。

期　間　1990年（平成２年）５月23日～10月３日　全15回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　120人

日時	テーマ	内　　容	講　師
5.23	オリエンテーション	自己紹介、教室の内容説明	
5.30	調査報告1	子どもが遊んでいる公園を調べる	
6.6	調査報告2	子どもが遊んでいる公園を調べる	
6.13	身近な自然と子ども	自然の中で遊ぶことの大切さ	宮岡一雄氏
6.20	自然観察の意味	身近な自然環境を観察記録する意味	藤本和典氏
6.27	保育学習会	運営会議の報告と日頃の保育の様子	佐々木京子氏
7.4	ナショナルトラスト	狭山丘陵のトトロ基金とは何か？	池谷文夫氏
7.11	身近な自然の利用	身近な自然の具体的な利用方法	高橋千尋氏
7.18	保育学習会	運営会議の報告と日頃の保育の様子	坂本由美子氏
8.29	夏休みを経て	夏休みの過ごし方を点検する	
9.5	保育学習会	運営会議の報告と日頃の保育の様子	宍戸夏子氏
9.12	公園の環境デザイン	公園の使い方を専門家の視点から聞く	仙田　満氏
9.19	福生市のイメージ	市政世論調査用紙を参加者が分析	
9.26	東京都の公園	都の公園職員から公園利用を聞く	倉本　宣氏
10.3	保育学習会・まとめ	通常の保育学習会と今回のまとめ	

1990年度（平成2年度）婦人のひろば

子育て以後の婦人の仲間作り、ライフスタイルの形成を目標に、今回日常生活に直接役立つ“年賀はがきを水墨画”でを中心に、以下のように実施した。

期　間　1990年（平成2年）11月19日～1991年1月28日　全5回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　75人

日時	内　　容	講　師
11.19	高齢期を地域で健康的に生きるため	吉野チエ氏
11.26	年賀はがきを水墨画　I	山添地恵氏
12.3	年賀はがきを水墨画　II	山添地恵氏
12.10	年末親睦会（私の1年）	

1.28　水墨画個々作品仕上げ　山添地恵氏

総括　公民館とグループの共催事業として実施し、以後新たなメンバーを加え自主活動へ。

1991年度（平成３年度）人形劇を創る

人形劇を創るということは、人形の頭・衣服・背景・小道具などの他、シナリオも作って上演するまでのことを含んでいる。この作業に、乳幼児を抱える母親に参加してもらい、お互いの子育ての情報交換を通して、閉塞状況の女性の日常を考える機会として実施した。なお、この教室は約半数の外国人女性にも参加してもらったが、日本人であろうと外国人であろうと、女性の抱えている問題は変わらないし、特に外国人女性にとっては、日本の生活習慣・言葉・文字など、日常生活に重要な情報交換の場になると考えたからでもある。

期　間　1991年（平成３年）５月31日～９月27日　全17回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　210人

講　師　原嶋卓三氏、補助講師として榎本隆氏

日時	テーマ	内　容
5.31	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	各自の自己紹介と教室の説明など
6.7	自己紹介	各自の生い立ちや福生にすむことになった理由など
6.14	同 上	同　上
6.21	人形の製作１	人形劇についての話を聞き、シナリオの製作にはいる
6.28	人形の製作２	人形の頭の製作に入る
7.5	保育室学習会	運営会議のテーマにそって、子育てを語り合う
7.11	人形の製作３	衣服や手などの製作などの小道具の製作
7.12	人形の製作４	同上
7.18	人形の製作５	背景などの製作に順次はいっていく
7.19	人形の製作６	この日までで、人形に関するすべての製作を終える
7.26	保育室学習会	運営会議のテーマにそって、子育てを語り合う
8.30	人形劇練習１	台本を読みあう
9.5	人形劇練習２	台本に沿って人形を動かし、背景などの調整をおこなう

9.6　保育室学習会　　運営会議のテーマにそって、子育てを語り合う
9.13　人形劇練習3　　本格的な練習を進める
9.20　人形劇練習4　　同上
9.27　人形劇上演　　友人知人を呼んで、人形劇の上演をおこなう

総括　外国人の女性が13人中6人いたので、正直なところ上演までには手間がかかった。しかし、日本語を一生懸命暗記し上演する姿勢は、どこの国の人でも同じである、と強く感じた。

日本人にとっては、外国人との付き合い方が上手ではないようにいわれているが、実際には言葉の問題ではなく機会の不足からくるだけだと感じた。今後も体験を元にした交流を行うことで、国際的な交流が深まるのではないかと思う。

1991年度（平成3年度）白梅分館保育室利用交流会

白梅分館には「保育室」という専用の部屋はなく、2階の和室を保育室事業の場として利用しているが、自主サークルの利用希望が多くなり、主催事業の希望などとも重なることになってきたために、各サークル間の連絡調整の場として開いた。

日　時　1991年（平成3年）4月10日　全1回
会　場　白梅分館
参加者　参加者数　10人

総括　高齢者の語らいのひろばが定期的に和室を利用しているが、共同保育しているサークルと同じように、場所や曜日を変えることがむずかしいという意見が出ている。熟慮してみれば、保育室が用意されていないのは白梅分館だけであり、他の自主サークルの和室利用率も高いこともあるので、保育の部屋として利用することがよいのかどうか、公民館事業の全体的な視点から検討しておく必要がある。

1992年度（平成4年度）人形劇を創る

人形劇を創るということは、人形の頭・衣服・背景・小道具などの他、シナリオも作って上演するまでのことを含んでいる。この作業に、乳幼児を抱える母親に参加してもらい、お互いの子育ての情報交換を通して、閉塞状況の女性の日常を考える機会として実施した。なお、この教室は約半数の外国人女性にも参加を促すために英語で

の募集記事をだしたところ、２名の外国人の方から問い合わせがあったが、言葉の不安と知人のいないところへ参加する不安のために参加しなかった。

期　間　1992年（平成４年）５月28日～11月５日　全18回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　126人

講　師　原嶋卓三氏

日時	テーマ	内　　容
5.28	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	教室の説明や各自の自己紹介、保育について
6.4	各自の自己紹介	昨年の作品をビデオで見て、シナリオの相談などを行う
6.11	人形の製作	人形劇についての話を聞き、頭を作りだす
6.18	人形の製作	顔の表情を描き完成。洋服作りなどへ
6.25	保育室学習会１	子どもを保育室に預けることって、どいうことなのか？
7.22	人形の製作	人形の洋服作り
7.9	人形の製作	人形の持ち物などの小物の製作に入る
7.16	人形の製作	小物や背景などの製作に入る
7.23	保育室学習会２	運営会議の報告などと関連して子育てを語り合う
9.3	小道具の製作	背景や小道具などの製作
9.10	小道具の製作	同　　上
9.17	小道具の製作	同　　上
10.1	保育室学習会３	運営会議の報告などと関連して子育てを語り合う
10.8	本読み	シナリオを元に声をだして練習を開始する
10.15	立ち稽古	台詞を話ながら人形や背景なども動かしてみる
10.22	立ち稽古	同　　上
10.29	リハーサル	本番と同じようにセットを組んで上演練習をする
11.5	人形劇上演	友人知人を呼んで、人形劇の上演をおこなう

総括　今回は参加者も多くなく、内容的には充実した人形劇の上演となった。しかし、数多くの回数を重ね上演までしても、妊娠や転居などで再上演ができないことが多く、少々残念な気持が残る。

1993年度（平成５年度）人形劇を作る

子育て期の女性を対象に、人形の頭・衣服・背景・小道具・シナリオをつくり、上演するまでをとおして、他人と共同、協力して新たなものをつくりだす機会とした。

期　間　1993年（平成５年）５月27日～12月16日　全24回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　120人

講　師　原嶋卓三氏

日時	テーマ	内　　容
5.27	ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	教室の説明や各自の自己紹介、保育についての説明
6.3	ミニコミ作り	保育だより作成のために、ミニコミの作り方を学ぶ
6.10	ミニコミ作り	保育だより作成のために、ミニコミの作り方を学ぶ
6.17	ミニコミ作り	保育だより作成のために、ミニコミの作り方を学ぶ
6.24	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
7.1	ミニコミ作り	保育だより作成のために、ミニコミの作り方を学ぶ
7.8	人形の製作	シナリオにそって人形の頭の製作に入る
7.15	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
7.22	人形の製作	人形の頭の完成をめざす
8.26	人形の製作	人形の服装の製作
9.9	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
9.17	小道具の製作	小道具と大道具の製作に入る
9.30	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
10.7	道具の製作	小道具と大道具の製作
10.14	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
10.21	シナリオを読む	シナリオの立ち読みから入る
10.28	〃	シナリオの立ち読みから入る
11.5	立ち稽古	立ち稽古に入る
11.11	〃	〃
11.18	保育室学習会	保育室運営会議をもとに、保育について学び合う
11.25	立ち稽古	本番と同じようにセットを組んで練習をする
12.2	〃	〃

12.9　〃　　〃

12.16 保育室学習会　　保育室に参加して、その感想や子どもの育ちを語り合う

総括　今回は12月11日（土）に人形劇を上演した。これは、毎回練習している母親の姿を夫にも見てもらいたいという配慮からで、その結果多くの夫が見にきてくれた。夫も妻や子どものことに関心を持っていることがわかった。また、今回は、昨年度に人形劇に参加し、その後自主的に活動していた母親のサークルとジョイントして上演し、多くの聴衆が喜んだ。しかし、妊娠や転居で活動を続けられない人が続出し、すでに活動を中断している状態になってしまっているが、しかたないことかもしれない。

1994年度（平成６年度）人形劇を創る

子育て期の女性を対象に、人形の頭・衣服・背景・小道具・シナリオをつくり、上演するまでをとおして、他人と共同、協力して新たなものをつくりだす機会とした。

期　間　1994年（平成６年）６月２日～11月17日　全21回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　158人

講　師　原嶋卓三氏

日時	テーマ	内容	講師
6.2	オリエンテーション	自己紹介と教室の内容説明	原嶋　卓三氏
6.9	人形劇を見る	昨年の記録をVTRで見る	同　上
6.16	記録の作り方	各回の記録の作成の仕方を学ぶ	同　上
6.23	記録の作り方-2	同　上	同　上
6.30	人形の頭の作成	シナリオにそって頭を作成する	同　上
7.7	同　上	同　上	同　上
7.14	保育学習会	保育室運営会議に基づく話し合い	佐々木京子氏
7.21	衣服を作る	人形の衣服の製作	原嶋　卓三氏
7.28	同　上	同　上	同　上
8.23	打ち合わせ	今後の進め方などを点検した	
9.1	保育学習会	保育室運営会議に基づく話し合い	佐々木京子氏
9.8	道具を作る	シナリオにそって小道具を作る	原嶋卓三氏

9.22	本読み	シナリオを役割別に読む	同　上
9.29	保育学習会	保育室運営会議に基づく話し合い	佐々木京子氏
10.6	立ち稽古	実際に人形を動かして練習する	原嶋　卓三氏
10.13	同　上	同　上	同　上
10.20	同　上	同　上	同　上
10.27	同　上	同　上	同　上
11.10	同　上	同　上	同　上
11.12	人形劇上演	今までの練習の成果を発表する	同　上
11.17	保育学習会	保育室運営会議に基づく話し合い	佐々木京子氏

総括　昨年同様、第二土曜日に上演したが、これは、夫や学校へ通っている子どもにも見てほしいという配慮からで、自主的な人形劇サークルとの競演によって、今年も多くの人が見に来てくれた。

しかし、幼児を抱える母親が人形劇を続けていくのは難しい現実があり、なかなか定着していかない。しかし、子どもが今後は小学校に入学した母親などを対象に、人形劇に限らず新たな創造的な試みを考えるべきかもしれない。

1995年度（平成７年度）影絵劇を作る

子育て期の女性を対象に、影絵の作成から影絵劇を上演するまでを通して、他人と共同・協力して新たなものを作りだす機会とした。講座終了後自主化したが、幼児をかかえる母親が影絵劇を続けていくのは難しい現実があるり、サークルとしての活動は停止。しかし、影絵劇というこれまでなじみの少なかったものを、自分たちでつくることにより芸術への関心が高まり、また、参加者同士のネットワーク作りができた。

期　間　1995年（平成７年）９月７日～1996年（平成８年）１月11日　全17回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　68人

講　師　後藤　圭氏（劇団代表者）

日時	テ　ー　マ	内　　容	講　　師
9.7	オリエンテーション	保育室の説明・講座の説明	高崎文江氏
9.14	影絵劇とは	影絵劇とはどのようなものか	後藤　圭氏
9.21	シナリオの作成	シナリオを考える	同　上

9.28	同　上	同　　上	同　上
10.5	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	高崎文江氏
10.12	影絵劇とは	影絵劇についての話	後藤　圭氏
10.19	影絵を作る	登場人物を作る	同　上
10.26	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	高崎文江氏
11.9	影絵を作る	登場人物を作る	後藤　圭氏
11.16	同　上	同　上	同　上
11.30	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	高崎文江氏
12.7	影絵を作る	登場人物を作る	後藤　圭氏
12.9	本読み	シナリオを配役別に読む	同　上
12.16	立ち稽古	人形の操作の練習	同　上
12.21	同　上	人形の操作・OHP等の使い方について	同　上
12.23	影絵劇上演	今までの練習の成果を発表する	同　上
1.11	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	高崎文江氏

影絵劇上演

日　時　1995年（平成7年）12月23日（土）

会　場　白梅分館

観客数　60人

今年度の主催講座「影絵劇をつくる」に参加した母親たちと、一昨年の白梅分館主催講座に参加し、現在自主的な活動をしている人形劇サークルがジョイントして影絵劇を上演した。

日　時	内　　容
12月23日	西遊記より「孫悟空と牛魔王の巻」・手遊び

1996年度（平成8年度）影絵劇を作る'96

幼児を抱える母親に、影絵劇創りをとおして仲間意識を育て、社会的参加を呼びかけた。また、子どもをとりまく現在の環境、社会、家庭などを話し合うことにより、地域社会への接触や関心を持ち、自分自身をみつめ、育児にも新たな視点を加えられる機会とした。

期　間　1996（平成８年）年９月５日～1997（平成９年）３月６日　全26回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　208人

日時	テーマ	内容	講師
9.5	オリエンテーション	保育室の説明・講座の説明	保育者
9.12	私の子育て	各自の自己紹介・地域や仲間の中で育つ	後藤　圭氏
9.19	影絵劇をつくる	影絵劇について・昨年のビデオをみる	後藤　圭氏
9.26	公民館で学ぶこと	保育室について・公民館について	担当職員
10.3	シナリオをつくる	シナリオの検討	後藤　圭氏
10.9	同　上	同　上	同　上
10.17	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	保育者
10.24	シナリオをつくる	シナリオの検討	後藤　圭氏
10.31	影絵を作る	登場人物の作成・下絵の作成	後藤　圭氏
11.7	影絵劇をつくる	登場人物の作成	同　上
11.14	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	保育者
11.21	影絵劇を作る	登場人物の作成・背景を考える	後藤　圭氏
11.28	同　上	同　上	同　上
12.5	同　上	同　上	同　上
12.12	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	保育者
12.19	影絵劇を作る	登場人物の作成・背景の完成	後藤　圭氏
1.9	本読み	シナリオの完成・発声練習	同　上
1.15	立ち稽古	影絵の人物の動きの練習	同　上
1.23	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	保育者
1.30	立ち稽古	影絵の人物の動きの練習	同　上
2.6	保育学習会	保育室運営会議に関連しての話し合い	保育者
2.13	立ち稽古	影絵の人物の動きの練習	同　上
2.20	立ち稽古	動きの練習・OHP操作など	同　上
2.27	同　上	動きとせりふの練習	同　上
3.1	同　上	同　上	同　上
3.6	保育学習会	保育について・参加してのまとめ	保育者

1996年度（平成８年度）影絵劇発表会

「影絵劇をつくる'96」に参加した幼児を抱える母親に、これまでの成果を発表することにより、サークル化を呼びかけ、地域社会とのつながりを持てる機会とした。当日は、多くの方が見に来てくれ、盛況だった。しかし、再度の上演及びサークル化についての話し合いでは、現在の状況では多くの困難があり難しい。

「酒とからすと天狗」「ねこのくにのおきゃくさま」

日　時　1997年（平成９年）３月２日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　90人

1996年度（平成８年度）保育室交流会

保育室を利用しているサークルとの交流の場とした。

日　時　1996年（平成８年）６月28日～1997年（平成９年）１月22日　全２回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　17人

日時	内　容	参加者
６.28	おもちゃ箱の整理・ロッカーの使用について	６人
１.22	牛乳パックで箱積み木の作成	11人

1997年度（平成９年度）家庭内リサイクル考

「家庭内のゴミとリサイクル」

資源の有効利用と再利用というテーマは、今や地球的な問題になっている。しかし、具体的には、何をどうすればよいのかわからない点が多い。そこで、家庭でできることや今後の課題について学ぶ機会とした。

期　間　1997年（平成９年）11月13日～1998年（平成10年）３月26日　全16回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　96人

日時	テーマ	内　容	講　師
11.13	保育オリエンテーション	保育室の案内・親子の自己紹介	
11.20	講座オリエンテーション	講座の内容説明・自己紹介	

11.27	ゴミとリサイクル	現状と今後の取り組み	岩井佐代子氏
12.4	ゴミとリサイクル	日本での現状（ドイツと比較して）	同　上
12.11	ゴミとリサイクル	No2 測定・ゴミ処分場	同　上
12.18	保育学習会	子どもにとっての良い環境とは？	保育者
1.8	リサイクルセンター見学	福生市のゴミ処理の現状を見学する	岩井佐代子氏
1.22	ゴミとリサイクル	リサイクルセンター見学の感想	同　上
1.29	保育学習会	子どもにとっての良い環境とは？	保育者
2.5	ゴミとリサイクル	塩ビ実験・講座のまとめについて	岩井佐代子氏
2.19	ゴミとリサイクル	岩井さんのドイツエコツアー	同　上
2.26	保育学習会	関係の質について	保育者
3.5	ゴミとリサイクル	廃油せっけん作成など	岩井佐代子氏
3.12	ゴミとリサイクル	ダイオキシンについて	同　上
3.19	ゴミとリサイクル	包材について・リサイクルショップ	同　上
3.26	保育学習会	関係の質について・まとめ	保育者

1998年度（平成10年度）子育ての日常環境を考える

ダイオキシンなどの「環境ホルモン」物質が心配される現在、特に子育て期の母親には様々な心配となっている。

しかし、実際には環境ホルモンやアレルギーの基本的な仕組みや働きなどもわからず、どのような具体的な防御活動をしてよいかわからない。

そこで、身近な素材などの点検をする中で日常生活の基本的な部分を再点検し、これからの生き方を考える機会として実施した。

期　間　1998年（平成10年）9月10日～1999年（平成11年）2月4日　全18回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数126人

日時	テーマ	内　容	講　師
9.10	オリエンテーション	自己紹介、保育室の説明など	
9.17	オリエンテーションII	講座の内容説明、保育者からの説明	
10.1	オリエンテーションIII	公民館利用のあり方を参加者で話合う	
10.8	環境ホルモンって？	環境ホルモンの基本的なことをを学ぶ	宮岡一雄氏

10.15	アレルギーって？	アレルギーの基本的なことを学ぶ	同　上
10.22	子どもの育ち自分の育ち	自分のライフサイクルを点検する	
10.29	保育学習会	保育室のあり方・学習について話合う	保育者
11.5	家庭内のゴミを考える１	リサイクルセンターの見学	
11.12	身近な環境は？	ダイオキシンの具体的な点を考える	岩井佐代子氏
11.19	福生のゴミは？	ゴミの実体と循環型社会	市職員
11.26	保育学習会	保育室のあり方・学習について話合う	保育者
12.3	家庭内のゴミを考える２	見学や今までの学習を話し合う	岩井佐代子氏
12.10	身近な危険物質	酸性雨の実体を福生で調べる	同　上
12.17	保育学習会	保育室のあり方・学習について話合う	保育者
1.14	ゴミの分別について	日本とドイツの比較検討	岩井佐代子氏
1.21	身近な材料を調べる	おもちゃなどの材料を調べる	同　上
1.28	再利用に実践	牛乳パックではがきなどを作る	同　上
2.4	保育学習会	保育室のあり方・学習について話合う	保育者

1999年度（平成11年度）子どもの食事「好き嫌い」

現代の子ども達の食生活は、多くの問題を抱えていること多い。「好き嫌い」はもちろんですが、「食が細い」「じっとして食べる事ができない」「おやつしか食べない」と親にとっては、いろいろな悩みが尽きない。

また、近年、環境ホルモンや多種多様なアレルギーの問題も出てきていて、何が良くて何が悪いというのも、情報が氾濫していてどれを信じて良いのかもわからない時代となってきている。

こうした中で、もっとも身近な子どもの食事を通して、家族の食生活も一緒に考える機会とした。

期　間　1999年（平成11年）６月24日（木）～12月16日（木）　全16回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　137人

日時	内容		講師
6.24	保育オリエンテーション	保育室の案内・親子の自己紹介	
7.1	講座オリエンテーション	講座の内容の説明・自己紹介	

7.8	これからの講座に向けて　それぞれの悩みや疑問	
7.15	子どもの食事　野菜の上手な取り方と夏休みに向けて	谷口美津子氏
9.9	保育園での子どもたち　現在の保育園事情と手作りおもちゃ	戸室たかの氏
9.30	保育学習会	保育者
10.7	子どもの食事　塩分測定器を使って我が家のみそ汁測定	谷口美津子氏
10.14	保育園での子どもたち　手遊びと子どもの成長	戸室たかの氏
10.21	子どもの食事　アレルギーについて	谷口美津子氏
10.28	保育学習会	保育者
11.11	子どもの食事　ファーストフードと食生活	谷口美津子氏
11.18	子どもの食事　調理実習「肉まんをつくる」	谷口美津子氏
11.25	保育学習会	
12.2	子どもの食事　まとめ	谷口美津子氏
12.9	この講座を受けて	
12.16	保育学習会	保育者

（4）自然対象事業の10年

1990年度（平成２年度）自然観察会

身近な自然環境を自らの目で観察し、記録を残すことを通して身近な自然の成り立ちと私たちの暮らしの関係を学ぶ機会として実施した。

期　間　1990年（平成２年）６月３日～1991年（平成３年）３月10日　　全10回

会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵

参加者　延べ参加者数　307人

日時	テーマ	内容	講師
6.3	植物観察会	多摩川中央公園内の初夏の植物観察	宮岡一雄氏
6.24	水生昆虫観察会	昆虫の観察を通して川の水質を観察	田中和明氏
9.8	鳴く虫の観察会	多摩川中央公園内で鳴く虫の観察	栗原　仁氏
10.14	植物観察会	南公園下流の河川敷で秋の植物観察	宮岡一雄氏
11.11	自然観察会	滝山丘陵の植物や野鳥などを中心に観察	同　上
12.9	冬鳥の観察会	昭和用水堰の冬鳥を中心に観察	岡田紀夫氏
2.17	同　上	多摩川に飛来しているカモ類を観察	岡田紀夫氏
2.24	同　上	多摩川の冬鳥を中心に観察	栗原　仁氏
3.3	冬芽の観察	冬芽を通して植物の冬越しを観察	宮岡一雄氏
3.10	自然観察会	滝山丘陵の植物や野鳥を見て歩く	岡田・栗原氏

総括　今年度は天候に恵まれ、中止ということがなく順調に予定を消化できた。近い将来、福生周辺の「自然観察マップ」のようなものを作り、市民の方に利用してもらいたいと思っているので、市民の方々と協力して作成の準備を進めていきたい。

1990年度（平成２年度）巣箱を作ろう

平成２年７月に、「福生市の鳥＝シジュウカラ」が制定された。このシジュウカラが利用する巣箱を作ることを通して、身近な自然に関心が向くように実施した。

期　間　1991年（平成３年）１月12日～１月26日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　16人

日時	テーマ	内容	講師
1.12	巣箱を作ろう	巣箱の概略を知り製作する	栗原　仁氏
1.19	巣箱を作ろう	巣箱の製作	同　上
1.26	餌台にも挑戦	巣箱の他に餌台などの製作	同　上

総括　できあがった巣箱については番号をつけ、市内各地（公園・個人の庭先など）に設置し、利用状況を追跡調査することとした。

1991年度（平成３年度）自然観察会

現在の身近な自然環境を市民自らが観察し記録を残すことで、自然の移り変わりを私達の生活との関連で考える機会として実施しているが、社会教育事業の入門的な位置づけも加味し、だれでも参加しやすように配慮している。

期　間　1991年（平成３年）５月26日～1992年（平成４年）３月８日　全８回

会　場　多摩川

参加者　延べ参加者数　244人

日時	テーマ	内容	講師
5.26	公園の植物	中央公園内の植物を見て歩く	宮岡一雄氏
6.9	水生昆虫観察	多摩川の水質と昆虫の関係を考える	田中和明氏
10.20	秋の植物観察	秋の植物を、公園と川原で観察する	宮岡一雄氏
12.1	冬鳥の観察	カモ類の観察を中心に行う	岡田紀夫氏他
2.16	同　上	同　上	同　上
2.23	草原の野鳥	多摩川の草原に住む野鳥を観察する	同　上
3.1	冬芽の観察	植物の冬越しの状態を観察する	宮岡一雄氏
3.8	水面の鳥	広い水面の上で生活する野鳥の観察	栗原　仁氏

総括　自然観察会を楽しみに参加してくれる方も増えてきて、毎回の観察会が楽しみになってきた。また、観察会に参加していた若い層数人が、自主的に観察会を企画し運営し始めた。毎月一回であるが、今後はその芽がふくらむように応援したり、相互補完的な役割を果たしていきたい。

1992年度（平成４年度）自然観察会

自然の移り変わりを私達の生活との関連で考える機会として実施している。また、

社会教育事業の入門的な位置づけとし、だれでも参加しやすように配慮している。

期　間　1992年（平成４年）６月７日～1993年（平成５年）３月14日　　全10回

会　場　多摩川・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　187人

日時	会場	テーマ	内容	講師
6.7	柳山公園	土手と公園の植物	柳山公園付近の植物を見て歩く	宮岡一雄氏
6.21	かに坂公園	水生昆虫観察	多摩川の水質と昆虫の関係を考える	田中和明氏
9.5	殿ヶ谷歩道	鳴く虫の観察	秋の夜、鳴く虫のかんさつ	栗原　仁氏
10.11	中央公園	秋の公園の植物	公園の下草を中心に観察	宮岡一雄氏
11.15	滝山丘陵	秋の林の植物	秋の林の下草などを観察	宮岡一雄氏
12.6	柳山公園	初冬の野鳥観察	カモ類の観察を中心に行う	岡田紀夫氏 栗原　仁氏
2.21	柳山公園	草原の野鳥	多摩川の草原に住む野鳥を観察する	同　上
2.28	南公園	水辺の野鳥	南公園下流の水辺の野鳥の観察	同　上
3.7	水喰土公園	冬芽の観察	植物の冬越しの状態を観察する	宮岡一雄氏
3.14	狭山湖	広い水面の野鳥	福生では見られない水辺の野鳥観察	岡田紀夫氏 栗原　仁氏

総括　自然観察会を楽しみに参加してくれる方も増えてきているが、一方、参加者が高齢化しつつあり、若い層にも関心をひろめるような配慮の必要性を感じている。また、野鳥の調査を定期的に行っている人たちとの交流など、今後の内容を検討したい。

1993年度（平成５年度）自然観察会

身近な自然と私達の生活との関係を、動植物の観察を通して考える機会として実施している。また、公民館事業の入門的な位置づけとし、だれでも参加しやすように配慮している。

期　間　1993年（平成５年）５月23日～1994年（平成６年）３月13日　全10回

会　場　多摩川・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　257人

日時	会場	テーマ	内容	講師

5.23	南公園	水生昆虫観察	多摩川の水質と昆虫の関係	田中和明氏
6.6	柳山公園	土手と公園の植物	柳山公園付近の植物を見て歩く	宮岡一雄氏
9.11	中央公園	鳴く虫の観察	秋の夜鳴く虫を見たり声を聞く	栗原　仁氏
10.3	中央公園	秋の公園の植物	公園の下草を中心に観察	宮岡一雄氏
11.28	滝山丘陵	秋の丘陵の植物	身近な丘陵の動植物の観察	宮岡一雄氏
12.5	多摩川	冬の野鳥観察会	カモ類の観察を中心に観察する	岡田紀夫氏 栗原　仁氏
1.23	多摩川	冬の野鳥観察会	草原の野鳥を観察する	岡田・栗原氏
2.13	多摩川	冬の野鳥観察会	水辺の主にカモ類を中心に観察	岡田・栗原氏
2.27	水喰土公園	植物の冬越し	植物の冬芽の観察	宮岡一雄氏
3.13	狭山湖	大型カモ類を見る	広い水面のカモ類を中心に観察	岡田・栗原氏

総括　今年の観察会は天候に恵まれ、中止ということがなかった。また、今年度から熊川と南田園在住の小学生の参加が目立つようになった。しかし、全体的には高年齢の方の参加が多くなってきている。そして、親子での参加が減少しているのも、少し気がかりである。

1993年度（平成５年度）親子で巣箱をつくろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱を親子でつくり、身近な公園などに設置し、シジュウカラの生息状況を観察することから、自然環境の仕組みと働きについて考える機会とした。

期　間　1994年（平成６年）１月30日　１回

会　場　白梅分館

参加者　５人

日時	テーマ	内　容
1.30	巣箱をつくろう	シジュウカラの利用する巣箱を作った

総括　参加者が少なかったが、予定通りの数量が完成した。また、水喰土公園と隣の緑地に計10個設置したところ、いくつかの巣箱が利用された形跡があった。

1994年度（平成６年度）自然観察会

期　間　1994年（平成６年）５月22日～1995年（平成７年）３月12日　全７回

会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　169人

日時	会場	テーマ	内容	講師
5.22	柳山公園	イネ科の植物観察	イネ科の植物を公園で観察する	宮岡一雄氏
9.10	中央公園	鳴く虫の観察	コオロギなど鳴く虫の観察	栗原　仁氏
10.2	南公園	秋の川原の植物観察	キク科を中心に川原の植物観察	宮岡一雄氏
12.4	南公園	冬鳥の観察会	渡り鳥のカモ類を中心に観察	岡田紀夫氏
1.22	南公園	冬鳥の観察会	草原に住む野鳥を中心に観察	栗原　仁氏
2.19	狭山湖	湖面の野鳥観察	大形のカモ類などの観察	同　上
3.12	中央公園	冬芽の観察	植物の冬越しの様子を観察する	宮岡一雄氏

総括　☆　94年度は、水生昆虫観察会だけが雨天のために実施できず、残念な思いをした。毎回、梅雨の時期に行われているので、天候とのかねあいがあってむずかしい。

☆　観察会参加者が固定化しつつある一方、栗原先生のおかげで小学生が参加が目立っている。特に野鳥観察会や鳴く虫の観察会などは、小学生の姿を見ることができて楽しい。

☆　観察場所が固定化しつつあり、新たな観察場所を探すことがよいかも含めて検討したい。例えば、野鳥の場合でいえば、高尾山とか富士山などを考えた方がよいのだろうか？

☆　観察会自体は比較的"静的な"ものであるが、もう少し"動的な"部分や中身を検討しても良いのだろうか？

☆　野鳥観察が冬に集中しているのは観察しやすいためだが、年間を通じて観察する必要はないのか？

☆　今までは、日曜・祭日を中心に観察会を開いてきて、しかも観察行為だけを進めてきたが、開催日時や観察の内容の検討も必要なのだろうか？例えば、平日や土曜日に「野草を食べる」とか「昆虫を捕まえる」といった内容で、しかも主婦層や高齢者対象など、対象を絞った観察会も考えられるのか？

☆　野鳥についてはかなり専門家が育った。しかし、昆虫や植物の分野ではそれほど深まっているとも、人材が豊富になったともいえない状況にある。また、観察会を通して、広い意味での環境教育を進めるためには多くの人たちの意見

を集約しておく必要があるだろうが、今後の課題として広くしかも深く考えていく上ではどのような活動方法や内容が考えられるだろうか？

1995年度（平成７年度）自然かんさつ会

最近、「身近な自然に親しむ」といった風潮が強くなり、川原の土手や公園を歩く人が増えている。そのこと自体はすばらしいことに違いないが、身近な自然と私たちの生活がどのような関係にあるのかといった、生活課題に結びつくような視点をもって周囲を観察している人は、まだ少数であるように感じる。

公民館が開く観察会は、市内の公園や川原を中心に観察をおこなうことで珍しい種類を発見する派手さはないが、自然の観察といった体験を通して私たちの日常生活の状況を学ぶ機会として、今後も充実させる必要があると感じる。

また、最近では野草ブームだそうで、市内に生息している植物でも採集をする人たちが残念ながら増えている。採集行為そのものには種々の論議があるが、採集する人のほとんどが大人であり、しかも自らの楽しみのために採集してしまっている。

このことを考えると、植物・昆虫・野鳥といった観察会の中で、野鳥観察会以外は採集を目的とする人に知識を与えるだけになる可能性もあり、行政の開く観察会には、今後の運営の仕方に十分な注意と新たな観察指導といった方法を開発する必要性があると思われる。

期　間　1995年（平成７年）６月４日～1996年（平成８年）３月24日　　全12回

会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　218人

日時	会場	テーマ	内容	講師
6.4	多摩川	水生昆虫観察会	水生生物と水質の関係を知る	田中　和明氏
6.11	柳山公園	イネ科の植物観察	イネ科の植物を公園で観察する	宮岡　一雄氏
7.16	柳山公園	夏の川原の野鳥	初夏の川原や水辺の野鳥観察	岡田紀夫氏他
9.2	中央公園	鳴く虫の観察	コオロギなど鳴く虫の観察	栗原　仁氏
9.3	柳山公園	晩夏の川原の観察	川原の植物・昆虫・野鳥の観察	宮岡一雄氏他
10.22	南公園	秋の野鳥観察会	川原で見られる渡り鳥の観察	岡田紀夫氏他
12.10	南公園	冬鳥の観察会	渡り鳥のカモ類を中心に観察	岡田紀夫氏他
1.21	昭和用水堰	冬鳥の観察会	カモ類などの観察	栗原　仁氏他

2.11	柳山公園	草原の野鳥	草原に住む野鳥を中心に観察	岡田紀夫氏他
2.25	高月付近	冬の林の野鳥	林や草原の野鳥観察	岡田紀夫氏他
3.10	柳山公園	冬芽の観察	植物の冬越しの様子を観察する	宮岡一雄氏
3.24	狭山湖	広い水面の野鳥	湖で生活する大形のカモを観察	岡田紀夫氏他

1995年度（平成７年度） 巣箱やえさ台を作ろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱やえさ台を作成し、身近に野鳥を観察し、野鳥も含めた生活環境に関心を持てるように実施した。

期　間　1995年（平成７年）11月18日・11月26日　全２回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　27人

日時	テーマ	内容
11.18	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱を作る
11.26	えさ台を作る	シジュウカラやカワラヒワの食べられるえさ台を作る

1996年度（平成８年度）自然かんさつ会

最近、自然かんさつ会に参加する人数は増加する傾向にある。特に植物に関心を持っている、あるいは持ちだした女性が多い。しかし、参加する年齢層が高くなる一方というのは、今後のかんさつ会の中身や進め方に一考を要することは認識している。そのためにスタッフ会議などを数多く開き、参加者の多様化の方策を試みている。

また、「雑木林」についての関心がひろがり、身近な自然の意味、人間にとっての「緑」の意味とは何か？といったことを考えるきっかけとなっている。このこと自体は喜ばしいことではあるが、福生に残る雑木林の内容がよくつかめていない人が、近隣の雑木林に関心が先走っているというケースもある。

多くの参加者をみると、自分の関心のある領域だけ関心を示す行為がみられるようになり、形態観察の域を出ていない。行政が行なうかんさつ会のあり方として、関心のある領域の形態だけではなく、より一歩進んで、地域の歴史や地形・気象・植生などといった総合的な視点から各生物をかんさつし、今福生で生活する人間同士がなぜ身近な自然に関心を持ち、自然と共存したまちを作っていく必要があることを、数多くの場で発言していく必要がある。

そのような市民を作りだすきっかけと位置づけている自然かんさつ会ではあるが、参加する年齢層や指導者の問題など、数多くの課題を抱えていることは確かであり、社会教育行政の行なうかんさつ会の方向は、まだまだ手探りの状況である。

期　間　1996年（平成８年）５月26日～1997年（平成９年）３月23日　　全８回

会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　165人

日時	会　場	テ　ー　マ	内　　容	講　師
5.26	多摩川	イネ科の植物観察	イネ科の植物の観察する	宮岡一雄氏
6.23	かに坂公園	水生昆虫観察会	水生生物と水質をみる	田中和明氏
10.6	中央公園	秋の川原の観察	秋に咲く川原の植物の観察	宮岡一雄氏
12.1	昭和用水堰	冬鳥の観察会	渡り鳥のカモ類を中心に観察	岡田紀夫氏他
1.19	昭和用水堰	冬鳥の観察会	カモ類などの観察	栗原仁氏他
2.2	柳山公園	草原の野鳥	草原に住む野鳥を中心に観察	岡田紀夫氏他
3.9	狭山湖	広い水面の野鳥	大形のカモを観察	岡田紀夫氏他
3.23	柳山公園	冬芽の観察	植物の冬越しの様子を観察	宮岡一雄氏

1996年度（平成８年度）巣箱やえさ台を作ろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱やえさ台を作成し、身近に野鳥を観察し、野鳥も含めた生活環境に関心を持てるように実施した。

日　時　1996年（平成８年）11月10日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　参加者数　５人

日時	テ　ー　マ	内　　容
11.10	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱やえさ台を作る

1997年度（平成９年度）自然観察会

自然かんさつ会に参加する人数は増加の一途である。参加者の多くは自分の関心のある領域だけ関心を示す行為がみられるようになり、形態観察の域を出ていない。地域の自然の様子や変化を観察し記録することの本質と自分の知的要素が満足することは、必ずしも一致しない。

一方、自然かんさつ会が身近な自然の意味、人間にとっての「緑」の意味とは何か？といったことを考えるきっかけとなっている人もいる。

行政が行なうかんさつ会のあり方として、関心のある領域の形態だけではなく、より一歩進んで地域の歴史や地形・気象・植生などといった総合的な視点から各生物をかんさつし、今福生で生活する人間同士がなぜ身近な自然に関心を持ち、自然と共存したまちを作っていく必要があることを数多くの場で発言していく必要がある。

そのような市民を作り出すきっかけと位置づけている自然かんさつ会ではあるが、参加する年齢層や指導者の問題など、数多くの課題を抱えていることは確かであり、教育機関の行なうかんさつ会の方向は、まだまだ手探りの状況である。

日　時　1997年（平成９年）５月18日～1998年（平成10年）３月８日　全13回

会　場　多摩川・市内公園、狭山湖など

参加者　延べ参加者数　234人

日時	会　場	テーマ	内　容	講　師
5.18	草花丘陵	福生の自然の実際	草花丘陵から福生の実態をみる	宮岡一雄氏
6.9	かに坂公園	水生昆虫観察会	水生生物と水質の関係を知る	田中和明氏
6.29	多摩川	多摩川の生物	多摩川の植物をかんさつする	宮岡一雄氏
7.13	段丘の生物	市内の段丘観察	段丘の地形と生物を見て歩く	同　上
9.6	中央公園	鳴く虫の観察	鳴く虫を捕獲し、生態観察	栗原　仁氏
10.5	同　上	秋の川原	秋に咲く川原の植物観察	宮岡一雄氏
11.6	上水緑地	上水を見て歩く	上水沿いの林の成立や様子	同　上
11.30	昭和用水堰	冬鳥の観察会	カモ類を中心に観察	岡田紀夫氏
1.18	白梅分館	室内観察会	雨天のため、図鑑の学習	栗原　仁氏
2.8	高月丘陵	ワシタカを見る	オオタカ・ノスリの観察	岡田紀夫氏
2.15	白梅分館	室内観察会	雨天のため、植物の学習	宮岡一雄氏
3.1	同　上	室内観察会	雨天のため、野鳥の学習	岡田紀夫氏
3.8	狭山湖	広い水面の野鳥	湖で生活する野鳥観察	岡田紀夫氏

1996年度（平成８年度）巣箱やえさ台を作ろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱や餌台を作成し、身近に野鳥を観察し、野鳥も含めた生活環境に関心をもてるように実施した。

日　時　1996年（平成８年）11月10日　全１回
会　場　白梅分館
参加者　５人

日時	テーマ	内　　容
11.10	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱やえさ台をつくる

1998年度（平成10年度）自然かんさつ会

最近、身近な野外である多摩川の土手や玉川上水沿いに出かける人が増えているが、「自然かんさつ」ということではないようだ。しかし、初めて観察会に参加した人の話では、関心を持っているが具体的な方法を知らないために、より正しい知識を得る機会を持っていなかったとのことのようだ。

一方、近年観察会に参加する人数は増加する傾向にあるが、植物だけ、あるいは野鳥だけといった特定の生物に関心を持ち出した女性が多い。しかし、継続して参加することで、特定の生物だけではなく、地域を構成する生物の総体としての「地域」を分析できる力を身につけていく機会とする必要があると思われる。

いきなりは無理としても、今後の観察会は継続して参加することの中から、そのような集団を生み出す方向への援助が求められているのではないだろうか。

期　間　1998年（平成10年）４月26日～1999年（平成11年）４月４日　全10回
会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵・狭山湖
参加者　延べ参加者数　161人

日時	会　場	テーマ	内　　容	講　師
4.26	玉川上水	新緑の林の観察	雨天のため室内学習会となった	宮岡一雄氏
5.31	かに坂公園	水生昆虫観察会	多摩川の水生生物と水質をみる	田中和明氏
6.14	多摩川	イネ科の植物	イネ科の植物を公園で観察	宮岡一雄氏
9.5	中央公園	鳴く虫の観察	鳴いている虫の生態を観察	栗原仁氏
10.18	中央公園	秋の川原の観察	秋に咲く河原の植物観察	宮岡一雄氏
12.6	昭和用水堰	冬鳥の観察	カモ類を中心に観察	岡田紀夫氏他
1.31	高月浄水場	冬鳥の観察	浄水場内の池のカモ類を見る	栗原仁氏他
2.21	多摩川	草原の野鳥	草原で生活する野鳥観察	岡田紀夫氏他
3.14	狭山湖	広い水面の野鳥	湖で生活するカモ類を見る	同　上

4.4 柳山公園　冬芽のかんさつ　植物の冬越しを観察する　宮岡一雄氏

1998年度（平成10年度）巣箱やえさ台を作ろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱やえさ台を作成し、身の回りの環境に関心を向けてもらう機会として実施した。

日　時　1999年（平成11年）3月7日　全1回

会　場　白梅分館

参加者　3人

日時	テーマ	内容
3.7	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱やえさ台を作る

1999年度（平成11年度）自然かんさつ会

最近、多摩川の土手や玉川上水沿いを散歩している人が増えている。しかし、自然に関心はなくはないが系統的に自然を観察しようということではないようだ。

具体的には、関心を持っているが具体的な観察方法を知らない、または観察指導をする人がいないために、より正しい知識を得る機会を持っていなかったようだ。

一方、近年観察会に参加する、中年以降の方の数は増加する傾向にあるが、植物だけ、あるいは野鳥だけといった特定の生物に関心を持ちだした人が多い。

しかし継続して地域を観察することで、特定の生物だけではなく、生物の総体としての「地域」を分析できる力を身につけ、しかも仲間と共同・協力し、地域の実体を記録していく機会とする必要があると思われる。今後の観察会は継続して参加することの中からそのような集団を生み出す方向への援助が求められているのではないだろうか。

期　間　1999年（平成11年）6月6日～2000年（平成12年）4月4日　全8回

会　場　多摩川・市内公園・滝山丘陵・狭山湖

参加者　延べ参加者数　127人

日時	会場	テーマ	内容	講師
6.6	多摩川	イネ科の植物観察	イネ科の植物を公園で観察する	宮岡一雄氏
9.4	中央公園	鳴く虫の観察	秋に鳴いている虫の生態を知る	栗原　仁氏
10.17	南公園	秋の川原の観察	秋に咲く川原の植物の観察	宮岡一雄氏

11.14	玉川上水	上水沿いの観察	上水の歴史観察や植物の実態観察	宮岡一雄氏
12.5	昭和用水堰	冬鳥の観察	渡り鳥のカモ類を中心に観察	岡田紀夫氏他
1.30	浄水場付近	冬鳥の観察	カモ類などの観察	岡田紀夫氏他
2.20	多摩川	草原の野鳥観察	草原に住む野鳥を中心に観察	栗原　仁氏他
4.4	日光橋公園	冬芽の観察	植物の冬越しの様子を観察する	宮岡一雄氏

1999年度（平成11年度）巣箱やえさ台を作ろう

市の鳥「シジュウカラ」が利用する巣箱やえさ台を作成し、身の回りの環境に関心を向けてもらう機会として実施した。

期　間　2000年（平成12年）３月５日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　６人

日時	テーマ	内容
3.5	巣箱を作る	シジュウカラの入る巣箱やえさ台を作る

（5）一般対象の事業

1990年度（平成２年度）私たちのまちづくり

「国際化」や「高齢化」が多くの自治体での“トレンド”になっているが、本当のまちづくりの主役はだれなのか、そして、そのまちづくりへの計画の段階での参加が難しい今日、各自治体の方向性が混沌としている現状から、調和のある発展を目指すためには、市民はどのような力を身につけなければならないのかを真剣に考えるために企画した。

期　間　1990年（平成２年）10月３日～11月28日　　全８回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　80人

日時	テーマ	内容	講師
10.3	オリエンテーション	自己紹介と教室の説明	
10.17	まちづくりの視点	まちづくりの視点を明らかにする	宮岡一雄氏
10.24	見えない福生の将来像	都の計画や四全総と福生の将来	宮城真一氏
10.31	横田基地と住民感情	福生市の将来と横田基地	斉藤　修氏
11.7	国際化の光と影	デザイナーの目から見た国際化	真武弘幸氏
11.14	ソフト時代のソフト	ソフト価値の問題の本質を語る	原嶋卓三氏
11.21	今後必要な自然認識	生命観のある公園や自然の創出	宮岡一雄氏
11.28	三多摩の人の力	「カオスからコスモスへ」の担い手	池上洋通氏

総括　自分たちの住むまちを自分たちが研究しよくしようとしなければ、住民のレベル以上のことを行政がしてくれるなんてことはあり得ないという講師の指摘に、住民相互で話し合って共通理解を持つことができた。

三多摩各地で進められている開発（計画）について、特に秋川市の菅生付近の開発は福生にも影響が出そうである。今のところ行政範囲を超えて手をつなぎあうような発展はしなかったが、参加者同士でお互いの活動に相互協力していこうという話しが進んだ。

1991年度（平成３年度）あなたの福生はどんなまち？

私達が毎日暮らしている福生の実情を、自然・人間・行政の各方面から詳しく知り、

一人ひとりの市民がまちづくりに参加する道をさぐる機会として実施した。

期　間　1991年（平成３年）10月30日～12月18日　全８回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　48人

日時	内　　容	講　師
10.30	この講座の内容説明・イギリスの環境教育VTRの上映など	
11.6	雑木林の今日的意味と役割について	宮岡一雄氏
11.13	西多摩地域の具体的な開発と、その目指しているもの	大和田紘氏
11.20	これからのまちづくりにおける市民の役割とは	野澤久人氏
11.27	今迄の話を参加者同士で語り合う	
12.4	「環境教育」の今日的意味とは何か	職員
12.11	丘陵地の雑木林の保護利用の具体案を専門家に聞く	養父志乃夫氏
12.18	毎日暮らしている福生を大切に感じる心を育てるには	宮岡一雄氏

総括　市内の雑木林は残りわずかになってしまったが、今後はますます身近な自然としての雑木林などは貴重になっていくと思われる。また、同じように畑も緑地空間として貴重であるが、宅地なみの課税がされるようになっては、ほとんどがアパートなどになってしまうだろう。市内を全体的な視点で見る必要が大きいが、これも市民の声が本来的な意味で行政に届くようにしなければならないし、市民の力を正当に評価する場も重要だと感じた。

1991年度（平成３年度）陶芸サークル連絡会

陶芸用の作業室や窯の利用などについて、各利用サークル間で意志の統一がされていなかったので、作業室の整理整頓をはじめ窯の利用についての意見交換を行なった。

日　時　1991年（平成３年）12月11日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　８人

1991年度（平成３年度）ほのぼの人形劇公演

身近なところで優れた演劇を観賞する機会として、隔年で実施している。

日　時　1992年（平成４年）３月26日　全1回

会　場　白梅分館
出演者　人形劇団ビバボ
観客数　95人

日時	内　　容
3.26	猫はどうやって鳴くのを覚えたか、不思議なじゅうたん他

1991年度（平成３年度）白梅分館10周年記念陶壁作成

白梅分館開館10周年を記念して、利用者の参加によっての陶壁作りを行った。図案は榎本隆氏によるもので、素焼き・本焼・張り付けと、利用者の参加で行なうものとした。

日　時　1992年（平成４年）３月７日～３月29日　全２回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　45人

1992年度（平成４年度）家族新聞をつくる

家族内外の交流が少なくなっている今日、家族で発行する家族新聞に関心が高くなってきている。新しいコミュニケーションの手段として考えられるので、今回はその概略を知る機会として実施した。

期　間　1993年（平成５年）３月９日（火）　全１回
会　場　白梅分館
参加者　３人
講　師　竹縄良一氏

日時	テーマ	内　　容
３.９	家族新聞って？	家族新聞の概略の説明と具体的な作り方の説明

総括　準備不足だったか日程が悪かったのかどうか分からないが、参加者が集まらなかった。しかし、内容的にはおもしろいので次回もう少し考えたい。

1992年度（平成４年度）中学生── 性・友人・進路

今日の中学生の抱えている問題は、友人関係に依存しながらも一生懸命各自の個性を表現しようとしている。また、性の問題は思春期の中学生にとっては大変大きな問

題であり、同じように高校進学は、自分の意思とは関係なく初めて自分の能力を点数で判断されるため、仲間との競争を迎えている。そのような中学生の現状を分析し、保護者の対応などを考える場として実施した。

期　間　1992年（平成４年）６月25日～７月16日　全４回

会　場　白梅会館

参加者　延べ参加者数　23人

講　師　安達倭雅子氏

日時	テーマ	内　　容
6.25	中学生の性	性教育の現状と盲点を語り合う
7.2	VTRテープの中で	子どもたちはここまで教育され知っている
7.9	群れる中学生	抜け駆けを許さない仲間関係と親より重要な仲間
7.16	親の役割とは	競争社会の価値観が子どもに負担を強いている

総括　中学生を抱える母親が中心に参加した。実際の話になるとそう簡単には解決出来ない問題が多い。しかし、中学生になった子どもが自立していけるかどうかは親の側の問題でもあり、このような機会を数多く開くことによって、個人が抱えているだけではなく大勢の問題として話合える場が必要だと感じた。

1992年度（平成４年度）ひとにやさしいまちづくり

私達が毎日暮らしている福生の実情を、自然・人間・行政の各方面から詳しく知り、一人ひとりの市民がまちづくりに参加する道をさぐる機会として実施した。

期　間　1992年（平成４年）10月28日～12月９日　全７回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　40人

会　場　白梅分館

日時	内　　容	講　師
10.28	ひとにやさしい自然とはどういう自然なのかを学ぶ	宮岡一雄氏
11.5	雑木林の利用の実態を狭山丘陵の事例から学ぶ	永石文明氏
11.11	五日市の「横沢入」の問題を多角的に捕える	樽　良平氏
11.18	川原の自然をうまく保護・利用するには	川名国男氏
11.26	今までの話を聞いて、参加者同士で感想を話しあう	

12.2	イギリスのナショナルトラストの実態を聞く	大和田一紘氏
12.9	「環境教育」の今日的意味とは何か	鈴木　孜氏

総括　ヒトからみた自然の意味と開発する側からみた自然の意味では大きく異なるが、今日ではヒトの部分をないがしろにした開発はできなくなっている。市内の自然の残る部分は少なくなってしまったが、だからこそ自然の仕組みや働きを大切に考えられる職員が公園を設計する必要があると感じた。また、公民館などでは環境の問題を広く捕える部分と、接しながら理解していく部分の、両面を広めていく必要があることを感じた

親子トントン教室（親子で楽しみま専科）

期　間　1992年（平成４年）８月５日～８月21日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　60人

日　時	内　　容	講　　師
8.5	お菓子入れ、壁掛け飾り、帽子の壁掛け飾り鉢カバーの	山崎初江氏他
8.6	中から、自分の作りたい作品を一点選び、籐細工で編み	同　上
8.21	上げた。	同　上

1992年度（平成４年度）白梅分館10周年記念陶壁作成

利用者の参加による陶壁作りで、素焼き、本焼き、張り付けを市民参加で行なった。

期　間　1992年（平成４年）５月30日～1993年（平成５年）３月30日　全20回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　78人

日時	内　　容
5.30	タイルの形成
6.5	タイルの形成
6.6	タイルの形成
6.7	本焼き（周辺部分）
6.8	かま出し
7.5	本焼き（周辺部分）

7.6　　かま出し
1.6　　素焼き（花部分）
1.7　　釉薬つけ・かま入れ
1.8　　本焼き（花部分）
1.9　　かま出し・釉薬つけ
1.21　　本焼き・釉薬つけ
3.10　　本焼き（花部分）
3.11　　かま出し
3.16　　作品を壁面に貼り付け作業するために、足場を組みあげる
3.18　　作品を図面にしたがって壁面に貼り付け作業を開始
3.23　　作品の貼り付け作業
3.24　　〃
3.26　　〃
3.30　　作品の貼り付け作業・ほぼ完成

1993年度（平成５年度）ミニコミの作り方

家族と周囲との交流が少なくなっている今日、家族新聞に関心が高まっている。新しいコミュニケーションの手段として考えられるので、今回はその概略を知る機会として実施した。

期　間　1993年（平成５年）６月３日～７月１日　全４回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　48人
講　師　竹縄良一氏

日時	テーマ	内　　容	講　師
6.3	ミニコミ？	ミニコミの概略の説明と具体的な作り方の説明	竹縄　良一氏
6.10	ミニコミ作り-1	レイアウトの仕組みや見やすい構図など	同　上
6.17	ミニコミ作り-2	イラストの使い方や線の太さの工夫など	同　上
7.1	合評会	各自のつくったミニコミ紙を合評する	同　上

総括　ミニコミ誌といっても、家族新聞はもちろん、町会の記録やPTAの広報紙、そして、自分史を書く人の参加があっておもしろいものができた。しかし、継続

して出版するためのノウハウや態勢作りなど、今後の課題が残った。

1993年度（平成５年度）身近な環境問題

福生の周辺では大きな開発計画が明らかになりつつある。それらの計画の多くは直接福生に関係しないが、周辺の自然環境が大きく変わることが予想される。そこで、今回は主に秋留台に焦点をしぼって、今後の影響など問題点を明らかにしようと考えた。

期　間　1993年（平成５年）10月26日～1993年12月７日　全７回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　56人

日時	テーマ	内容	講師
10.26	西多摩開発の光と影	今後の開発予定とその影響など	大和田一紘氏
11.2	身近な丘陵の生物	オオタカを通して丘陵の生物の様子を知る	尾崎　洋　氏
11.9	丘陵の生物と私達	丘陵のもつ意味と私達の暮らしの関係	久保田繁男氏
11.16	私達のごみ問題	日の出町のごみ処分場の問題を考える	田島喜代恵氏
11.23	歩いて見る	現在のごみ処分場の様子を自分の目で見る	
11.30	福生のまちづくり	福生の抱えている問題と今後の方向など	野沢　久人氏
12.7	まちづくりと市民	市民としての関心の問題などを語り合う	宮岡　一雄氏

総括　周辺の環境の変化と、福生のまちづくりを切り離して考えることはできないが、テーマの設定や実際のプログラムを組む段階で、問題点をしぼりきれなかった。しかし、この問題は、身近な問題であるだけではなく、暮らしと健康の問題にも直結するので、今後も検討を重ねていきたい。また、まちづくりという本来住民の自治的なことに、住民自身がもっとかかわりやすいようなシステムを開発したい。

1993年度（平成５年度）人形劇上演

期　間　1993年（平成５年）12月11日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　120人

講　師　原嶋卓三氏

今年度の「人形劇を創る」講座に参加した母親と、昨年度に参加し現在は自主的な活動をしている人形劇サークルがジョイントして、人形劇を上演した。

日時	内　　容
12.11	どろんこ～ん、ゴリラのパンやさんの上演と手遊びなどのゲーム

総括　「人形劇を創る」に参加していた母親と、昨年度の参加者が頻繁に会議を繰り返し準備したために、素晴らしい内容の催しものとなった。しかし、上演した人の中には転居してしまったり妊娠のために人形劇ができない人もあり、サークルとしての存続は難しい。しかし、多くの市民や子どもたちの声援をうけ、上演の場や機会があれば今後も続けられそうなので、公民館として今後も援助をしていきたい。

1993年度（平成５年度）リアルバードカービング

博物館などで、いまや「はく製」に変わって中心的に展示されているバードカービング。今回は、特にアメリカンリアルバードカービングの初歩的な技術を学び、将来的には「福生市の鳥シジュウカラ」を削り、市内の公共施設に展示できるように考えて実施した。

期　間　1994年（平成６年）１月27日～４月14日　全12回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　94人
講　師　水上清一氏

日時	テ　ー　マ	内　　容
1.27	オリエンテーション	この教室の説明と道具の説明など
2.3	カモの頭を作る	頭の部分の荒削り
2.10	同　　上	頭の部分の荒削りから細かく削る
2.17	同　　上	頭の部分にサンドペーパーをかけて完成
2.24	カモのからだを作る	からだ全体の荒削り
3.3	同　　上	徐々に細かい部分を削っていく
3.10	同　　上	羽の部分を削る
3.17	同　　上	尾羽の部分を削る
3.24	細部の調整	からだの部分にサンドペーパーをかける

3.31	同　上	からだと頭を接着し、全体を整える
4.7	同　上	同　上
4.14	色塗り	今回は単色を塗って完成とする

総括　今回は初歩的な作品であるカモを作ったが、参加者全員がとても熱心で時間内にすべて終了した。また、中には市の鳥シジュウカラを削りだした人もいて、今後の活動を援助していくことによって、より内容の充実した作品が多くの市民の目にとまり、市の鳥シジュウカラの存在が深まることになると思う。

1993年度（平成５年度）大正琴教室

期　間　1993年（平成５年）６月18日～11月５日　全10回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　119人

講　師　水村アイ子氏

日時	内　容
6.18	楽器の置きかた、基本的音階の指使い
7.2	蝶々、人形、春よこい、うぐいす、さくらさくら
7.16	ボタンの持ち替えから四分音符まで
8.6	浜千鳥、琵琶湖周航の歌、真白き富士の嶺、早春賦
8.20	特殊な指使いから、２つのぼたんを同時に押さえるまで
9.3	同　上
9.17	我は海の子、茶摘み、紅葉、蛍の光、出船、荒城の月、木曽節
10.9	同　上
10.15	簡単な反復記号、知床旅情
11.5	簡単な音楽記号、千曲川

1994年度（平成６年度）私たちのまち福生を"診断"する

福生というまちを考えるとき、特別にセールスポイントがあるわけではないので、何にこだわるかということが一つの焦点になる。そこで福生を診断し、最終的に何が残るのかを市民の人と話し合う機会とした。

期　間　1994年（平成６年）10月18日～12月13日　全８回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　50人

日時	テーマ	内容	講師
10.18	オリエンテーション	講座の具体的なねらいなど	
10.25	ふっさのいまを診断する	市民による福生の分析	田中利明氏
11.9	福生の市民自治は？	まちの基本的なみかた	池上洋通氏
11.15	魅力ある地域を作るに-1	都市を自然環境からみると	藤本和典氏
11.17	福生をつくるためには？	市民の力の結集方法は？	池上洋通氏
11.22	魅力ある地域を作るために-2	秋留台開発の現状と将来	大和田一紘氏
12.6	魅力ある地域を作るために-3	市民を大切にするとは？	原嶋卓三氏
12.13	福生の将来と市民の役割	生活と自然の調和都市？	宮岡一雄氏

総括　市民の方と講師の方との会話の中に、「人にやさしいまち」という意味をもっと深く問いつめるべきだという部分があった。たしかに、簡単に言う言葉であるが、本当に弱い立場の人たちにこそこの考え方が浸透されてよいはずで、そういう意味では福生のまちづくりはこれからだという思いがした。そして、市民を大切にするという考え方を、職員一人ひとりが認識しないと、市民と行政の距離はますます広がるような気がした。

1994年度（平成６年度）人形劇上演

日　時　1994年（平成６年）11月12日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　140人

今年度の「人形劇を創る」講座に参加した母親と、昨年度に参加し現在は自主的な活動をしている人形劇サークルがジョイントして、人形劇を上演した。

日時	内容
11.12	グリーンマントのピーマンマン・はらぺこオオカミとひつじのおばさん

総括　今年も多くの市民に見てもらうことができ、上演した側も喜んでいた。しかし、継続して練習していくことはなかなかむずかしいことを参加した主婦そのものが語っている。今後も継続して活動するように、支援していくつもりである。

1994年度（平成６年度）アメリカンリアルバードカービング

アメリカンリアルバードカービングの初歩的な技術を学び、将来的には参加者各自がいろいろな鳥を作成し、市内の公共施設に展示できるように考えて実施した。

期　間　1994年（平成６年）６月10日～９月30日　全14回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　176人

日時	テーマ	内容	講師
6.10	オリエンテーション	自己紹介と野鳥についての説明	水上清一氏
6.17	頭を削る	頭の部分を削り始める	同　上
6.24	同上	頭の部分を削る	同　上
7.1	野鳥の説明	野鳥の各部の機能や名称の説明	島田高廣氏
7.8	頭の完成	頭を完成させる	水上清一氏
7.15	身体を削る	頭の完成に伴って体を削り始める	同　上
7.22	同　上	体を削る	同　上
7.29	同　上	体や尾羽なども削りだす	同　上
8.5	同　上	同　上	同　上
8.12	同　上	同　上	同　上
8.19	同　上	削り終わった人は足の作成を始める	同　上
8.26	色を塗る	各部にサンドペーパーをかけ色を塗る	同　上
9.9	同　上	同　上	同　上
9.30	同　上	同　上（完成）	同　上

総括　今回は夜間の教室にも関わらずほとんどの人が休まず参加した。それぞれの作品ができたが、継続して一人で作るにはまだまだ講師からのアドバイスが必要である。しかし、夜間に会社帰りの作業では、各自のペースで継続して作成するのは少々難しいと感じた。

1994年度（平成６年度）白梅ハイキング

白梅分館の主催事業参加者が中心になって「白梅MC」というサークルを作っているが、この人たちがサークル結成10周年記念として、白梅分館利用者に呼びかけて白梅

分館と共催で実施したハイキングである。

日　時　1994年（平成６年）４月24日　全１回

行き先　高水三山

参加者　参加者数　25人

総括　利用者が利用者に対して、公民館を通して学び身につけた力を還元することの大事さは、何も室内の学習行為だけにとらわれない。利用者はお互いが地域の人間でもあるので、白梅分館が本当の意味で地域の人間の交流の場になるよう、今後もサークル同士の、あるいは利用者同士の情報と人間の交流の場になるよう、多角的な活動を展開したい。

1994年度（平成６年度）お父さんの実践アウトドア教室

日常的にはお父さんは仕事で追われ、休みには家族サービスを要求されている。しかし、アウトドアのノウハウなどを学んだ人は少なく、そのために、カタログ的な利用方法しかできない現実がある。

そこで、身近な多摩川や滝山丘陵などを利用して、お父さんが子どもたちと一緒に楽しめるよう、実践的なプログラムを用意してみた。

期　間　1994年（平成６年）６月14日～７月３日　全３回

会　場　白梅分館・滝山丘陵

参加者　延べ参加者数　14人

日時	テーマ	内容	講師
6.14	オリエンテーション	内容の説明と自己紹介	
6.21	カメラの使い方	各自のカメラで記録する方法を学ぶ	野村　亮氏
7.3	オリエンテーリング	滝山丘陵での過ごし方の実践練習	

総括　雨天のために予定していた炭焼き・魚を釣っての薫製作りなどが中止となってしまい、秋に順延したがそのときも雨天でできなかったのは残念だった。

しかし、お父さんの日曜日のスケジュールは家族優先となっている実体がはっきりした。今後は、お父さん対象の事業の重要性が高まると思われるが、孤立している家族という単位で事業を考えるか、一人の父親を対象とするか、いくつかの方法と方向を考える必要があると感じた。

1994年度（平成６年度）水墨画教室

趣味を通しての仲間づくり、水墨画を描くことの喜びと生きがい、一人でも描くことができるまでの学習を行なった。

期　間　1994年（平成６年）６月７日～９月27日　　全15回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　272人

講　師　柳沢　きみ氏

日時	内　　容
6.7	ドクダミ、アジサイを描いた
6.14	ドクダミ、アジサイを描いた
6.21	トウモロコシを描いた
6.28	キュウリ、ナスを描いた
7.5	スグル、竹ザサを描いた
7.12	さつまいも、玉葱を描いた
7.19	ムクゲを描いた
7.26	葉ショウガ、ピーマンを描いた
8.2	こけし人形を描いた
8.9	秋海棠、オミナエシを描いた
8.16	イワシの丸干を描いた
9.6	こすもすを描いた
9.13	栗を描いた
9.21	アジの開きを描いた
9.27	野ブドウ、赤マンマを描いた

総括　水墨画の初歩から入ったが、参加者全員が非常に熱心に学習し、目的が達成できた。なお、学習意欲が高く、10月から白梅水墨会という名称で、自主サークル化し継続している。

1994年度（平成６年度）野山や河原を歩こう会

野山等を歩く事による健康増進、仲間づくり、生きがい、ストレス解消を目的とし、40歳以上の市民30名を対象に実施した。

期　間　1994年（平成６年）５月13日～1995年（平成７年）３月27日　全16回
会　場　青梅市・奥多摩町・五日市町・檜原村など
参加者　延べ参加者数　219人

日時	内　　容
5.13	青梅市塩船観音、永山公園等
5.29	羽村市草花丘陵から福生市中央公園
6.8	御岳渓谷遊歩道
6.25	五日市戸倉城山、秋川渓谷
7.20	鳩ノ巣渓谷遊歩道、白丸ダム
8.17	御嶽から梅の木峠、三宝山、吉野梅郷
10.6	高水三山
10.23	檜原村浅間尾根、佛沢の滝
11.1	バスハイク
11.23	大岳山
12.16	御嶽山、日の出山、吉野梅郷
1.18	青梅市七福神めぐり
2.14	青梅丘陵、吉野梅郷
2.27	日の出町尾浜尾根、肝要峠
3.19	榎峠、雷電山、辛垣城跡
3.27	秋川丘陵、弁天山

総括　参加者が非常に熱心で、歩くことで仲間づくり等ができ、皆さんが喜んでいる。また、自然、植物観察も同時にできることで楽しんでいる。人気の事業で、今後も継続実施していく。

1995年度（平成７年度）福生の社会教育を考える

戦後50年を迎え、福生の戦前や戦後の社会教育の歴史を振り返る必要があると考え、実施した。特に、戦後青年団を通して社会教育活動を行なってきた青年団経験者が高齢化しているため、直接本人から聞く機会は益々難しくなると予想される。

今回は、まず福生の戦後の青年団にかかわってきた人たちから戦後の福生の社会教育の歩みを伺い、その後、福生の社会教育行政がどのように変わってきたのか、また、

それらの動きが三多摩各地の社会教育活動とどのような関係をもっていたのかを学び、後半は三多摩各地や福生の公民館が抱える課題などを学んだ。

今後は、生涯学習の拠点としての公民館の役割を、より一層市民の方々に理解していただく必要性を感じた。

期　間　1995年（平成７年）９月29日～12月１日　全７回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　42人

日時	テーマ	内容	講師
9.29	オリエンテーション	講座の具体的なねらいなど	
10.6	戦後の福生の社会教育	市民による福生の分析	上野重勝氏他
10.13	戦後の福生の社会教育	まちの基本的なみかた	野澤久人氏
10.20	三多摩の公民館の歴史	戦後の三多摩の動きを知る	進藤文夫氏
11.17	公民館とは？	公民館を学ぶ意味を語る	島田修一氏
11.25	福生の生涯学習	生涯学習審議会の答申から	宮岡一雄氏
12.1	福生の社会教育の課題	市民を大切にするとは？	原嶋卓三氏

1995年度（平成７年度）アメリカンリアルバードカービング

アメリカンリアルバードカービングの初歩的な技術を学び、合わせて野鳥の暮らしや生活環境について学ぶ機会として実施した。また、希望としては、参加者各自がいろいろな鳥を作成し、市内の公共施設に展示できるように考えている。

初心者の方にはカモかシギの比較的簡単なものからはじめ、慣れている人にはカワセミを題材とした。

期　間　1995年（平成７年）９月12日～12月５日　全13回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　98人

講　師　水上清一氏

日時	テーマ	内容
9.12	オリエンテーション	自己紹介・頭の部分を削り始める
9.19	頭を削る	頭の部分を削り進める
9.26	同上	同上

10.3	同　上	頭の部分を完成させる
10.10	身体を彫る	頭の完成に伴って体を削り始める
10.17	同　上	体を削る
10.24	身体を削る	体や尾羽なども削りだす
10.31	同　上	全体の調子を整え、各部を細かく調整する
11.7	同　上	全体の調子を整え、各部を細かく調整する
11.14	同　上	全体の調子を整え、各部を細かく調整する
11.21	色を塗る	各部にサンドペーパーをかけ色を塗る
11.28	同　上	色を塗る
12.5	同　上	細部に注意して完成させる

1995年度（平成７年度）趣味をみつけよう会

50歳以上の市民で趣味のない方を対象とし、仲間づくりをしながら趣味を見つけだし、今後の生活が豊かになればと実施した。参加者全員が熱心に話し合い、見つけだした趣味を一つひとつ実行していった結果、次の趣味を持つことができ、生きがいを持って生活している。

１、ハイキング（自主サークル）13人　２、太極拳　６人　３、陶芸（サークルへ加入）４人　４、水彩画（サークルへ加入）４人

期　間　1995年（平成７年）７月12日～1996年（平成８年）３月26日　全40回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　402人

・参加者話し合い　７回

・話し合いにより、見つけだした趣味を実行したもの

陶芸講習１回、市内寺社講習１回、カメラ講習３回、ハイキング１回、陶芸８回、寺社見学１回、雑談１回、てんこく３回、石拾いハイキング１回、太極拳３回、カメラハイキング２回、はがき版画３回、はがき絵３回

・反省会１回

1995年（平成７年度）野山や河原を歩こう会

市民のハイキング志向が強い中、野山を歩くことによる健康増進、仲間づくり、生

きがいを求めるとともに、市民配布用コース案内マップ作成を目的として実施した。

参加者は48歳以上の子育てが終わった女性が多いが、みんな非常に熱心に参加された。案内マップは市民の評判がよい。

期　間　1995年（平成７年）４月８日～1996年（平成８年）３月16日　全20回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　348人

日時	行き先
4.8	小作大荷田、草花丘陵、羽村堰
4.27	奥多摩湖周辺の遊歩道
5.20	五日市駅、金剛の滝、小峰公園、秋川駅
6.3	白丸駅、三ツ釜滝、ねじれ滝、大滝、鳩ノ巣駅
6.15	白丸駅、切り通し、白丸ダム、鳩ノ巣渓谷、古里駅
7.8	奥多摩駅、日原鍾乳洞、小川谷林道、奥多摩駅
7.25	五日市駅、人里、浅間尾根、佛沢の滝、五日市駅
8.12	奥多摩駅、氷川渓谷、創造の森、愛宕山、奥多摩駅
9.2	御岳駅、御岳山、ロックガーデン、大塚山、鳩ノ巣駅
9.19	奥多摩駅、むかし道、奥多摩湖、奥多摩駅
10.7	五日市駅、城岩滝、日の出山、大塚山、古里駅
10.24	奥多摩駅、カワノリ山、鳩ノ巣駅
11.6	山梨県三窪高原バスハイク
11.16	鳩ノ巣駅、城山、白丸駅
12.5	軍畑駅、御岳渓谷、川井、澤井駅
12.16	五日市駅、馬引沢峠、旧二ツ塚峠、天狗岩、青梅駅
1.27	東青梅駅、勝沼城跡、花木園、塩船観音、小作駅
2.10	福生中央公園、羽村草花丘陵、大荷田、小作駅
2.24	宮ノ平駅、吉野梅郷、三宝山、御岳渓谷、軍畑駅
3.16	五日市駅、幸神神社、勝峰山、金比羅山、五日市駅

1996年度（平成８年度）川原や丘陵の自然を楽しむ

最近では、自然環境に配慮した生活形態を話題にすることが多くなってきた。また、

高齢の方々を中心に、暮らしと健康について関心が高まり、近くの丘陵や奥多摩などへ出かける人が年々増加している。

しかし、私たちの暮らしを作っていく上で川原や丘陵の持つ意味を、広くしかも正確に把握するのは相当難しい。そこで、環境教育の視点を持ちながら、実際に楽しみ方を学ぶ機会とした。

期　間　1996年（平成８年）10月22日～12月３日　全６回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　80人

日時	テーマ	内容	講師
10.22	自然の楽しみ方？	野外で楽しむための基本的な用具や注意点	
10.29	丘陵を楽しむ	年間を通して丘陵の動物を楽しむ方法を聞く	盛口　満氏
11.12	三頭山を楽しむ	三頭山のガイドなどから山を楽しむ方法を聞く	浦野守雄氏
11.19	身近な観察法１	職業イラストレーターの身近な自然の見方	水谷高英氏
11.26	身近な観察法２	庭先や公園など、身近な生物の発見方法を聞く	藤本和典氏
12.3	楽しい参加方法	関心を深めるためにはどんな情報を得るか	杉浦嘉男氏

1996年度（平成８年度）表現力のあるチラシ作り

PTAなどの広報や家族新聞まで身近なところで発行されているが、案外ノウハウが伝えられていない。そこで、今回は基本的なことを中心に、実際のレイアウト作業などを専門家から教えてもらった。本来ならば、公民館の事業を担当している職員など、出版物を出す側に参加してもらえばよかった。

期　間　1996年（平成８年）８月27日～９月18日　全４回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　46人
講　師　笹本喜作・甲斐誠一氏

日時	テーマ	内容
8.27	チラシって？	見やすい、読みやすいチラシ作りの原則
9.3	チラシ作りの原則１	チラシ作りの段取りを具体的に聞く
9.10	チラシ作りの原則２	具体的な注意事項の数々を聞いて実践する
9.18	チラシ作りの実際	専門家の進め方を参考に自作する

1996年度（平成８年度）やさしい生物の話

毎月１回身近な生物に関する話題を取り上げ、生物学の元大学教授から分かりやすく話してもらい、身近な生物の環境に関心を向ける機会とした。

参加者は難しい言葉などにも強い深い関心を示し、思った以上に濃い内容となった。身近な自然環境とその中に住むヒトとしての人間が、今後どのような関わりをしていけばよいのか話合いだけでは結論は出ないが、少なくとも関心を増やす役割は果たしている。

期　間　1996年（平成８年）６月21日～1997年（平成９年）３月14日　　全10回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　99人

講　師　宮岡一雄氏

日時	テーマ	内容
6.21	生物学の概略	生物学の歴史や役割の概略
7.19	葉緑素と光合成	光合成の仕組みと葉緑素の働きについて
8.23	保全生態学について	今、注目を浴びている環境保全学について
9.20	生物の眼と色	私たちの目はどのような仕組みで見えるのか
10.18	水について	私たちが日常的に利用している水について
11.15	紅葉のしくみ	色がかわって落葉するメカニズムを中心に
12.13	ホルモンと生物	渡り鳥の渡りのきっかけとなるホルモンについて
1.17	植物の冬越し	冬芽の仕組みと働きを知る
2.21	雑木林のしくみ	身近な雑木林の仕組みと働きを知る
3.14	人間と自然の関係	私たちの人間とヒトの生き方を考える

1996年度（平成８年度）アメリカンリアルバードカービング

アメリカンリアルバードカービングの初歩的な技術を学び、合わせて野鳥の暮らしや生活環境について学ぶ機会として実施した。また、希望としては、参加者各自がいろいろな鳥を作成し、市内の公共施設に展示できるように考えている。

初心者の方にはカモやシギなど比較的簡単なものからはじめ、慣れている人には、カワセミを題材とした。

期　間　1997年（平成９年）１月29日～３月26日　全８回

会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　56人
講　師　水上清一氏

日時	テーマ	内容
1.29	オリエンテーション	自己紹介野鳥の生活について概略説明
2.5	頭を削る	頭の部分を削り進める
2.19	〃	頭の部分を削り進める
2.26	頭を削る	頭の部分を完成させる
3.5	体を削る	体の部分をおおざっぱに削る
3.12	〃	体や尾羽なども削りだす
3.19	〃	サンドペーパーなどで細部を調整する
3.26	色を塗る	初心者は単色で仕上げる

1996年度（平成８年度）趣味開発講座

会社勤めが主なため、なかなか趣味を持つ時間がなく、定年後の長い人生に不安を持つ定年間近な方、すでに定年を迎えた方や現役で働く40歳以上の方を対象に、地域での仲間づくりを進めるとともに趣味を持つことで、今後の生活が生きがいのあるものになればと、そのきっかけづくりの事業を推進した。

実行した中から太極拳を自主サークル化するとともに、ハイキング、調理実習も実施し生きがいを持って活動している。

期　間　1996年（平成８年）７月18日～1997年（平成９年）３月19日　全51回
会　場　白梅分館及び屋外
参加者　延べ参加者数　663人

・参加者による企画打ち合わせ
・打ち合わせにより探し出された趣味を実行した。

カメラ講習１回、ハイキング６回、陶芸11回、料理講習６回、絵手紙の絵学習会３回、篆刻３回、茶道３回、生きがい学習２回、反省会２回

1996年度（平成８年度）学習ハイキング

市民の健康増進志向でハイキング希望が多い中、40歳以上の方を対象に実施した。

ただ山などを歩いてくるだけではなく、案内マップ作成、地域での仲間づくり、集団活動学習、健康増進、生きがいづくり、自主活動化を目的に実施した。

マップについては公共施設にて配布し、市民に喜ばれている。

自主活動化については、平成８年度終了者でサークル化し、地域の中に入って活動している。

期　間　1996年（平成８年）４月９日～1997年（平成９年）３月７日　全14回

場　所　青梅市、あきる野市、奥多摩町、檜原村、都内等

参加者　延べ参加者数　238人

日時	行き先
4.9	井の頭公園、禅林寺、八幡神社
4.19	弁天山、城山、小峰公園、金剛滝
5.10	御岳山、ロックガーデン、大塚山
5.24	榎峠、雷電山、辛垣城趾、永山公園
6.7	梅沢探勝路、三滝、大楢峠
7.6	臼杵山、市道山
8.6	相模湖、石老山
9.11	大塚山、御岳山、日の出山
10.15	笹尾根
11.15	大岳山
12.7	名坂峠、高水三山
1.18	谷保天満宮、南養寺、城山
2.9	皇居一週
3.7	六道山、野山北公園、武蔵村山民俗資料館

1996年度（平成８年度）人形劇上演

身近な場所で、生の人形劇を見る機会は少ない。質のよい人形劇を見ることにより、感性を豊かにし、情操の発達を促す機会とした。

タイトル　ながぐつをはいた猫

日　時　1997年（平成９年）１月12日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　105人

1997年度（平成９年度）やさしい生物の話

毎月１回身近な生物に関する話題を取り上げ、生物学の元大学教授からわかりやすく話してもらい、身近な生物の環境に関心を向ける機会とした。

参加者は難しい言葉などにも強い関心を示し、思った以上に濃い内容となった。身近な自然環境とその中に住むヒトとしての人間が、今後どのような関わりをしていけばよいのか話し合いだけでは結論は出ないが、少なくとも関心を増やす役割は果たしている。

期　間　1997年（平成９年）６月13日～1998年（平成10年）３月14日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　97人
講　師　宮岡一雄氏

日時	テーマ	内　　容
6.13	生物の一年	生物の一年を誕生から死までをみる
7.11	イネの伝播について	イネはどこから生まれ日本にきたのか
8.22	イネの種類と生物	イネの種類と産地と日本の関係
9.12	アジアのイネ	アジアのイネはどこから来たのか
10.17	イネの成長	イネはどのような一年を過ごすのか
11.14	紅葉のしくみ	色が変わって落葉するメカニズムを中心に説明
12.12	カビの話	身近なカビとその利用法などを知る
1.9	植物の芽のしくみ	冬芽の仕組みと働きを知る
2.13	アレルギーとは	アレルギーのしくみと原因を知る
3.14	まとめ	今年の内容について、参加者同士で話し合う

1997年度（平成９年度）リアルバードカービング教室

バードカービングの基礎を学び、木から別の生命を生む楽しさを味わってもらい、身近な環境を考える機会とした。

今年は市の鳥「シジュウカラ」の作成に取り組み、実施した。

期　間　1998年（平成10年）１月27日～３月31日　全10回

会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　100人
講　師　水上清一氏

日時	テーマ	内　　容
1.27	オリエンテーション	自己紹介・材料説明など
2.3	身体を彫る	身体の部分を彫り進める
2.10	同　上	同　　上
2.17	頭を彫る	頭の部分を彫り進める
2.24	同　上	同　　上
3.3	身体・頭を彫る	細かい羽や目の部分を彫る
3.10	同　上	同　　上
3.17	全体を整える	サンドペーパーなどで細部をきれいにする
3.24	色を塗る	色の作り方・塗り方
3.31	同　上	同　上（完成）

1997年度（平成９年度）趣味開発講座（生きがいさがしの会）

会社人間で定年退職が近づくにつれ、どのように地域に入っていくのか、また、趣味もなくその後の長い人生をどのように暮らしていけるか不安に思っている方を中心に、すでに定年を迎え家にいる方や、現役で働く40歳以上の方々を対象に、仲間づくり、健康増進を進めると同時に、参加者の話し合いで企画された趣味を次々に実行し、今後の生活がより豊になればと事業を推進した。

期　間　1997年（平成９年）７月５日～1998年（平成10年）３月24日　全46回
会　場　白梅分館及び野外
参加者　延べ参加者数　429人
内　容　・説明会　１回
・参加者による趣味企画会　４回
・企画された趣味を実行した種類と回数
料理講習６回、カメラ講習４回、ハイキング５回、陶芸８回、手話講習３回、絵手紙の絵の学習３回、篆刻３回、書道３回、水彩画３回、生きがい学習２回、反省会１回

1997年度（平成９年度）学習ハイキング

市民の健康増進指向でハイキング事業要求が多い中、40歳以上の方を対象に実施した。ただ山を歩くのみではなく、市民配布用案内マップの作成、仲間づくり、集団活動の学習、健康学習、生きがい、自主活動化を目標に学習した。

期　間　1997年（平成９年）４月25日～1998年（平成10年）３月14日　全17回

場　所　青梅市、あきる野市、奥多摩町、檜原村、国分寺市等

参加者　延べ参加者数　225人

日時	行き先
４.25	浅間尾根
５.17	鳩ノ巣城山
６.８	広徳寺、小峰公園、秋川丘陵
６.27	旧二ツ塚、天狗岩、馬引沢峠、金剛寺
７.23	高尾山
８.８	御岳山、ロックガーデン、大塚山
９.６	白丸ダム、鳩ノ巣渓谷、越沢
９.27	相模湖、弁天山、嵐山
10.17	御岳山、大岳山
10.31	三頭山
11.15	浅間尾根
12.13	高水三山
１.14	青梅七福神めぐり
１.31	弁天山、城山、小峰公園
２.13	武蔵国分寺跡、薬師堂、真姿のいけ、お鷹の道、原ヶ谷戸庭園
２.27	延命寺、宗建寺、玉泉寺、大荷田、草花丘陵
３.14	青梅丘陵、吉野梅郷、即清寺

1997年度（平成９年度）太極拳

趣味開発講座での学習後、参加者から太極拳を自主活動していく要望があり、一般市民を加え自主化すべく事業を実施した。

期　間　1997年（平成９年）５月７日～７月９日　全10回

会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　157人

日時	内　　容
5.7	実施説明会及び太極拳学習
5.14	太極拳学習
5.21	同　上
5.28	同　上
6.4	同　上
6.11	同　上
6.18	同　上
6.25	同　上
7.2	同　上
7.9	太極拳学習及び自主化説明会

1997年度（平成９年度）中学生を持つ悩める親の会

中学生を持つ親になると、小学生時代には感じなかった同級生との成長の差を感じ、進学問題と絡んで不安になる親が圧倒的に多いのではないだろうか。子どもが人間として育つことと学校の成績や進学とは関係がないと思っていても、様々な局面で子どもに口を出し、時には大きなトラブルになってしまう。

このトラブルを各家の問題としてではなく、中学生を持つ親としてどのようにしたらよいかを真剣に語り合う中から、子どもにも大人にも人間らしく生きる道が探せるのではないかと思い実施したが、実際には各家の中でのトラブルを他人に話すことは難しく、大勢の参加というわけにはいかなかった。

しかし、講師からの中学生の現状報告や、現役高校生を迎えて生の声を聞き、また、家庭裁判所調査官の抱えるすさまじい実体などを聞いて、あらためて地域の大人としての役割やあり方を考える機会にはなった。

期　間　1997年（平成９年）８月26日～10月14日　全７回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　42人

日時	テーマ	内容	講師
8.26	オリエンテーション	自己紹介と参加された動機などを語り合う	
9.2	中学生の性・友人	中学生が抱えている問題を専門家から聞く	安達倭稚子氏
9.9	課題の発見	前週の話しを聞いて参加者各自が語り合う	
9.17	学習課題の設定	学習内容を決め、その方法論を知る	
9.30	子どもの犯罪	家庭裁判所調査官に犯罪の実体を聞く	小野垣宏一氏
10.7	青少年の実体	現在高校1年生に現在の気持ちなどを聞く	高校生
10.14	まとめ	講師を囲んで、課題の解消法などを聞く	安達倭稚子氏

1998年度（平成10年度）趣味開発講座（生きがいさがしの会）

会社勤務者等で定年退職の近い方、既に退職されている方、また、現役で働く40歳以上の方を対象に、「健康学習・仲間づくりを進めると同時に、今後の生活が少しでも豊かなものになれば」を目的に、参加者が自主企画した趣味を次々に実行し、自主活動化を図った。

期　間　1998年（平成10年）6月27日～1999年（平成11年）3月30日　全40回
会　場　白梅分館及び屋外
参加者　延べ参加者数　414人
内　容　・説明会　1回
　　・自主活動化会議　2回
　　・参加者による趣味の自主企画会　7回
　　・企画された趣味を実行した種類と回数
　　カメラ講習2回、魚つり1回、陶芸6回、絵手紙3回、てん刻3回、籐細工2回、盆栽講習2回、木彫り3回、茶道2回、ハイキング1回、書道1回、紙粘土工作3回、カメラハイキング1回

1998年度（平成10年度）学習ハイキング教室

市民の健康志向でハイキングの事業要求が多い中、40歳以上の方を対象に、館内学習（公民館、健康、ハイキング・登山）及び、館外学習（ハイキング・登山）を実施すると共に、市民配布用案内マップの作成、仲間づくり、生きがい、集団活動や歩き方等の学習を進め、自主活動化を目標に事業推進した。

期　間　1998年（平成10年）４月３日～1999年（平成11年）３月26日　全24回
会　場　青梅市、あきる野市、奥多摩町、檜原村、小金井市、川越市、飯能市他
参加者　延べ参加者数　354人

日時	行き先
4.3	小金井市、玉川上水緑道、小金井公園
4.19	奥多摩湖から倉戸山
5.16	学習会
5.20	戸倉城山、光厳寺、金剛の滝、広徳寺
5.30	学習会
6.5	奥多摩、むかし道
6.27	山梨県、三窪高原
7.4	学習会
7.18	数馬の切道し、白丸ダム、鳩ノ巣渓谷、大楢峠
8.12	浅間尾根
9.2	学習会
9.12	御岳山、大塚山、ロックガーデン
9.25	学習会
10.9	川越市、(小江戸)
10.30	古里、三滝、鳩ノ巣渓谷、白丸
11.20	三頭山
12.6	学習会
12.12	榎峠、雷電山、青梅丘陵
12.20	秋川丘陵、小峰公園、広徳寺
1.30	鳩ノ巣城山
2.13	弁天山、城山、小峰公園、秋川渓谷
2.27	学習会
3.6	飯能市、日和田山、物見山、ユガテ
3.26	学習会

1998年度（平成10年度）おもしろい生物の話

毎月１回身近な生物に関する話題を取り上げ、生物学の元大学教授からわかりやすく話してもらい、身近な生物の環境に関心を向ける機会とした。

毎回参加者が専門的な用語に苦戦しながらも質問をしている。問題が切実なこともあってかなり真剣なやりとりになることもある。単なる知識を吸収する場ではなく、交流と経験から知恵を得られる場になりつつある。

期　間　1998年（平成10年）５月８日～1999年（平成11年）３月19日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　92人
講　師　宮岡一雄氏

日時	テーマ	内　　容
５.８	生物学って？	生物を取り巻く現状を分析し、生物学の意味を語る
６.12	環境ホルモン	内分泌攪乱物質の仕組みと働きを学ぶ
７.10	ダイオキシン	ダイオキシンの毒性と仕組みを知る
８.21	粘菌について	粘菌の仕組みや特異な働きなどを歴史的に学ぶ
９.11	遺伝子組み替え	遺伝子の仕組みとその具体的な働きを知る
10.９	遺伝子組み替え２	遺伝子組み替え食品の問題点を知る
11.13	甘さについて	甘さってどのように感じられ測定されているのか
12.11	触媒の話し	触媒の働きと私たちの日常生活への利用を考える
２.19	里山について１	里山の構成と現状が抱える問題を歴史的に学ぶ
３.19	里山について２	具体的な里山をスライドで見ながら働きを知る

1998年度（平成10年度）説得力のあるチラシ作り

PTAや町会で広報作りに携わる人にしてみると、チラシ作りは大変な作業であるとのことで、毎年新年度になるとかなりの要求がある。しかし、実際の要求は印刷機の使い方が中心であったりすることが多い。そこで、今回はチラシ作りの基本的なことを中心に、実際のレイアウト作業などを専門家から教えてもらった。

期　間　1998年（平成10年）６月23日～７月14日　全４回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数54人

講　師　甲斐誠一氏

日時	テーマ	内容
6.23	チラシ作りの基本	ポスターチラシ作りの基礎的な知識を得る
6.30	チラシ作りの実践	作成の実技を通して具体的な知識を得る
7.7	リーフレットの編集	数ページにも及ぶ冊子の作り方などを知る
7.14	イラストやカラー	カラーやイラスト利用の注意点を知る

1998年度（平成10年度）福生の多摩川を隅々までのぞいてみよう

福生市内にはまとまった自然空間がほとんど残っていないため、福生市民にとっては多摩川の空間は多様な意味を持つ。市民にとっては現在の多摩川がどのような自然状況にあり、今後どのような方向で管理運営されるかなど、全く知る由もない。

しかし、「河川生態学学術研究　多摩川グループ」という専門家集団がちょうど多摩川の福生部分を多方面から調べているので、この機会に専門家集団に多摩川の状況を詳細に聞き、市民が河川管理に参加できる場と内容を検討する機会として実施した。

日常的に市内の多摩川を観察している市民にとっても、研究者との出会いはほとんどない。また、研究者は市内の継続して観察している集団を知らない。

お互いの知識と経験を出し合うことで、より豊かな生物が生活できる自然環境の創出に、市民が参加できる可能性があることあることがわかった。

しかし、現実的には研究者の研究の成果が中心になって河川管理計画が作られていく様子もわかり、今後の市民の参画のあり方こそ、声を大にしていわなければならないのではないだろうか。

期　間　1998年（平成10年）10月30日～12月８日　全７回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　94人

日時	テーマ	内容	講師
10.30	多摩川の意味	福生の住民にとっての多摩川の意味を考える	宮岡一雄氏
11.6	福生の昆虫	市内や多摩川河川敷などの、昆虫の実態報告	栗原　仁氏
11.10	多摩川を調べる？	河川生態学術研究会の活動と意味を聞く	小倉紀雄氏
11.17	カワラノギクの話	積年のデーターを元に、川原の変化を聞く	倉本　宣氏
11.27	川の水をのぞく	かに坂公園下の水生昆虫を研究者から聞く	加賀谷隆氏

12.1　かに坂付近の魚　　河川の魚の構成が変化している様子を聞く　　君塚芳輝氏
12.8　イタチを見たか？　河川敷のイタチの生息状況を聞く　　藤井　猛氏

1998年度（平成10年度）金属工芸教室

何でも買える時代の中、手作りの良さや楽しさを学び、また、いろいろな道具を使って、自分の新しい可能性を見つける機会とした。

期　間　1998年（平成10年）4月1日～5月20日　午後7時30分～9時30分　全6回
　　1998年（平成10年）11月13日～12月18日　午後1時30分～3時30分　全6回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　200人
講　師　石橋　初子氏

「時計の文字盤を作り」

日時	内　　容
4.1	オリエンテーション、材料・素材・行程の説明
4.8	銅板にデザインを写し、形を作っていく
4.15	銅板を焼いては、叩いてを繰り返し形を打ち出していく
4.22	同　上
5.13	同　上
5.20	仕上げ

「キャンドルスタンドを作る」

日時	内　　容
11.13	オリエンテーション、材料・素材・行程の説明
11.20	銅板を「葉」「花」「ろうそくの受け皿」それぞれに切り出す
11.27	銅板を焼き、叩いて形を作っていく
12.4	同　上
12.11	ロウ付けをして立体的な形にしていく
12.18	仕上げ

1999年度（平成11年度）多摩川の自然とふっさ

福生市内の多摩川を中心に、建設省が河川生態学の分野から学術研究をしている。

この調査研究を基に全国の河川管理計画が作られていくとのことで、全国的に注目されている。

日常的に市内の多摩川に関心を持っている市民と、学術調査研究者との出会いはほとんどない。また、研究者は市内で継続して観察している人たちを知らないので、この機会にお互いの知識と経験を出し合うことで、より豊かな生物が生活できる自然環境の創出に市民が参加できる可能性があることあることがわかった。

しかし、研究の成果が中心になって河川管理計画が作られていく実体があるので、今後の市民の参画のあり方こそ、十分検討する必要がある。

期　間　1999年（平成11年）10月26日～12月７日　全６回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　94人

日時	テーマ	内容	講師
10.26	オリエンテーション	スライドや資料から20年前の多摩川を知る	
11.2	多摩川の現状を語る	過去と現在の川原の変化を聞く	伊東司良氏
11.9	多摩川の現状を知る	多摩川の生態は、今どうなっているのか	倉本　宣氏
11.16	多摩川の現状を知る	多摩川の魚類のこの数年の変化を知る	君塚芳輝氏
11.30	野鳥の立場から	野鳥の会では川原の遷移をどう見るのか	成末雅恵氏
12.7	川原を考えると	福生にとっての多摩川の意味を考える	宮岡一雄氏

1999年度（平成11年度）おもしろい生物の話

毎月１回身近な生物に関する話題を取り上げ、生物学の元大学教授から分かりやすく話してもらい、身近な生物の環境に関心を向ける機会とした。

毎回、専門的な単語に苦慮することもあるが、生物界の仕組みや働きを理解することで、関心の領域が広がっていく。単なる知識を吸収する場ではなく、交流と経験から知恵を得られる場になるつつある。

期　間　1999年（平成11年）７月16日～12月17日　　全６回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　55人

講　師　宮岡一雄氏

日時	テーマ	内容

7.16	水について	身近な素材である水の構造と役割を知る
8.27	土について	土の構造や働きと、生物との関係を学ぶ
9.17	水と植物について	水が植物体内ではどのような働きをしているのかを知る
10.15	森林浴について	森林浴の実際の仕組みや働きを基本的な部分から知る
11.19	コンパニオンプラント	一緒に植えると害虫が寄らない組み合わせ等を知る
12.17	福生の野生草花	福生の野草の増減や実体を学ぶ

1999年度（平成11年度）説得力のあるチラシ作り

毎年新年度になると、PTAや町会で広報作りに携わる人からかなりの要求がある。実際の要求の中身はは、印刷機の使い方が中心であったりすることが多い。そこで、今回はわかりやすく読みやすいチラシ作りの基本的なことを中心に、実際のレイアウト作業などを専門家から教えてもらった。

期　間　1999年（平成11年）6月22日～7月13日　全4回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　35人
講　師　甲斐誠一氏

日時	テーマ	内容
6.22	チラシ作りの基本	ポスターチラシ作りの基礎的な知識を得る
6.29	チラシを作ってみよう	作成の実技を通して具体的な知識を得る
7.6	リーフレットを作る	数ページにも及ぶ冊子の作り方などを知る
7.13	イラストや色の注意	カラーやイラスト利用の注意点を知る

1999年度（平成11年度）アメリカンリアルバードカービング

バードカービングの基礎を学び、木から別の生命を生む楽しさを味わってもらい、身近な環境を考える機会とした。

今回は家の庭先に遊びに来る「メジロ」の作成に取り組んだ。

期　間　1999年（平成11年）5月25日～7月27日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　85人
講　師　水上　清一　氏

日時	テーマ	内　　容
5.25	オリエンテーション	自己紹介・材料の説明
6.1	体を彫る	体の部分を掘り進める
6.8	同上	同　上
6.15	頭を彫る	頭の部分を掘り進める
6.22	同　上	同　上
6.29	体と頭を彫る	細かい羽や目の部分を彫る
7.6	同　上	同　上
7.13	全体を整える	サンドペーパーなどで細部をきれいにする
7.22	同　上	同　上
7.27	色を塗る	色の作り方・塗り方

1999年度（平成11年度）移動公民館

公民館は通常、館の内外で主催事業を実施しているが、今後の市民の生涯学習を一層高めるため、未利用者の開拓と公民館の周知、そして、市民の健康増進を図ることを目的に、実際生活に即した問題をテーマに、公民館を地域に移動して事業展開した。

期　間　1999年（平成11年）8月3日～10月27日　全6回

会　場　町会の会館、自宅、白梅会館

参加者　延べ参加者数　274人

事業のテーマ　1介護保険　2ゴミの収集　3高齢者問題　4ボランティア
5公民館活動　6体操　7太極拳　8ハイキング

テーマ別実施回数　介護保険4回、ゴミの収集1回、体操1回

1999年度（平成11年度）生きがいさがし教室

会社勤務者等で定年退職の近い方や、既に退職して家にいる方、また、生きがいや趣味を見つけている方を対象に、地域の中での仲間づくりと健康についての学習を進めながら、今後の生活が趣味の持てる豊かなものになればを目的に、参加者の話し合いで自主企画した趣味を順次実施し、生きがいにつながるきっかけづくりを行った。

期　間　1999年（平成11年）6月26日～2000年（平成12年）3月28日　全29回

会　場　白梅分館及び熊川地域体育館

参加者　延べ参加者数　290人

内　容　＊　説明会　1　回

＊　参加者による趣味の自主企画会　4　回

＊　企画された趣味の種類と実行した回数

陶芸２回、ペン習字３回、太極拳３回、 俳句３回、絵手紙３回、水彩画３回、マジック１回、卓球２回、手話３回、社会学習１回

1999年度（平成11年度）　学習ハイキング教室

市民の健康志向からハイキングの事業ニーズが多い中、35歳以上の方を対象に、館内学習（公民館、健康、ハイキングの仕方など）及び館外学習（ハイキング・登山）を実施すると共に、市民に配布するハイキング案内マップの作成、仲間づくり、集団活動の仕方、歩き方等の学習を進め、市民の自主活動化を目標に事業推進した。

開催日　1999年（平成11年）５月２日～2000年（平成12年）３月24日　全25回

会　場　青梅市、あきる野市、奥多摩町、檜原村、東村山市、飯能市他

参加者　延べ参加者数　280名

内訳・・ハイキング17回、148名、学習会３回

（以下の、説明会１回26名、73名、マップ作成２回13名、自主活動化会議２回20名については、下表に記載していない）

学習ハイキング、行き先及び学習会内容

回数	実施日	曜日	内　容
1	5月2日	日	青梅市、塩船観音～七国峠～笹荷田峠～岩倉温泉
2	5月27日	木	埼玉県、能仁寺～多峰主山～天覧山
3	6月5日	土	学習会、公民館の役割・目的、ハイキングの歩行と装備
4	6月11日	金	東村山市、北山公園～八国山～正福寺～徳蔵寺
5	6月25日	金	学習会、山道の歩き方、パック方法、健康等
6	7月2日	金	桧原村、浅間尾根～佛沢の滝
7	7月17日	土	奥多摩町、愛宕山～創造の森～多摩川沿い遊歩道
8	8月4日	水	奥多摩町、数馬の切り通し～鳩の巣渓谷～古里
9	8月18日	水	あきる野市、城山～光厳寺～秋川渓谷
10	9月12日	日	青梅市、大塚山～御岳山～ロックガーデン～綾広滝

11	9月25日	土	学習会、公民館の原則、健康、マップの作り方
12	10月2日	土	青梅市、御岳山～日の出山～吉野梅郷
13	10月22日	金	青梅市、高水三山
14	11月5日	金	奥多摩町、御前山(庁用バス使用)
15	11月20日	土	埼玉県、子の権現～竹寺
16	12月4日	土	あきる野市、秋川丘陵～小峰公園～広徳寺
17	12月18日	土	あきる野市、弁天山～城山～日向峰
18	1月21日	金	武蔵村山市、狭山湖～六道山～野山北公園～資料館
19	2月5日	土	埼玉県、高山不動尊～関八州見晴らし台～黒山三滝
20	3月11日	土	青梅市、青梅丘陵～吉野梅郷～二俣尾

（6）高齢者対象事業の10年

1990年度（平成２年度）白梅コース

期　間　1990年（平成２年）８月17日～10月12日　全４回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　140人

日　時	内　　容	備　　考
8.17	出会い・自己紹介、私の人生の歩み	話し合い
8.31	花の苗の育て方	石川泰広氏
9.28	身近な同年輩者の様子（民生委員さんとの交歓）	
10.12	家庭介護入門	保健所保健婦

1990年度（平成２年度）人生をうたおう会

コーラスと民謡の合唱を通して、心と体の健康にむけ以下のように実施した。

期　間　1990年（平成２年）６月８日～10月19日　全10回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　400人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　　容
6.8	懐かしい曲、思いでの歌の数々を楽しく歌い上げる
6.22	〃
7.6	〃
7.20	〃
8.11	〃
8.25	〃
9.8	“歌い語りの集い”選曲、練習
9.22	〃
10.6	〃
10.19	人生歌い語りの集い　本番（会場　市民会館）

総括　寿市民ひろば終了後、人生をうたおう会として自主活動を継続。

以上、市制20周年記念事業として、全36回、延べ2219人の参加を得て終了した。
なお、これを契機に、来年度は更に態勢・コースを充実し実施するものとする。

1991年度（平成３年度）白梅熟年ひろば

参加者各自の生活体験をもとに、社会変化をみつめ、絶えず自己を養い生きがいとなるものを見つけだす機会として、次のとおり実施した。

期　間　1991年（平成３年）９月13日～11月22日　全10回
会　場　公民館（白梅分館）
参加者　延べ参加者数　275人

日時	内　容	備　考
9.13	自己紹介・オリエンテーション	立川愛雄氏
9.20	福生の民俗・文化財	〃
9.27	福生の歴史（玉川上水の歴史）	高崎勇作氏
10.4	福生の民俗・文化財	立川愛雄氏
10.18	食事と病気	福生保健所職員
10.31	野外活動	立川愛雄氏
11.1	戦前戦後をふり返って	〃
11.8	「ふっさ子」の特色	山崎茂雄氏
11.15	まちの話題などについての情報交換	立川愛雄氏
11.22	〃	〃

1991年度（平成３年度）人生をうたおう会

歌を歌うことによって、自己の活力に伸長ややりがいを保持させられればと、次の通り実施した。

期　間　1991年（平成３年）８月24日～11月30日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　320人
講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　容
8.24	自己紹介・オリエンテーション、選曲

8.31　発声練習・懐かしい曲・思い出の曲
9.14　〃
9.28　〃
10.12　文化祭「音楽のひろば」選曲・練習
10.26　「人生歌い語りの集い」選曲・練習
11.4　市民文化祭「音楽のひろば」出演
11.16　「人生歌い語りの集い」練習
11.29　最終練習
11.30　「人生歌い語りの集い」出演

白梅七宝教室

参加者自らの時間、自らの人生、そして趣味を持つ機会として、また仲間つくりなどのを考える機会として、次のとおり実施した。

期　間　1991年（平成3年）11月16日～1992年（平成4年）4月15日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　223人

日時	内容	備考
11.16	オリエンテーション、自己紹介、七宝焼きとは	
11.20	ペンダントを一色盛で	
12.4	ブローチを一色盛で	
12.18	多色模様の七宝	
1.15	〃	3月30日に変更
1.29	描き割り七宝	
2.5	〃	
2.19	フリット七宝	
3.4	〃	
3.18	終了式	4月15日に順延

1992年度（平成4年度）白梅熟年ひろば

期　間　1992年（平成4年）9月18日～1993年（平成5年）1月8日　全11回

会　場　白梅分館他

参加者　延べ参加者数　340人

日時	内　　容	講　　師
9.18	自己紹介・オリエンテーションなど	
9.25	施設見学　西多摩衛生組合・福生市リサイクルセンター	衛生組合職員
10.2	もうけ話しの落とし穴	東京都消費者
10.9	訪問販売の実態	センター職員
10.16	福生の歴史講話　熊川の歴史について	高崎　勇作氏
10.23	川越市史について	立川　愛雄氏
10.30	川越史跡巡り	立川　愛雄氏他
11.6	保健食品の販売と契約	消費者センター
11.13	健康と食生活について	保健所職員
11.20	健康な身体を維持するには	吉野　チエ氏
1.8	青梅市の史跡巡り	立川　愛雄氏

1992年度（平成４年度）人生をうたおう会

期　間　1992年（平成４年）９月21日～11月28日　全10回

会　場　白梅分館他

参加者　延べ参加者数　350人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　　容
9.21	自己紹介・オリエンテーション
9.28	発声練習（リズム練習、合唱練習）
10.5	〃
10.19	〃
11.2	文化祭「音楽のひろば」出演の練習
11.7	〃
11.8	文化祭「音楽のひろば」出演
11.16	コーラス練習
11.23	最終練習

11.28　「人生歌い語りの集い」出演　〃

1993年度（平成５年度）白梅熟年ひろば

期　間　1993年（平成５年）９月17日～1994年（平成６年）１月７日　全11回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　352人

日時	内容	講師
9.17	自己紹介・オリエンテーション	
10.1	記者の目から見た福生市	坂本丁次氏
10.8	食品テスト	都消費者センター
10.15	私の見た日本および日本人	外国人留学生
10.22	飲む水流す水	都消費者センター
10.29	江戸渡欧教博物館巡り	立川愛雄氏
11.5	福生市の福祉対策について	福生市職員
11.12	都立計画からみた福生市	福生市職員
11.19	寝たきりにならないために	保健所職員
12.3	私の生きがい	岡野法世氏
1.7	青梅市の史跡巡り	立川愛雄氏

1993年度（平成５年度）人生をうたおう会

期　間　1993年（平成５年）８月24日～11月26日　全14回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　504人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内容
8.24	自己紹介・オリエンテーション
8.31	〃
9.7	〃
9.14	〃
9.21	文化祭「音楽のひろば」練習

9.28　　〃
10.5　三館合同「歌い語りの集い」練習
10.19　　〃
10.26　コーラス練習
11.2　　〃
11.7　市民文化祭「音楽のひろば」出演
11.9　コーラス練習
11.16　最終練習
11.26　「人生歌い語りの集い」出演

1994年度（平成6年度）白梅熟年ひろば

高齢期の生活、仲間づくり、生きがいを目的に実施している「寿市民ひろば」の一環として、白梅分館では「熟年ひとば」の名称で次の事業を行った。

期　間　1994年（平成6年）9月9日～1995年（平成7年）1月13日　全12回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　356人

日時	内容	講師
9.9	自己紹介、オリエンテーション	立川愛雄氏
9.30	人生について（自分史）	八坂富子氏
10.7	高齢者の病気予防について	保健所職員
10.12	バスツアー都立薬用植物園見学	植物園職員
10.21	日常生活における仏教後について	神谷宣徹氏
10.28	市の土木事業について	市職員
11.11	市の最近の農業について	田村彰一氏
11.18	私の履歴書について	来住野和也氏
11.25	家族について	笹本エヴァリン氏
12.2	人生流転について	岩沢清松氏
1.5	青梅市の寺社、史跡見学（バスツアー）	立川愛雄氏
1.13	反省会	同　上

1994年度（平成６年度）人生をうたおう会

歌うことや、仲間同士の活動を通して、活気ある自己とリズミカルな生活づくりをめざし、次の通り実施した。

期　間　1994年（平成６年）９月６日～12月２日　全12回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　488人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日　時	内　　容
9.6	自己紹介、オリエンテーション
9.13	発声、懐かしい曲、思いでの歌各曲
9.20	同　上
9.27	同　上
10.4	文化祭「音楽のひろば」選曲、練習、三館合同「歌い語りの集い」練習
10.18	同　上
10.25	コーラス合唱練習
10.30	市民文化祭　音楽のひろば出演
11.15	コーラス合唱練習
11.22	同　上
11.29	同　上
12.2	人生歌い語りの集い出演

1995年度（平成７年度）白梅熟年ひろば

高齢期の生活、仲間づくり、生きがいを目的に実施している「寿市民ひろば」の一環として、白梅分館では「熟年ひろば」の名称で次の事業を行った。

期　間　1995年（平成７年）９月８日～1996年（平成８年）１月12日　全12回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　360人

日時	内　　容	講　師
9.8	自己紹介、オリエンテーション	立川愛雄氏
9.29	健康維持について	保健所職員

10.6	古文書からみる熊川の歴史について	岩沢清松氏
10.13	事故防止について	福生警察署職員
10.20	都民の森バスツアー	立川愛雄氏
10.27	行政全般について	野沢久人助役
11.10	日本についてこう思う	今井エステル
11.17	市の水道状況について	水道事務所長
12.1	戦後50年について	立川愛雄氏
12.8	戦後50年　文書の縦書きから横書きへ	重見通明氏
1.5	青梅市の寺社見学（バスツアー）	立川愛雄氏
1.12	反省会	参加者全員

1995年度（平成７年度）コール白梅

歌うことや、仲間同士の活動を通して、健康や生きがいのある生活をめざし、次の通り実施した。

期　間　1995年（平成７年）９月５日～12月２日　全13回

会　場　白梅分館及び公民館本館

参加者　延べ参加者数　559人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日　時	内　　容
9.5	自己紹介、オリエンテーション
9.12	発声、懐かしい曲、思いでの歌各曲
9.19	〃
9.26	〃
10.3	文化祭「音楽のひろば」選曲、練習、三館合同「歌い語りの集い」練習
10.17	〃
10.24	コーラス合唱練習
10.31	〃
11.7	〃
11.12	市民文化祭音楽のひろば出演
11.21	コーラス合唱練習

11.28　　〃

12.2　　人生歌い語りの集い出演

1996年度（平成８年度）白梅熟年ひろば

高齢期の生活、仲間づくり、生きがいを目的に実施している「寿市民ひろば」の一環として、白梅分館では「熟年ひろば」の名称で次の事業を行った。

期　間　1996年（平成８年）９月13日～1997年（平成９年）１月17日　全12回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　372人

日時	内容	講師
９.13	内容説明、自己紹介、語り合い	立川愛雄氏中心にして
９.27	思いでの歌を歌おう	山下やよい氏
10.４	江戸の粋、彫りもの人形とお話	原嶋サブロー氏
10.11	山のふるさと村見学バスツアー	
10.18	イランと日本のちがい	アーマド・ゴルバン氏
10.25	福生市の会計行政について	森田進収入役
11.８	頭脳の働きについて	宮岡一雄氏
11.22	福生市の議会行政について	岩崎好亮氏
12.６	高齢者の食生活について	保健所職員
12.20	若返り体操	佐藤佳代子氏
１.10	青梅市の寺社見学（バスツアー）	立川愛雄氏
１.17	反省会	立川愛雄氏を中心に

1996年度（平成８年度）コール白梅

仲間同士のコーラス活動を通して、集団で歌うことの楽しみ、健康増進、生きがいを求め、次の通り実施した。

期　間　1996年（平成８年）９月10日～11月30日　全13回

会　場　白梅分館及び公民館本館

参加者　延べ参加者数　585人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　　容
9.10	内容説明、自己紹介、発声のしかた
9.18	発声、懐かしい曲、思い出の歌コーラス
9.15	〃
10.1	〃
10.8	ジョイントコンサート　マリンバ・ピアノ・ハーモニカ・歌
10.15	音楽のひろば、歌い語りの集い練習
10.22	〃
10.29	〃
11.4	市民文化祭、音楽のひろば出演・発表
11.12	歌い語りの集い練習
11.19	〃
11.26	〃
11.30	人生歌い語りの集い出演・発表

1997年度（平成９年度）白梅熟年ひろば

“人生を楽しく元気に生きるまち福生”をめざし、高齢期の仲間づくり生きがいづくり、健康増進に向け実施している。「寿市民ひろば」の一環として白梅分館では「熟年ひろば」の名称で次の事業を行った。

期　間　1997年（平成９年）９月12日～12月19日　　全12回

会　場　白梅分館及び屋外

参加者　延べ参加者数　384人

日時	内　　容	講　　師
9.12	内容説明、自己紹介、語り合い	
9.14	20周年記念、公民館のつどい出演	
9.26	国際交流ボランティア、ゆうあいふっさについて	高橋登志江氏
10.3	バスツアー御岳渓谷、青梅市郷土資料館他	
10.10	ハイキング、中央公園、かに坂公園往復	
10.12	ボーイスカウトカブ隊との交流会	
10.24	若返り体操	佐藤佳代子氏

11.7	日本と韓国の生活や風習の違いについて	高橋登志江氏
11.14	茶道講習会	杉浦晃陽氏
11.28	昔懐かしい歌をうたおう	山下やよい氏
12.5	修行について	服部照親氏
12.19	太極拳講習会	佐藤佳代子氏

1997年度（平成９年度）コール白梅

寿ひろば事業として、コーラス活動をしながら集団で歌うことの楽しみ、仲間づくり、健康増進、生きがいを求め、次の通り実施した。

なお本年は、ハープ、ピアノ、歌によるコンサートを開催し好評を得た。参加者も徐々に増えている。

期　間　1997年（平成９年）９月９日～12月７日　　全12回

会　場　白梅分館及び公民館本館

参加者　延べ参加者数　611人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　　容
9.9	事業内容の説明、発声の仕方などの練習
9.14	20周年記念、公民館のつどい出演
9.23	文化祭、音楽のひろば出演
10.7	懐かしい曲、思い出の歌、歌唱、コーラス練習
10.14	〃
10.21	〃
10.28	〃
11.11	〃
11.18	〃
11.26	〃
12.2	〃
12.7	コール白梅コンサート（ゲスト中村優子氏ハープ）

1998年度（平成10年度）白梅熟年ひろば

“高齢期を楽しく元気に生きるまち福生”を目指し、仲間づくり、生きがい、健康増進に向け実施している「寿市民ひろば」の一環として、白梅分館では「熟年ひろば」の名称で、次の事業を行った。

期　間　1998年（平成10年）９月11日～1999年（平成11年）１月８日　全11回
会　場　白梅分館及び屋外
参加者　延べ参加者数　287名

日時	内容	講師
9.11	内容説明、自己紹介、語り合い	
9.18	若返り体操で元気に	佐藤　佳代子氏
9.26	ゲートボウル交流会	小沢　一　郎氏
10.2	ハイキング、中央公園～南公園	
10.16	国際交流、タイと日本の生活様式のちがい	
10.23	高齢者の健康対策について	市　職　員
11.10	バスツアー、吉野梅郷、御岳渓谷	
11.13	介護保険制度について	市　職　員
12.4	みんなで昔懐かしい歌をうたおう	山下　やよい氏
12.18	反省会、懇談会	
1.8	研修会、青梅市の宗建寺、明白院他	

1998年度（平成10年度）コール白梅

高齢者事業の「寿市民ひろば」として、コーラス活動をしながら集団で歌う楽しさ、仲間づくり、健康増進、生きがいを求め、次のとおり事業推進した。

なお、本年は、ソプラノ横田郁子氏、バリトン井上高男氏、ピアノ山下やよい氏によるコンサートを開催し、好評を得た。

期　間　1998年（平成10年）10月６日～12月15日　全10回
会　場　白梅分館及び本館
参加者　延べ参加者数　557人
講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内容

10.6	内容説明、発声の仕方などの練習
10.13	懐かしい曲、思い出の歌、発声、歌唱、コーラス練習
10.27	〃
11.6	〃
11.8	文化祭に出演
11.17	コーラス練習
11.25	〃
11.28	人生歌い語りのつどい出演
12.8	コンサート開催
12.15	コーラス練習、反省会

1999年度（平成11年度）白梅熟年ひろば

“高齢期を楽しく元気に生きるまち福生"を目指し、仲間づくり、生きがい、健康増進に向け実施している「寿市民ひろば」の一環として、白梅分館では「熟年ひろばの名称で、次の事業を推進した。

期　間　　1999年（平成11年）9月17日～2000年（平成12年）2月26日　全7回
会　場　　白梅会館及び館外
参加者　　延べ参加者数　199人

日時	内　　容	講　　師
9.17	内容説明、自己紹介、語り合い	全員で
10.1	気楽に歌をうたおう	山下やよい氏
10.15	ゴミの仕分けとお話し	清掃課職員
11.12	体操で楽しく	佐藤佳代子氏
11.26	介護保険について	介護保険課職員
1.7	青梅市、寺社研修（庁用バスにて）	
2.26	ボーイスカウトと世代交流会	福生二団カブ隊

1999年度（平成11年度）コール白梅

高齢者対象事業「寿市民ひろば」の一環として、仲間づくり、健康増進、生きがいづくりをしながら、集団でのコーラス活動の楽しさを学びつつ、次のとおり事業推進

した。

期　間　1999年（平成11年）10月26日～12月７日　全７回

会　場　白梅分館及び本館

参加者　延べ参加者数　408人

講　師　山下やよい氏（ピアノ演奏・歌唱指導）

日時	内　　容
10.26	内容説明、自己紹介、発声の仕方
11.2	思い出の歌の発声・歌唱・コーラス
11.7	文化祭の音楽のひろばに出演
11.16	思い出の歌、懐かしい歌のコーラス
11.23	〃
11.27	人生うたい語りのつどいに出演
12.7	コール白梅コンサート　出演者：山下やよい、井上高男、横田郁子、高山千代美、浜島美穂各氏

（7）利用者発表会（後の白梅まつり）

1990年度（平成２年度）第９回利用者発表会実行委員会

日頃の公民館活動の成果を発表する場、個々のサークルが同一の目標に向かって活動することにより、交流・親睦を深める機会とする。そして、公民館活動を地域に広め、熊川地区の市民の学習・文化のひろば（祭典）として、1990年５月末をめどに、実行委員会を組織し、準備を進めた。

期　間　1990年（平成２年）４月４日～1991年（平成３年）３月28日　全８回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　135人

日時	内　　容	備　考
４.４	展示のひろば打ち合わせ会	10団体15人
４.５	展示のひろば打ち合わせ会	８団体12人
４.12	各ひろば企画集約及び広報PRについつて	20団体30人
４.13	語らし・フィナーレ打ち合わせ会	６団体８人
５.7	最終実行委員会、当日確認・手分けなど	25団体34人

1990年度（平成２年度）第10回利用者発表会実行委員会

日時	内　　容	備　考
３.16	第10回発表会の企画について	15団体16人
３.24	演示のひろば打ち合わせ会	10団体12人
３.28	展示のひろば打ち合わせ会	８団体８人

第10回白梅利用者発表会を1991年（平成３年）５月18日・19日をめどに、実行委員会を進めた。

1990年度（平成２年度）利用者発表会（白梅まつり）

■５月26日（土）　入場者198人

展示のひろば　「パッチワーク、籐細工、生け花、陶芸、ちぎり絵、子ども絵画、ボード織、書道、写真、手作り樽御輿、広告紙利用細工（アンデルセン）展、グループ活動展」　午前10時～午後５時

お茶席　午後１時～４時

親と子のひろば　午後２時～４時4

■５月27日（日）　入場者411人

展示のひろば　　前日と同様。ゴキブリ退治だんご販売（午前10時～正午）

語らい茶屋　　午前10時～正午

演示のひろば　　「民謡、民踊、詩吟、コーラス合唱、おはやし、社交ダンス演舞等」　正午～午後３時

フィナーレのひろば　「その場で楽しめるダンス、民踊、ランバダ風リズム体操、ゲーム、合唱を屋外庭で！」　午後３時～４時

1991年度（平成３年度）第10回利用者発表会実行委員会

日頃白梅分館を利用して活動しているサークルの発表の場として、そして、準備の段階から各サークル間を越えて交流することから、交流の深まりが地域住民としての情報交換や地域づくりのきっかけの場として、実行委員会をそしきして準備を進めた。

期　間　1991年（平成３年）４月４日～５月22日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　50人

日時	内　　容	備　考
４.４	第２回実行委員会　各ひろばの進行状況の確認その他	20人
４.24	第３回実行委員会　パンフレットやポスターを各町会へ配布準備	15人
５.22	発表会をふり返って	15人

1991年度（平成３年度）第11回利用者発表会実行委員会

毎年恒例の利用者発表会を、今年は以下の日程で準備を行った。

日時	内　　容	備　考
３.30	第11回利用者発表会の中身の検討について	参加者は20人

1991年度（平成３年度）利用者発表会

■５月18日（土）　入場者数　276人

展示のひろば　　午前10時～午後５時

「パッチワーク、籐細工、活け花、陶芸、ちぎり絵、子ども絵画、

レザークラフト・れんげ園作品展示」

お茶席　午後１時～４時

親と子のひろば　午後２時～４時

■５月19日（日）　入場者295人

展示のひろば　前日と同じ

語らい茶屋　午前10時～正午

演示のひろば　「民謡、民踊、詩吟、コーラス、三味線、社交ダンスなど」

フィナーレのひろば　参加者のみんなでゲーム・みんなで合唱を・ドラえもんの歌を手話で挑戦、その場で楽しめるダンス等

1992年度（平成４年度）利用者発表会実行委員会

白梅会館を利用している人達が、自らの活動の様子を発表する機会として毎年行っている。この実行委員会を通して、他のサークルの人との交流や催し物のジョイントといったことが生まれ、新たな交流の機会となっている。

期　間　1992年（平成４年）４月６日～５月27日　全５回

会　場　白梅会館

参加者　延べ参加者数　87人

日時	内　容
４.６	主に展示のサークル対象に、部屋の利用についての方法等を話し合った
４.８	主に演示のサークルを対象に、出演順序や各自の役割などの決定
４.15	全体的な進行状況の確認、各サークルの役割確認
５.８	進行状況の確認、ポスター、印刷物などの配付や当日の準備などの確認
５.27	発表会を振り返る会。各自の感想や次回に向けての反省等を話し合った

1992年度（平成４年度）第11回白梅会館利用者発表会

■５月23日（土）　入場者数　220人

展示のひろば　午前10時～午後５時まで

パッチワーク・生け花・ちぎり絵・籐細工・陶芸・手描き染め

お茶席　午後１時～午後４時まで

親と子のひろば　午後２時～午後４時まで

ゲームや金魚すくいなど

■5月24日（日）　入場者数　230人

展示のひろば　午前10時～午後4時まで

語らい茶屋　午前10時～正午

演示のひろば　正午～午後3時30分

民踊・民謡・詩吟・三味線・パネルシアター・コーラス・社交ダンス

模擬店　午前10時～午後

クッキー、綿菓子、竹とんぼなど

1993年度（平成5年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館を利用している人達が、自らの活動の様子を発表する機会として毎年行っている。この実行委員会を通して、他のサークルの人との交流や催し物のジョイントといったことが生まれ、新たな交流の機会となっている。

期　間　1993年（平成5年）4月20日～1994年（平成6年）3月23日　全6回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　109人

日時	内　容
4.20	第12回発表会の中味の総合的な確認作業など
5.18	最終実行委員会として、ポスター、チラシなどを配付した
2.15	第13回の発表会について、参加者でイメージを語り合う
3.1	イメージを具体化するために、各自の役割などを話し合う
3.16	具体的な作業と、今年のテーマや内容を決定する
3.23	テーマや役割分担などから、各ひろばにそって話し合いを進める

総括　毎年、発表会は白梅分館を利用する市民の側の問題だといいながら、実質的には利用者だけでは運営されていない。また、演示を希望するサークルでもかなりの頻度で発表の場を持っているので、白梅分館の利用者発表会の場が唯一の場ではなく、多くのサークルが日程を理由に参加できなくなっている。このような状況をどのように変えていけるのか、今後も利用者交流会などで検討していく必要があると思っている。

1993年度（平成５年度）第12回白梅会館利用者発表会

■５月29日（土）　入場者数　200人

展示のひろば　午前10時～午後５時まで

パッチワーク・生け花・籐細工・陶芸・手描き染め

お茶席　午後１時～午後４時まで

親と子のひろば　午後２時～午後４時まで

映画やゲーム・紙芝居を、母親が主体となって進めた。

■５月30日（日）　入場者数　250人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで

語らい茶屋　午前10時～正午

演示のひろば　正午～午後３時30分

民踊・民謡・詩吟・三味線・大正琴・コーラス・社交ダンス

模擬店　午前10時～午後

クッキー、ケーキなどの販売（ひまわり共同作業所）

1994年度（平成６年度）利用者発表会実行委員会

期　間　1994年（平成６年）４月６日～６月15日　全４回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　52人

白梅分館を利用している人達が、自らの活動の様子を発表する機会として毎年行っている。この実行委員会を通して、他のサークルの人との交流や催し物のジョイントといったことが生まれ、新たな交流の機会となっている。

日時	内　　容
4.6	なんでもやってみようコーナー打ち合わせ
4.12	各自のイメージと具体的な内容の検討
5.10	最終的な打ち合わせ
6.15	発表会を振り返り、今後の方向などを話し合った

総括　毎年行われていることで、マンネリを生じている部分もある。利用者による企画や立案運営が行われてこそ、本当の手作り文化が生まれてくるので、今後も手作りの文化を広める拠点としての役割を考えていく。

1994年度（平成６年度）第13回白梅会館利用者発表会

■６月４日（土）　入場者数　300人

展示のひろば　午前10時～午後５時まで
パッチワーク・生け花・籐細工・陶芸・手描き染め

お茶席　午後１時～午後４時まで

親と子のひろば　午後２時～午後４時まで
子どもの絵画クラブによって、マジカルスペースを作りだした。

■６月５日（日）　入場者数　350人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで

語らい茶屋　午前10時～正午

演示のひろば　正午～午後３時30分
民踊・民謡・詩吟・三味線・大正琴・コーラス・社交ダンスなど
なんでもやってみようコーナー
正午～午後４時ころまで
籐細工や七宝焼に挑戦する

模擬店　午前10時～午後
クッキー、ケーキなどの販売（ひまわり共同作業所）
れんげ園のメンバーの手作り作品の展示販売など

1995年度（平成７年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館を利用している人たちが、自らの活動の様子を発表する機会として毎年利用者発表会を開いているが、そのために実行委員会を開き、自らの力とお互いが共同協力する体験を通して、サークルを越えた人間関係を深め、地域の人のネットワーク作りの場や機会になっている。

期　間　1995年（平成７年）４月１日～６月７日　全６回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数107人

日時	内　　容
４.１	今年の発表会について意見を持ち寄る
４.８	展示のイメージと具体的な内容の検討

4.9　　演示のイメージと具体的な役割分担などを決める
4.19　　準備の進行具合のチェック、役割分担の確認などを行う
5.12　　最終的な打ち合わせ
6.7　　発表会を振り返り、今後の方向などを話し合った

1995年度（平成７年度）第13回白梅会館利用者発表会

■５月27日（土）　入場者数　350人

展示のひろば　午前10時～午後５時まで
パッチワーク・生け花・簾細工・陶芸・手描き染め・書道・子ども絵画
お茶席　午後１時～午後４時まで
模擬店　午前11時から（売り切れ次第終了）
作ってあそぶ　午前10時～午後４時まで
なんでもやってみようコーナー　午前10時～正午まで
粘土ではし置やコーヒーカップなど、各自のイメージで作成し、後日、窯で焼いてみる

■５月28日（日）　入場者数　400人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで
内容は、前日と同じ
語らい茶屋　午前10時～正午
演示のひろば　正午～午後４時
民踊・民謡・詩吟・三味線・大正琴・コーラス・社交ダンスなど
なんでもやってみようコーナー　正午～午後４時ころまで
内容は前日と同じ
模擬店　午前10時～午後
クッキー、ケーキなどの販売（ひまわり共同作業所）
れんげ園メンバーの手作り作品の展示販売など
バザー　午前11時～（売り切れ次第終了）
幼児の衣類やおもちゃなど

1996年度（平成８年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館を利用している人たちが、自らの活動の様子を発表する機会として毎年利用者発表会を開いているが、そのために実行委員会を開き、自らの力とお互いが共同協力する体験を通して、サークルを越えた人間関係を深め、地域の人のネットワーク作りの場や機会になっている。

期　間　1996年（平成８年）４月16日～６月18日　全４回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数97人

日時	内　　容
4.16	今年の発表会について意見を持ち寄る
4.25	展示・ 演示のイメージと、具体的な内容の検討・役割分担
5.23	最終的な打ち合わせと配布物の整理など
6.18	発表会を振り返り、今後の方向などを話し合った

1996年度（平成８年度）第15回白梅会館利用者発表会

■６月８日（土）　入場者数　300人

展示のひろば　午前10時～午後５時まで
生け花・陶芸・手描き染め・書道・子供絵画・山歩きの会・野草観察会

お茶席　午後１時～午後４時まで

模擬店　午前11時から（売り切れ次第終了）

作ってあそぶ　午前11時～午後3時まで
使用済みハガキや身近な廃材を利用し、簡単で楽しいおもちゃを作ってあそぶ。

アニメ映画会　みどりの猫・木を植えた男を、午前・午後の２回上映

■６月９日（日）　入場者数　400人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで
内容は、前日と同じ

語らい茶屋　午前10時～正午
「戦後50年の戦争体験と平和へのおもい」

演示のひろば　　12時30分～午後４時

民踊・民謡・詩吟・三味線・大正琴・コーラス・社交ダンスなど

なんでもやってみようコーナー　午前11時～午後４時ころまで

七宝焼でネクタイピンやブローチ作り

模擬店　　午前10時（売り切れ次第終了）

クッキー、ケーキ、コーヒーカップ、コーヒー

バザー　　午前10時30分～（売り切れ次第終了）

幼児の衣類やおもちゃ、調理用品や日用品などの不要品交換

1997年度（平成９年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館を利用している人たちが、自らの活動の様子を発表する機会として毎年白梅まつりをひらいているが、そのために実行委員会を開き、自らの力とお互いが共同協力する体験を通して、サークルを越えた人間関係を深め、地域の人のネットワーク作りの場や機会になっている。

期　間　1997年（平成９年）４月１日～６月３日　全５回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　97人

日時	内　　容
４.１	演示部門の打ち合わせについて
４.８	展示部門の打ち合わせについて
４.18	屋外催しもの打ち合わせ
５.７	最終的な打ち合わせと配布物の整理など
６.３	発表会をふり返り、今後の方向などを話し合った

1997年度（平成９年度）第16回白梅まつり

■５月24日（土）　入場者数　125人

展示のひろば　　午前10時～午後５時まで

生け花・陶芸・手描き染め・書道・子ども絵画・山歩きの会・

野草観察会・木彫・レザークラフト・ヨガの会・パッチワーク

お茶席　　午後１時～午後４時まで

模擬店　　午前11時から（売り切れ次第終了）
作ってあそぶ　　午前11時～午後３時まで
使用済みハガキや身近な廃材を利用し、簡単で楽しいおもちゃを作ってあそぶ。
アニメ映画会　　少年の日の思い出・お月さんももいろ　午後２時から上映

■５月25日（日）　入場者数　325人

展示のひろば　　午前10時～午後４時まで
内容は、前日と同じ
語らい茶屋　　午前10時～正午
「余生を楽しくすごそう」
演示のひろば　　正午～午後４時
民踊・民謡・詩吟・三味線・大正琴・コーラス・社交ダンスなど
なんでもやってみようコーナー　午前11時～午後４時ころまで
籐を利用したパン入れかごなどの作成（材料費自己負担）
模擬店　　午前10時（売り切れ次第終了）
クッキー、ケーキ、コーヒーカップ、コーヒー
バザー　　午前10時～（売り切れ次第終了）
幼児の衣類やおもちゃ、調理用品や日用品などの不要品交換

1998年度（平成10年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館を利用している人たちが、自らの活動の様子を発表する機会として毎年利用者発表会を開いているが、そのために実行委員会を開き、自らの力とお互いが共同協力する体験を通して、サークルを越えた人間関係を深め、地域の人のネットワーク作りの場や機会になっている。

期　間　1998年（平成10年）５月７日～1999年（平成11年）３月18日　全４回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　79人

日時	内　　容
5.7	最終的な打ち合わせと配布物の整理など
6.9	発表会をふり返り、今後の方向などを話し合った

3.4　今年の発表会について意見を持ち寄る

3.18　展示・演示のイメージと、具体的な内容の検討・役割分担

1998年度（平成10年度）第17回白梅会館利用者発表会

■5月23日（土）　入場者数150人

展示のひろば　午前10時～午後5時まで
生け花・陶芸・手描き染め・書道・子ども絵画・山歩きの会・野草写真展示・木彫・水墨画・籐細工・手芸・ヨッガポーズ説明など

模擬店　午前11時から（売り切れ次第終了）

作ってあそぶ　午前11時～午後3時まで

アニメ映画会　午後2時～3時
くまのプーさん、青い鳥

人形劇　午前11時～正午
はやくちへび、どろぼうがっこう他

■5月24日（日）　入場者数　350人

展示のひろば　午前10時～午後4時まで
内容は、前日と同じ

語らい茶屋　午前10時～正午
「フリートーク」

影絵劇　午前10時30分～11時
「ももの里」

お茶席　午前11時～

演示のひろば　午後1時～午後4時
民謡・詩吟・大正琴・コーラス・社交ダンス・太極拳など

模擬店　午前10時（売り切れ次第終了）
クッキー、ケーキ、コーヒーカップ、コーヒー

バザー　午前10時30分～（売り切れ次第終了）
幼児の衣類やおもちゃ、調理用品や日用品などの不要品交換

1999年度（平成11年度）利用者発表会実行委員会

白梅分館利用者が、自らのサークル活動の様子を発表する機会として白梅まつりを開いている。そのために各サークルから選出された実行委員で委員会を開き、サークルを越えた人間関係を深め、地域の人のネットワーク作りの場や機会としている。

期　間　1999年（平成11年）４月８日～2000年（平成12年）３月24日　全５回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　115人

日時	内　　容
4.8	各役員の役割分担、ポスターの図案などやテーマの設定
4.27	最終的な打ち合わせと配布物の整理など
6.3	発表会を振り返り、今後の方向などを話し合った
3.7	今年の発表会について意見を持ち寄る。正副実行委員長の選出
3.24	展示・演示のイメージを語り合い、具体的な内容の検討・役割分担

1999年度（平成11年度）第13回白梅会館利用者発表会

■５月22日（土）　入場者数　200人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで
書道・陶芸・生け花・手描き染め・パッチワーク・水墨画・植物
写真・木彫・子ども創作絵画など

模擬店　午前10時30分から（売り切れ次第終了）
綿あめ・クッキー、ケーキ、コーヒーカップとコーヒーなど

アニメ映画会　午後２時～３時
母をたずねて三千里

作ってあそぶ　午前10時30分～午後３時ころまで
身近な材料を工夫して、おもちゃを作ってあそぶ

野鳥何でも相談　午前11時～午後３時
身近な野鳥について、専門家がわかる範囲で質問や相談にのる

お茶席　午前11時～（用意した材料がなくなり次第終了）

■５月23日（日）　入場者数　350人

展示のひろば　午前10時～午後４時まで

模擬店	午前10時30分から（売り切れ次第終了）
作ってあそぶ	午前10時30分～午後３時ころまで
野鳥何でも相談	午前11時～午後３時
	以上４つの内容は、前日と同じ内容です
トークサロン	午前10時～11時30分
	昔懐かしいビデオをみて、みなさんと話し合いましょう
影絵劇	午前10時30分～11時30分
	ヘンゼルとグレーテル。様々な楽器が生演奏で共演します
演示のひろば	午後１時15分～午後４時
	民謡・詩吟・コーラス・社交ダンス・太極拳など
バザー	午前10時30分～（売り切れ次第終了）
	幼児の衣類やおもちゃ、調理用品や日用品などの不要品交換
親子ゲートボール	午後１時～２時
	裏庭で、家族や仲間でゲートボールに挑戦してみよう

（8）利用者交流会・利用者研修会

1990年度（平成２年度）白梅会館利用者交流会

白梅会館を利用している各種自主グループの相互の交流と、白梅会館利用についての希望・意見などを出し合うために、毎年実施している。

日　時　1990年（平成２年）８月31日～11月８日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　44人

日時	内　容	参加者数
8.31	公民館運営審議会委員の選出について・利用上の改善希望など	６人
9.10	同　上	20人
11.8	新公民館運営審議会委員と利用者との交流他	18人

総括　今年の利用者交流会では、公民館運営審議会委員の改選について話題が集中し、熱の入った論議があった。また、周囲の民家の迷惑になるような駐車方法や利用上の問題を、利用者として真剣に論議できた。このような利用上の問題を今後も真剣に話していくことができれば、利用者相互の交流が深まると思われる。

1990年度（平成２年度）白梅会館利用者研修会

白梅会館で定期活動する約55サークルの、「学習・文化活動による生活・まちづくり」にむけ実施。

日　時　1991年（平成３年）３月11日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　12人

日時	テーマ・内容	講　師
3.11	生涯学習と公民館	小林　文人氏

1991年度（平成３年度）白梅会館利用者交流会

白梅分館を利用している各種のサークル間の交流を深め、また、白梅分館利用上の問題点等を話し合う機会として開いている。

期　間　1991年（平成３年）８月21日　全１回

会　場　白梅分館
参加者　30人
内　容　利用上の問題点で、特に夜間の駐車の問題・騒音の問題などの他、物品の破損の状況などが話し合われた。また、予算を伴う備品などの要求も話し合われた。今年は回数が少なかっが、来年は定期開催で回数を増やしていきたい。

1991年度（平成３年度）利用者研修会

白梅分館を利用する方々を対象に、「公民館とは何か？」という基本的な問題を話題に、研修の機会としている。特に今年は、「私達は大人らしく学んでいるか」というテーマで、大人の学習にスポットをあてて、講師から話題を提供してもらった。

日　時　1992年（平成４年）２月10日　全１回
会　場　白梅分館
参加者　25人

日時	テーマ	講師
2.10	私達は大人らしく学んでいるか	島田修一氏

1992年度（平成４年度）白梅会館利用者交流会

利用者相互の意見交換や白梅会館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

期　間　1992年（平成４年）８月24日～1993年（平成５年）２月21日　全３回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　63人

日時	内容
8.24	利用上の問題点を出し合ったり、他のサークルとの情報交換など
12.25	利用者による「おおそうじ」のあと、日常の意見交換など
2.21	利用上の問題点を出し合ったり、他のサークルとの情報交換など

総括　定期的に実施してほしいという意見が多くなってきたので、来年度はもう少し回数を多く開くようにしたい。

1992年度（平成４年度）白梅会館利用者研修会

白梅会館開館以来ずっと利用している団体もあるが、最近利用を始めた団体もある。

そして、各自にとっての生涯学習の機会と場を保障された公民館。本来の役割やこれからの利用について考え合う場として実施した。

日　時　1993年（平成５年）３月30日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　16人

日時	内　　容	講　師
3.30	新しい公民館利用のノウハウを、みんなで話し合った	重本弘子氏

1993年度（平成５年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

期　間　1993年（平成５年）７月８日～12月22日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　77人

日時	内　容　な　ど
7.8	サークルとしての利用の原則的な内容を話し合う
10.19	職員の異動にともなって、職員と利用者の交流を中心に話し合った
12.22	利用者による「おおそうじ」のあと、日常の意見交換など

総括　利用者同士が話し合う機会というのは、案外少ない。利用者同士が公民館運営審議会委員の方を中心に、もっとざっくばらんに話し合う必要があると感じているので、来年度は回数を増やしていきたい。

1993年度（平成５年度）白梅分館利用者研修会

公民館をうまく使う方法があるのか？公民館を住民が主体的に利用し、見知らぬ住民同士が手をつないでいく方法などの他、公民館本来の役割や今後の生涯学習の考え方など、利用する上で必要な知識や法解釈などの問題点を学ぶ機会として実施した。

日　時　1994年（平成６年）３月29日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　参加者数８人

日時	内　　容	講　師
3.29	生涯学習と公民館の今後の利用について	重本弘子氏

1994年度（平成６年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

期　間　1994年（平成６年）10月26日～1995年（平成７年）３月７日　全３回

会　場　白梅会館

参加者　延べ参加者数　102人

日時	内　　容
10.26	来年度予算についての希望などを話し合う
12.20	利用者みんなで大掃除をして、利用の実際を話し合う
３.７	来年度予算と事業計画などについて話し合う

総括　利用者同士が利害を超えて話し合う機会として設置しているが、いつも全サークルの代表が参加しているわけではない。しかし、公民館運営審議会委員の方を中心に、本当に利用しやすい公民館をめざして、利用者同士の交流を図る機会として今後も実施したい。

1994年度（平成６年度）白梅分館利用者研修会

公民館本来の役割や今後の生涯学習の考え方、そして公民館利用についてなぜ減免ということができるのかなど、利用する側にとっては公民館を利用するうえで基本的な考え方を学ぶ機会として実施した。

日　時　1994年（平成６年）３月17日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　32人

日時	内　　容	講　師
３.17	公民館利用の基本的な意味と減免の在り方について	島田修一氏

1995年度（平成７年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

利用者同士、本当に利用しやすい公民館をめざして利用者同士の交流を図り、また、今後のあるべき公民館の役割などについても、利用者と職員で話し合う場とす。

期　間　1995年（平成７年）11月10日～1996年（平成８年）3月27日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　88人

日　時	内　　容
11.10	来年度予算についての希望などを話し合う
12.20	利用者みんなで大掃除をして、利用の実際を話し合う
3.27	来年度予算と事業計画などについて話し合う

1996年度（平成８年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

利用者同士、本当に利用しやすい公民館をめざして利用者同士の交流を図り、また、今後のあるべき公民館の役割などについても、利用者と職員で話し合う場とした。

期　間　1996年（平成８年）７月31日～1997年（平成９年）２月25日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　70人

日　時	内　　容
7.31	前庭で採れた梅ジュースを飲みながら利用について問題を話し合う
12.25	利用者みんなで大掃除をして、利用の実際を話し合う
2.25	白梅まつり、来年度予算と事業計画などについて話し合う

1996年度（平成８年度）白梅分館利用者研修会

公民館を利用する市民がよりうまく公民館を利用するために、公民館本来の目的や役割、職員の役割、利用する市民が持つべきノウハウなど、先進的な利用をしている小金井市民（社会教育委員）倉橋良子氏にきていただき、具体的な話で分かりやすい研修の機会とした。

日　時　1997年（平成９年）３月25日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　８人

日時	内　　容	講　師
3.25	公民館の目的や役割、職員の役割や市民のノウハウについて	倉橋良子氏

1997年度（平成９年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館お利用上の問題などを話し合う機会として実施した。利用者同士本当に利用しやすい水公民館を目指して利用者同士の交流を図り、また、今後のあるべき公民館の役割などについても、利用者と職員で話し合う場とした。

期　間　1997年（平成９年）７月17日～1998年（平成10年）２月４日　全３回

会　場　白梅分館

参加者　参加者数　52人

日時	内　　容
7.17	利用者交流会のあり方や具体的な利用について
12.25	公民館３館合同交流会について、白梅まつりについて
2.4	白梅まつり、公民館の集いなどについて話し合う

1997年度（平成９年度）白梅分館利用者研修会

公民館と一般行政双方に長い間勤務した元保谷市公民館館長の井藤鉄夫氏から、公民館の事業と一般行政との間にある考え方の相違などから、公民館設置の歴史的な背景や公民館事業の意味など、わかりやすい研修の機会とした。

開催日　1998年（平成10年）３月27日　全１回

会　場　白梅分館

参加者　10人

講　師　井藤鉄夫氏

日時	内　　容
3.27	公民館設立の歴史的な意義や今日的な役割について

1998年度（平成10年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

利用者同士、本当に利用しやすい公民館をめざして利用者同士の交流を図り、また、今後のあるべき公民館の役割などについても、利用者と職員で話し合う場とした。

期　間　1998年（平成10年）８月５日～1999年（平成11年）２月17日　全４回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　71人

日時	内　　容
8.5	前庭で採れた梅ジュースを飲みながら利用について問題を話し合う
10.28	来年度予算についての要望や具体的な要求を出し合う
12.17	利用者みんなで大掃除をして、利用の実際を話し合う
2.17	白梅まつり、来年度予算と事業計画などについて話し合う

1998年度（平成10年度）白梅分館利用者研修会

公民館利用者に、より深く公民館を理解してもらい、また、今日の公民館が置かれている原状を理解し、今後の公民館利用について学ぶ機会とした。特に、具体的な話で分かりやすい研修の機会とした。

日　時　1999年（平成11年）3月2日　全1回

会　場　白梅分館

参加者　24人

講　師　朝岡　幸彦氏

日時	内　　容
3.2	公民館の歴史的位置づけ・役割と、これからの果たすべき役割など

1999年度（平成11年度）白梅分館利用者交流会

利用者相互の意見交換、白梅分館の利用上の問題などを話合う機会として実施した。

利用者同士、本当に利用しやすい公民館をめざして利用者同士の交流を図り、また、今後のあるべき公民館の役割などについても、利用者と職員で話し合う場とする。

期　間　1999年（平成11年）7月29日～2000年（平成12年）3月7日　全7回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　121人

日時	内　　容
7.29	前庭で採れた梅ジュースを飲みながら利用について問題を話し合う
9.1	公民館のつどいについて。分科会の内容検討。社会教育法改正について
9.18	社会教育法改正に関する要望書について
10.19	公民館条例改正に関する件について
12.2	公民館のつどいを振り返って。来年度予算について

12.17　　利用者中心で大掃除。その後、今年を振り返って利用上の話し合い
3.7　　利用者交流会の進め方について

1999年度（平成11年度）白梅分館利用者研修会

公民館利用者により深く公民館を理解してもらい、また、今日の公民館が置かれている原状を理解し、今後の公民館利用について学ぶ機会とした。特に、具体的な話で分かりやすい研修の機会とした。

期　間　2000年（平成12年）3月29日　全1回
会　場　白梅分館
参加者　24人
講　師　辻　浩　氏

日時	内容
3.29	公民館の意味・役割と、これからの自主的な学習内容の創造などについて

（9）親子映画会の取り組みの10年

1990年度（平成２年度）白梅親子映画会

期　間　1990年（平成２年）６月２日～1991年（平成３年）３月２日　全７回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　176人

日時	上　映　作　品	人数
6.2	トムソーヤの冒険	40人
9.8	草原のわんぱく騒動・女王蜂の神秘	10人
10.6	ジャングル大帝・缶入りオタマジャクシ・海底２万哩	23人
10.27	宇宙パート４宇宙への旅立ち・冬に咲く花はどうなるか他	21人
12.1	いたずら天使ミッシェル	25人
2.9	キャプテン翼	25人
3.2	天空の城「ラピュタ」	32人

総括　今年は自然関係のフィルムを上映したが、年齢構成上なかなか理解するのは難しいようだ。回数的にはもう少し増やして上映した方が良いかもしれないので、次年度は10回くらいを予定したい。

1991年度（平成３年度）白梅親子映画会

身近な所で優れた映像作品を観賞する機会を提供する目的で開いている。特に、毎回特に自然科学系の作品を上映し、身近な自然の仕組みや働きなどに関心を持てるように考えて実施した。

期　間　1991年（平成３年）5月25日～1992年（平成４年）3月28日　全10回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　278人

日時	上　映　作　品	人数
5.25	ぼくらの森の動物園、かたちのたんけん、生物のつながり	21人
6.29	花のはなし、不思議なメルモ、ピュア島の仲間たち	25人
7.13	長くつしたのピッピ	35人
9.7	リボンの騎士	35人

10.19	ピッピの宝島	30人
11.29	ジャングル大帝	10人
12.14	ドナルドダックの消防夫、吉六四ドン、生きているってすばらしい	20人
1.25	アルプスの少女ハイジ	42人
2.8	風の谷のナウシカ	35人
3.28	木を植えた男、べっかんこ鬼、むし歯城をやっつけろ、他	25人

総括　昨年度に比べ回数を増やし、内容も各種のものを上映してみた。自然関係のフィルムは上映しただけではなく、本などを資料として話をしたが、関心は示してもフィルムだけで理解するのは難しい。来年からは観察会などと連動して参加する方法を考えたい。

1992年度（平成４年度）白梅親子映画会

幼児から小学校低学年を対象に、ほぼ毎月映画会を開いている。特に自然科学の分野の作品を上映し、身近な自然の仕組みや働きを知る機会としている。

期　間　1992年（平成４年）５月30日～1993年（平成５年）３月26日　全11回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　182人

日時	上　映　作　品	人数
5.30	ぼくの熊おじさん、気象の原理	26人
6.20	太陽を追う少年、目のしくみ、日本の気候と自然の様子	6人
7.18	小さなバイキングビッケ、虫さがし	15人
8.29	白鳥の王子、ミツバチからのメッセージ	17人
9.26	なでしこの花のさくころ	30人
10.24	竜の子太郎、地球の自転	10人
11.21	小さなバイキングビッケ（ハルバルの宝物）、つみきの冒険	5人
12.12	ミッキーマウスの楽しい夢、サンタのおくりもの ミッキーのメリークリスマス	15人
1.23	キャプテン翼	8人
2.20	魔女の宅急便	25人
3.26	路、かたちのたんけん、前線と天気の変化	25人

総括　定着しているとはいえ、観客数が10人以下の時もある。いろいろな条件が重なっているとは思うが、もう少し観客数が増える方向へ考えていきたい。

1993年度（平成５年度）白梅親子映画会

幼児から小学校低学年を対象に、ほぼ毎月映画会を開いた。特に自然科学の分野の作品を上映し、身近な自然の仕組みや働きを知る機会としている。

期　間　1993年（平成５年）５月29日～1994年（平成６年）３月19日　全12回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　86人

日時	上映作品	人数
5.29	ムーミン、ドナルドダックとわんぱく小僧たち、ヒロシマ母達の祈り	25人
6.19	ひとりぼっちのオオカミと７匹のこやぎ、害虫のすみか	11人
7.10	恐るべきシンナーの害、どうして生まれるの？かわいい赤ちゃん	５人
8.21	ハメルンの笛吹き、わたしたちのくらしとごみのしまつ	４人
9.18	奇妙なできごとアトピー、ムシ歯城をやっつけろ	３人
10.9	子象のビンボ、深海のなぞ、いたずらあまんじゃく	５人
11.13	キャプテン翼宿命のライバル、ドナルドダックの算数教室	８人
12.11	サンタのおくりもの、ムーミン（落ちてきた星の子）	６人
12.26	ウエストサイドストーリー	３人
1.22	子どもと自然と仲間、宇宙の気象台ひまわり	３人
2.26	のどか森のリトルジョイ、自然界のつりあい	６人
3.19	ガラスのうさぎ	５人

総括　選択しているフィルム内容に問題があるのか、日時の設定に問題があるのか、または、このような映画を公民館分館でみるより、家でビデオテープで見ていた方がよいのわからないが、確実に視聴者が減っている。来年度は内容と方法を変えて実施してみたい。

1994年度（平成６年度）白梅親子映画会

幼児から小学校低学年を対象に、ほぼ毎月映画会を開いた。特に自然科学の分野の作品を上映し、身近な自然の仕組みや働きを知る機会としている。

期　間　1994年（平成６年）6月18日～1995年（平成７年）３月18日　全10回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　291人

日時	上　映　作　品	人数
6.18	おじいちゃんの贈り物	12人
7.30	ジュディがくれたコイン、深海の謎	4人
8.27	ヒロシマ・母たちの祈り、虫さがし	8人
9.10	ムーミン「はばたけペガサス」、四季の星座	10人
10.22	四つの終止符	130人
11.12	生命のシグナル、まじめな話	8人
12.17	サイエンスグラフィティ、くまのプーさん	35人
1.21	一人ぼっちの狼と７匹のこやぎ、太陽が沈まない、積み重なった空気	29人
2.18	いのししうりっ子のぼうけん、ロストアニマルズ、地球があぶない	25人
3.18	春を創る、お母さんの白い杖	30人

総括　今年度は、念願の「四つの終止符」が上映できた。監督や劇団員も来てくれて、製作するときの気持ちやこの映画を作るにいたった動機などを熱く語ってくれ、当日の参加者も大変大きな影響を受けたようだ。映画を上映するだけではなく、作る側の気持ちなどを、今後も伝えていくようにしたい。

1995年度（平成７年度）白梅親子映画会

環境問題などの映画もおりまぜ、今、私たちのまわりのいろいろな出来事に気づいてもらうとともに、身近な場所で優れた作品をみることにより心を豊かにし、親子のふれあいの場が持てる機会とした。

期　間　1995年（平成７年）５月27日～1996年（平成８年）１月13日　全９回
会　場　白梅分館
参加者　延べ参加者数　241人

日時	上　映　作　品	人数
5.27	注文の多い料理店、地球は友達だ	32人
6.24	水からの速達	10人
7.22	花さき山、ベロだしチョンマ	4人

8.4	つるにのって、地球があぶない	48人
8.19	黒い雨	13人
9.30	ピーターパンの冒険、平成関東大地震	63人
10.21	雑木林のみち、ムーミン「ぼくは王様だ」、高瀬舟	49人
11.11	母なる森「ブナ帯の自然と文化」、生命のシグナル、リフレイン	7人
1.13	次郎物語	15人

1996年度（平成8年度）白梅親子映画会

身近なところでより良い作品をみることにより、感性を豊かにする機会とした。

期　間　1996年（平成8年）4月27日～1997年（平成9年）3月8日　全13回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　408人

日時	上映作品	人数
4.27	いたずらあまんじゃく、小さなバイキングビッケ、白雪姫	25人
5.25	ガクの冒険、馬の田楽、ピーターと狼	31人
6.8	木を植えた男、白い梅、緑の笛、ロストアニマルズ	55人
7.6	彦星と織姫（七夕の話し）、僕は孫悟空（手塚治虫物語）	38人
8.14	抵抗の詩	16人
8.31	水の旅人（侍KIDS）	48人
9.28	スペースキッドの宇宙探検、潜水艦に恋をした鯨の話し、深海の謎	17人
10.26	ミルクとチョコと7人の天使たち、蒸気機関車の詩	19人
11.9	野菊の墓	17人
12.7	お母さんの白い杖、ピーターパンの冒険	55人
1.18	スノーマン、ミッキーマウスの楽しい冬、魔法のシンフォニー	62人
2.15	おじいちゃんの贈り物、水仙月の四日	14人
3.8	ガラスのうさぎ（東京大空襲）	11人

1997年度（平成9年度）白梅親子映画会

身近なところでより良い作品をみることにより、感性を豊かにする機会とした。

期　間　1997年（平成9年）4月19日～1998年（平成10年）3月28日　全12回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　378人

日時	上　映　作　品	人数
4.19	小さなペンギンロロの冒険	58人
5.24	少年の思い出、お月さんももいろ	35人
6.24	のどか森のリトルジョイ、花さき山、ムーミン（はばたけペガサス）	68人
7.19	冒険者たち（がんばと７匹の仲間たち）	24人
8.30	ドン松吾郎の生活	16人
9.20	魔女の宅急便	48人
10.18	ピーターパンの冒険、リトルツインズ、地球は友達だ	43人
11.12	兎の眼	3人
12.20	くまのおいしゃさん、小さなバイキングビッケ、鬼の子と雪うさぎ	8人
1.7	アラジンとふしぎなランプ	5人
2.7	ムーミン（氷の国を抜け出せ）、アバロワさんこんばんわ ミッキーマウスのバンドコンサート	45人
3.28	長靴をはいた猫	11人

1998年度（平成10年度）白梅親子映画会

身近な所でよりよい作品を見ることにより、感性を豊かにする機会とした。

期　間　1998年（平成10年）４月18日～1999年（平成11年）３月27日　全11回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　259人

日時	上　映　作　品	人数
4.18	忍たま乱太郎パート１・ミッキーマウスのおたんじょう日パーティー 豆象武勇伝	39人
5.23	青い鳥・くまのプーさんイーヨのおたんじょう日	36人
6.27	ムーミン・恐竜くんのリサイクル・パラダイス	21人
7.18	きこりのドナルド・雨をふらせる子熊くん・リトルツインズ	10人
9.19	三丁目のタマ・三銃士	19人
10.17	トイレの花子さん・瓜っこ姫とアマンジャク	24人

11.21	オズの魔法使い	40人
12.19	ムーミン・金のがちょう	37人
1.30	ロバと少年・ミッキーマウスのたのしい冬・子ぞうのエルマー	15人
2.27	アリババと40人の盗賊・のどか森のシンフォニー・空とぶマウス	8人
3.27	風が吹くとき	10人

1998年度（平成10年度）白梅サマーシアター

夏休み中の子どもたちに、反戦映画を観て平和について考えてもらう機会とした。

上映作品　ぞう列車がやってきた

日　時　1998年8月16日　全1回

会　場　白梅分館

観客数　26人

1999年度（平成11年度）白梅親子映画会

身近な所でよりよい作品を見ることにより、感性を豊かにする機会とした。

期　間　1999年（平成11年）5月22日～2000年（平成12年）3月18日　全10回

会　場　白梅分館

参加者　延べ参加者数　191人

日時	上　映　作　品	人数
5.22	母をたずねて三千里	30人
6.19	七羽のからす・猫の事務所	6人
7.17	ムーミン・七夕さま・ピノキオ	44人
9.11	忍たま乱太郎パート2・ヘンゼルとグレーテル	26人
10.16	フォックスウッドものがたり	17人
11.20	美女と野獣・セロ弾きのゴーッシュ	16人
12.18	小さなペンギンロロの冒険	16人
1.29	忍たま乱太郎	18人
2.19	ネズミさんのおんがえし・双子の星	5人
3.18	ムーミン・六羽の白鳥	13人

1999年度（平成11年度）白梅サマーシアター

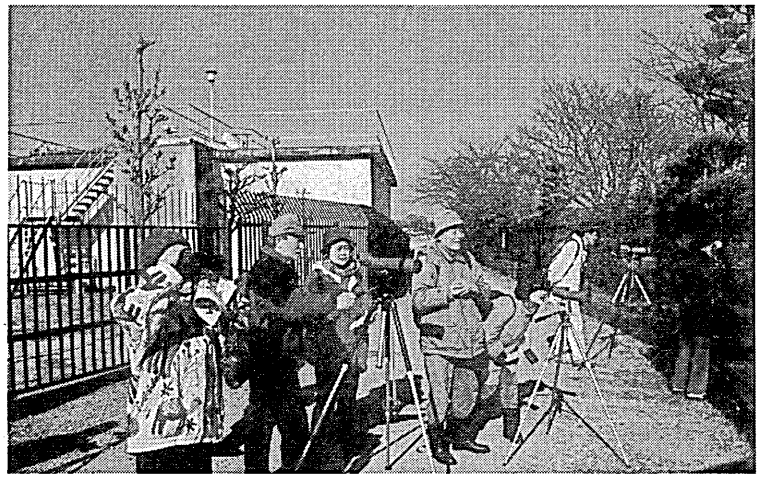
夏休み中の子どもたちに、反戦映画を観る機会を提供し、平和について考えてもらう機会とした。

上映作品　おばけ煙突のうた

日　時　1999年８月21日　全１回

会　場　白梅分館

観客数　36人



自然かんさつ会の様子から

4　公運審をふり返る

この10年間の白梅分館利用者代表各公民館運営審議会委員より

公運審委員をふりかえって

前田　政一

月日は早いもので、次の方へバトンタッチしてから二年になりました。

公民館白梅分館が、この十年間に委員が三人（前任者が四年、自分が四年、次の方が二年である）でした。

なかなか引き受ける方がいないからでしょう。一期二年でよいから、自分のためでもあるので、率先してやってほしいと思っています。

毎月一回の会議が本館でありますが、それだけではなく、議題の前の話し合いや報告作成、他の地域の方々との交流、けっこう手間ひまかかったように思い出します。それに、会議のメンバーには、館長、それぞれの分館長、有識者、学校長、それぞれの分館の利用者代表といって、気楽に引き受けた自分は初めての会議に出席した時、大変な場所へ来てしまったと胸の高鳴りを今でも覚えています。

二期四年間は、ちょうど子ども三人とも学生で、私自身も学ぶところがたくさんあり、親の姿を自然に見せながら、ともに成長していくことができ、ボーイスカウトのボランティアをしながら、社会に少しでも役に立てていることへの誇りを感じながら過ごしていた時間でもありました。

利用者委員の仲間にも恵まれ、今では、白梅まつりや福祉まつりなどの催し物にも参加させていただいて、夫婦で健康なうち年二回の行事はできる限り参加しようと心がけています。

そして、子どもたちの遊びの場は毎年同じ内容のものにしないように、一つは必ず新しいものを考え、飽きないようにしています。

まちなかで、子どもたちと目が合うと「あー！」というあいさつがわりの声が聞こえたりして、やってきてよかったと思う瞬間でもあります。

社会参加、地域との関わり、子どもたちの教育、いろいろ取りざたされていることですが、まず自分自身心を込めてふれあうことから始めてみたらいかがでしょうか？

ぜひ、みなさんもやってみてください。

公民館運営審議会委員をふりかえって

吉田　洋子

私の公民館運営審議会委員としての出発は、白梅分館利用者交流会よりの委員候補予定者として、白梅分館で石田職員との個人授業から始まった。それは、みぞれの降る寒い日の午後の２時間だった。

公民館と市民、公民館条例、福生市条例、公民館運営審議会とは……など、各資料の一枚ごとに詳しい説明があり、真剣にメモをとった。

私が職員の話を少し理解できたのは、事前に白梅分館利用者交流会や公民館のつどい実行委員会に参加して、頭の中で公民館の役割を理解できた時期だったことが幸いしたと思う。

公民館運営審議会には対しては事前に何の知識もなく、未知の世界だったことを痛感していた。職場では希望していた部署に異動願いが許可され明るい日々であったので、月２回程度の夜の会合だったら「まぁーいいか」と安心していた。

正式に委員になり、前委員よりの「申し送り」を配布されて、「さぁ大変な仕事だ」と思ったが、やるしかないと覚悟？した。第一回定例会で、公民館ふっさに顔写真を出すとのことで撮影した翌月、「手配写真を見たから、逮捕されないように頑張ってね」など友人・知人より励ましの電話があった。

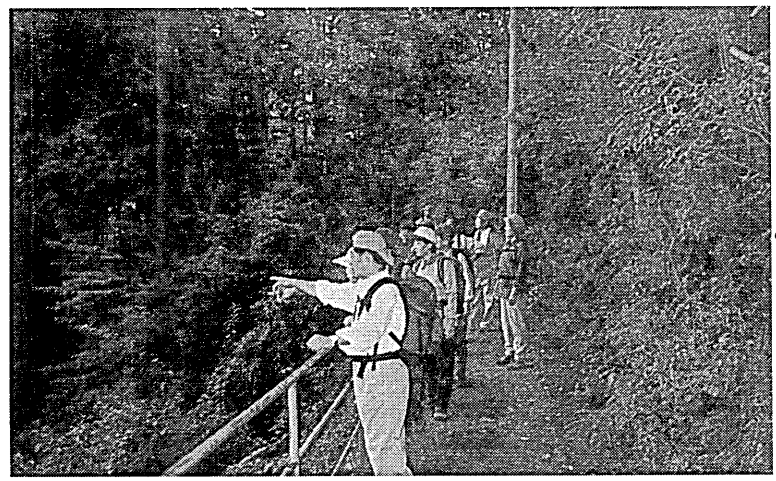
第一回定例会で、都公連定期総会への参加を打診され、平日の午後の予定だったが「参加します」と手を挙げた。しかし、職場への休暇願の理由を何と記入しようと困り、翌日に教育長よりの委嘱状を持参し説明したところ、「勉強するとはすばらしい」気兼ねなく参加してねと応援してもらった。

都公連定期総会に同行した人も新しく委員になった人で、定例会で報告する役と公運審だよりの記事執筆と役割分担を決めた。

第二回定例会で都公連総会の報告をした。自分ではうまく説明できたと思ったが、委員長より「補足説明はありませんか？」との発言があり、同行した委員からの補足説明が長く、思わずムッとした事は今でも忘れられない。しかしこのことがあったからこそ、その後の委員としての責任や重さを自覚し、自分に対して励ましがあったと思っている。もし、第二回定例会で同行の委員が「何も補足ありません。充分です」との発言があったら、その後の私の委員活動は「ただそこに座っているだけの人」になっていたと思う。

この２年の任期の中では、公運審だよりの編集委員のことと、「ＮＰＯ法人への対処について」の答申文案作りのための小委員会活動、このことがあったから、参加させてほしいと意欲が湧いて来たと感謝している。

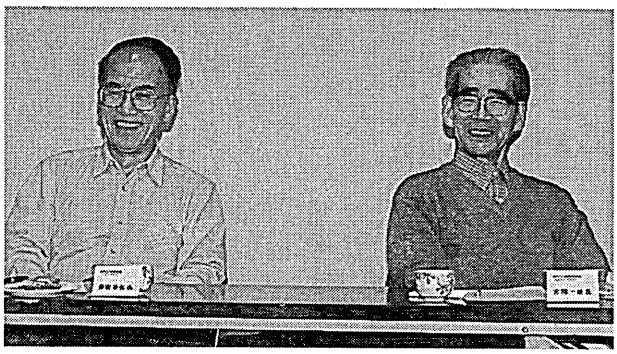
この２年間、我が家のカレンダーには赤マジックで（公）（白）と、行き先と時間が書いてある。夫と娘たちは、その予定日には絶対にじゃまをしないと話し合ったとのこと。多くの人に出会い話し合いの場に参加できるようにしてくださった白梅分館利用者交流会のみなさんと、職員の方々にありがとうございましたとお礼を述べたいと思います。ここで任期は終わりますが、また、いつか公民館運営審議会委員をやれたらいいなと思っています。



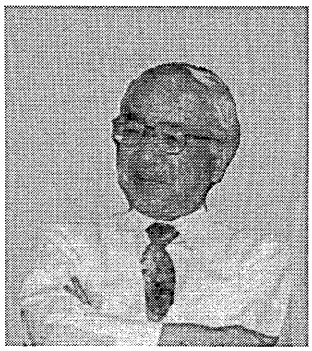
学習ハイキングの様子から

白梅分館20周年記念座談会

福生市公民館の過去・現在・未来



奥田泰弘氏　　宮岡一雄氏



野澤久人市長

田中加代氏

綿貫石三氏　　澤井友和氏　杉浦巨樹氏

高橋登志江氏　　吉田洋子氏

島崎正雄館長

野村　亮氏

撮影：野村亮氏

5　座談会

参加者の紹介

◆野澤久人氏（現福生市長、初代公民館館長）

1962年（昭和37年）に福生にやってきてから20年間にわたり、福生の社会教育計画の作成から具体的な社会教育施設などを作り、今日の福生の社会教育の“土台”を築いてこられました。

◆宮岡一雄氏（元明治大学教授）

宮岡先生には、初代の公民館運営審議会委員長をお願いしました。公民館保育室についての諮問・答申では、たいへんお世話になりました。また、現在では自然かんさつ会の講師もお願いしています。

◆奥田泰弘氏（中央大学教授）

初代の公民館運営審議会委員でもあり、その後も長い間福生の公民館運営審議会に関わっていただきました。福生に転居される前から、福生の公民館作り運動などの実質的な支援をしていただきましたので、福生の公民館との関わりが大変深い方です。

◆田中加代氏（現公民館運営審議会委員長）

田中さんには、長い間公民館保育者もお願いしています。また、本館の利用者連絡会や公民館の集いでは、大変なご尽力をいただいています。

◆吉田洋子氏（現公民館運営審議会委員）

現在の公民館白梅分館利用者交流会から、公運審委員に選出されています。白梅の利用者の代表として、交流会や公民館の集いなどでも活躍をしていただいています。

◆高橋登志江氏（元公民館運営審議会委員、現ゆうあいふっさ会長）

前々回に公民館白梅分館利用者交流会から公民館運営審議会委員に選出された、高橋さんです。現在も国際交流ボランティア「ゆうあいふっさ」で活躍中です。

◆澤井友和氏（大学生）

利用者の中から参加いただいている澤井さんです。澤井さんは現在大学生ですが、すでに10年以上も前から白梅分館の事業に参加していただいています。

◆杉浦巨樹氏（専門学校生）

杉浦さんは澤井さんと同級生で、白梅分館や田園児童館の事業をお手伝いなどをし

ていただいています。

◆野村亮氏（プロカメラマン）

野村さんも20年以上前から公民館とのつきあいですが、自然観察会などではプロカメラマンとしての腕で、様々な記録作りのお手伝いをしていただいています。なお、今回の座談会の写真もすべて撮影していただきました。

◆綿貫石三氏（現白梅分館利用者交流会代表）

現在の公民館白梅分館利用者交流会代表の綿貫さんです。つい先日開かれました公民館の集いの第三分科会では、綿貫さんのご尽力で23人の参加がありました。

◇職員

森田和子（記録・準備）

伊東静一（司会・記録作成）

はじめに

公民館館長　島崎正雄

本日は寒いところ、また公私に多忙なところご参集いただきまして、大変ありがとうございます。

公民館白梅分館は1980年（昭和55年）に開館し、今年20年を迎えることができました。これはひとえに本日お集まりいただいた皆さんや地域のみなさんなどのご指導・ご支援をのおかげだと思います。

今日の座談会の様子を記念誌の１ページとして記録を残したいと思いますので、ぜひ忌憚のないご意見をお願いいたします。

【司会】

今日の進行ですが、最初に奥田先生から東京の公民館の歴史や築いてきた実績、次に野澤市長から行政側からみた福生での公民館や社会教育行政全般の現状と課題、そして最後に、宮岡先生から公民館で市民が学習することの意味や将来展望などを話していただき、その後、残りの時間を利用してみなさんと意見交換しようと思います。

それでは、最初になりますが奥田先生お願いいたします。

この20年の変化をどのように感じているか

～各登壇者から話題の提供～

【奥田】

野澤市長が福生にやってこられた当時は、教育委員会で社会教育を担当する職員は１.５人だったと伺っています。野澤さんが社会教育主事で、あとは学校教育を兼ねた事務職員の方が一人という状況だったそうです。今、社会教育職員だけで約60人ということですので、何倍になっているのでしょうか？約40年の間ですがすごい増加ですね。

私は教員になって最初の１年間は国立で生活しました。次に羽村市に５年、そして昭島市に８年、現在の福生に住んで22年になります。約35年前、国立に住んでいたとき、三多摩の「公民館御三家」と言われていたのは、国立・小平・小金井だったと思います。そして、公民館白梅分館ができた当時つまり20年前の御三家は、国立・国分

寺・保谷だったと思います。しかし、最近の御三家は国立・国分寺に次いでたぶん福生があげられのではないでしょうか。それは体制（建物と職員・中身）から考えても中身から考えても福生が入ると、私だけではなく多くの人が考えていると思います。

そこでもう少し長く公民館の歴史を振り返ってみますと、公民館は1946（昭和21）年７月５日に文部次官が通牒（現在の通達）で、全国の知事に向けて、公民館を作りましょうと呼びかけたのが始まりといわれています。当時は教育委員会はなかったので、全国の知事あてに送られたのです。

その中身は、「全国に公民館を作ることになったので、この通知を県内の町村に向けて送って欲しい」というものでした。この文書の中に「市」がのぞかれていたのは、当時の市には公会堂があったのと、どこの市でも戦災にあい公民館（社会教育）どころではないという状況が大きな理由だったかもしれません。公民館は田舎から始まったのです。学生相手に「公民館ってどんなイメージ？」か記述してもらうと、「田舎のもの・古くさいもの・じいさんばあさんが集まっていて陰気くさい」とのことです。

つまり、1946年から今日までの55年のうち半分は、農村型の公民館の公民館活動であったといえます。

文部省が初めて全国の公民館数を調べたのは1955年で、公民館を作ろうと呼びかけてから10年目なのですが、当時約35,300の公民館がありました。文部省は、学校については毎年データーをとるのですが、社会教育については５年に一度とか３年に一度しかデーターを取りませんでした。そのデーターの中で、公民館の数が一番少なくなるのは1968年です。たぶん13,800館くらいだったと思います。

それが1971年の統計では、ちょっと増えるのです。そして、1970年代以降には公民館の数は徐々に増えていきます。現在でも公民館の数は徐々に増えています。

1970年代から増えているのは意味があると、私は考えています。公民館は農村で始まったものでしたが1970年代に入って都市部でも増え始めたのです。増え始めた理由ですが、都市型公民館が考案され、都市周辺部でも公民館が作られ始めたからだと考えられています。公民館白梅分館も歴史的にいえば都市型公民館としてできたのだと考えるとわかりやすいと思います。

都市型公民館をはっきりとした形で私たちに示してくれたのは、東京都教育庁社会教育部が昭和48年３月に発行した「新しい公民館像をめざして」という冊子でした。その内容が非常にわかりやすく都市でも公民館活動が可能なのだということを、私た

ちに確信させてくれたのです。

都市型公民館には４つの役割があるといわれています。第一にみんなが寄り集まってくる場。社交の場・たまり場として、時間があるときに誰かと何かをしたいと思う時に公民館に足を運ぶというような公民館になりたい。第二に、公民館はサークルやグループ活動の場である。第三に「公民館は私の大学」だということです。1990年に雑誌『世界』が「私の大学」というテーマで全国から懸賞論文を集めたことがあり、約２千通ほどが集まってその中の５通が当選したのですが、そのうちの一通がくにたち公民館で学習した主婦の方のもので、そのときの題が「私の大学は公民館です」というものだったのです。それ以降、「公民館は私の大学」として有名になったのです。公民館という場所は系統的に学習したいことが学習できる場ということなのです。第四は、公民館は「文化創造の広場」だということです。影絵・コーラスなどいろいろな活動がありますが、それぞれがすべて文化創造活動で、年一回の音楽の発表会などもそれに該当します。そのためには、建物は小さいものでは不充分で、公民館白梅分館とか公民館本館のように、割合大きなものが作られるようになったのです。

このように都市型公民館の典型を示してくれたのが、「新しい公民館像をめざして」ですが、これを作ろうとした人たちには当時２つのインパクトがあったようです。

一つは1965年に国立や国分寺の職員を中心に「公民館三階建論」という論が唱えられるようになってきました。公民館を三階建の建物のように考え、一階を社交やレクリエーションやスポーツの場とし、二階はグループ・サークルの活動の場、三階は系統的な学習をする場であり、そこへ市民を誘うのが職員の役割であるという考え方です。公民館三階建論や四つの役割も、三多摩の公民館の役割を整理するという願いの中から出てきたものです。

もう一つのきっかけはものすごく重要だと思うのですが、そのころ三多摩のあちこちで公民館を創ろうという市民運動が起きました。実は福生にもありましたが、最初に動き出したのは昭島で、1970年秋でした。1971年には、「ふっさ公民館を創る市民の会」ができ、1973年には東村山市にも創る会がうまれ、その他にも国分寺にはすでに３つの公民館がありましたが、「南部地域に公民館・図書館を創る会」という動きがありました。それらの会が連絡を取り合っていましたが、当時私は昭島に住んでいましたので、福生や東村山にもよく行きました。現在から約30年ほど前ですがその運動をしている時に、公民館のイメージというものが欲しくて仕方なかったのです。

こんなことがありました。公民館を創るために昭島の青年たちが署名活動をしたのですが、２週間ほどで1300人ほどの署名と５万円のカンパが集まりました。５～６人の青年が市内を回っただけなのですがすごい反応でした。署名とカンパをしてくれた後帰る時になって、「ところで公民館って何？」と聞かれ、青年たちは一生けんめい説明するのですが、それでは市民会館と同じだね？と言われたりして、青年たちも公民館をよりよく説明するためには社会教育法などの勉強をしなければならない、ということになったのです。そこで、社会教育法第５章の公民館の部分をガリ版切りからはじめるというわけで、そういうときに公民館をさっと説明できる資料が欲しいという動きが「新しい公民館像をめざして」というパンフレットを作っている人たちに刺激を与え、とにかく市民の人にわかりやすいイメージを描こうとしたのでした。その動きの延長線上で、福生の公民館・分館は作られたと理解していただくことが、必要なことだと思います。

「新しい公民館像をめざして」というパンフレットができたのは1973年３月ですが、そのころの三多摩地域の公民館数は20前後だったと思います。しかし現在では、100館前後になっていて、30年たらずで５倍、福生の場合は０から３になったのです。そのような時期に福生の公民館は生まれ、この20年発展してきたのです。そして、今では東京の公民館の「御三家」に数えられるくらい発展してきたといってもいいと思います。

【司会】

実は私たち東京の公民館職員が「東京の公民館50年誌」というものを作ろうとしています。この作業を進めるにあたって特にこの20年の変化を見いだすのに苦労しているところを、奥田先生に簡単に話してもらおうとお願いしたことが間違っていると思い、申し訳なく思います。

先生の話の中で福生が「御三家」ということでしたが、福生の職員としては負担を感じます。しかし、今日が迎えられたのはこの20年間を過ごせるだけの土台があったからで、その土台作りをされたのが、昭和37年に福生に奉職された現市長の野澤さんです。

昭和37年から20年間、社会教育一筋で様々な施設作りや運営をされたきた野澤さんから、「社会教育」を離れてから今日までの20年、福生の社会教育の現状をどのように

見られているかをお話いただければと思います。

【野澤】

現状をどのように評価するかというところからお話をすれば、奥田先生は社会教育の専門家の立場からお話しをいただきましたが、私の立場からは「条件は一定の形で作られたけれど、中身はまだこれからだな」というような思いがあります。

昭和52年６月に公民館本館ができ、昭和54年に松林分館がそして昭和55年５月にこの白梅分館ができました。昭和57年３月に私が公民館館長を去ることになった５年間に３館ができたのです。

公民館が最後になったのは、私自身が公民館を最後に作りたいという気持ちがあったのと、当時は公民館とは何？ということを市民のみなさんにお話しているような時代で、むしろ、体育・スポーツ活動ががわかりやすく、プール・市民体育館が最初になりました。それから、本というのもわかりやすく、体育館の中に図書室を作ったりしました。また、昭和45年に市になりましたが、そのときに作った福祉会館（現さくら会館）の中にも図書室を作りました。それが、現行のわかぎり・わかたけ図書館にかわっていくわけです。

そういう意味で言うと、当時の公民館を創る市民の会（「ふっさ公民館を創る市民の会」）は青年団体連絡協議会の青年が中心で特殊な活動だったと思います。福生の公民館というのは、そのような人たちの想いが強く込められて作られたと私は思っています。

現在と当時のことを比較してということになりますと、やはり条件が整備されてしまうと、そこへ集まる想いというのが徐々になくなるというか、施設があればいつでも利用できる状態の中での学習と、施設が全くない中での学習ではかなりちがったものとして感じられます。

それは同時に、私たちの生活そのものが20年前とずいぶん変化し、むしろ現在は学習課題を見つけにくい時代になっています。真剣になって公民館を創ろうという人たちには、公民館・図書館といったものに、熱情を込めて勉強するという姿勢が見られました。しかし、生活そのものが様々に変化し、今日的な学習課題・生活課題を公民館の中で学習するというのが公民館の役割なのですが、そのように収斂しない感じに受け取っています。

それは今の仕事と関係していますが、福生というまちは、教育関連施設特に社会教育の施設については、他の市町村に比較して非常に充実しています。それは、以前の理事者の方々の努力が大きかったといえるのですが、たとえば体育施設ですが体育館は３館あります。しかもプール、野球場、テニスコートなどの社会教育施設の市民一人あたりの面積は、27市中で２番目です。職員の数もダントツで一番になると思います。図書館もかなり高いレベルであると思います。具体的には、蔵書冊数は、27市中市民一人あたり３番目くらいです。公民館も床面積は27市中市民一人あたり３～４番目くらいです。職員の数も良いところにいっています。

福生市は1970年（昭和45年）に市になりましたが、1970年（昭和45年）市長になった石川常太郎氏が、1965年（昭和40年）ころ「福生というまちは確かに社会教育施設は遅れている。しかし、とりあえず下水の整備を先にさせてほしい。その後は社会教育施設整備に全力で向かう」ということを、私に話しました。たまたま1967年（昭和42年）にプールができましたが、これは、収益事業（競輪や競艇など）に参加することができ、当時１億数千万円の収入があったためにできたのです。そのケースをのぞけば、全部1973年くらいから社会教育施設整備が一気に進んだのです。財政的に諸条件がそのような形で進んできたというのと、それを進めるために基本なるものの考え方を作らなければならない時代で、たまたま私が福生に奉職した時に、社会教育委員や体育指導員の制度を作ってくれたりして、みなさんがいろいろな勉強をした結果が集約してでてきたと思います。

「光」の部分としての都市基盤整備・生活基盤整備はある意味では非常に進んだまちであります。そのうち、データをみなさんにきちんと示し、福生というまちを実感としてどうとらえていくのかお聞きしたい部分があります。しかし、問題としては「影」の悪い部分をお話してみれば、税の徴収率は27市中24～５番目、国民健康保険の滞納がないという点では27市中26番目、善悪の判断抜きのデータでは、羽村・青梅・あきる野市と比較すると、約２倍の生活保護率です。公営住宅比率を見てみると27市中５番目くらいで、貸し家が多く持ち家率が非常に低いまちです。地域の中に大きな差があるまちでもあります。

これからの時代、様々な情報が市民のすみずみまで届く必要がある。たとえば介護保険の問題でいえば、65歳以上の市民の数は8070人ほどですが、実質的に介護保険の世話になるのは１割以下です。介護保険の問題だけを集中して考えるというのは変な

話しなのですが、800人弱の方々が一定のランク付けをされ、今までは行政側が措置をするというシステムから、自分で介護サービスの中身を契約するということになりました。保育園も同様です。

今後、一人ひとりの人が情報と力を持っていないと、生きていくのが難しい世の中となってきています。では、その部分をだれが担当するのかということになりますが、それは、地域の人たちが力を寄せ集めて行くしかないのではないかと思います。

ITがいくら進んだとしても情報の狭間にいる人はいるわけで、進めば進むほど顔と顔のつながりが重要な関係になると思います。今日、成人を迎える若い人たちと話していたのですが、彼らが「遊んでいる子どもを見なくなってしまった」と言っていました。疑似体験としてのインターネットなどの部分では進んでいると言うことなのかもしれませんが、実際に自然の中で遊んでいない子どもの実体がある。

私は、そのあたりの課題に公民館は今後どのような関わりができるのかどうかということに感心を持っています。そして白梅分館の特色というのは、子どもと自然を非常に大事にして仕事をしてきています。このことは非常に高く評価できると思っています。自然と子どもに向かい合う姿勢は、福生の全体のためにも、あるいは今後全国の公民館の手本になると思います。

ただ、全般の問題としては学習活動と毎日の生活の関係でいえば、何かもっとすることをしないといけないのではないか、それは、公民館にたいする熱気、学習ができる喜びのようなものを感じて活動があった時代と、その後の時代ではだいぶ違ってきているのではないか、と疑問府として提案させていただきたい。

今の仕事の関わりでいいますと、これからは地方分権と地域主権とか言われていますが、自分たちで政策選択をして自らが作り出していくという時代にはいっています。結局市民の人の力や想いがどれだけ深く強いのか、そしてどの程度のレベルがあるのかといったものが、個人の情報格差と同じように市町村の格差を生み出していくだろうと考えています。

その意味でも公民館に対する期待をこめて、学習と実践をもう一度みんなで考えてみたいと思います。

【司会】

学習を実践にというと、はてな？と思うかもしれませんが、ＮＰＯの方々は公民館での学習を「出口のない学習」「止まっている学習」と表現することがあります。学習

が実践に結びつくというのは、今日学んだことが明日お金になる実践ということではなく、市を作っていく自立した市民としての力を付けていく学習が含まれているのではないでしょうか。その学習には、もう一歩公民館が新たな力を出すべきではないかという指摘と受け取りました。

そのことに大いに関連して、市民一人ひとりがどのような学びをしていく必要があるのか、そのあたりを宮岡先生にお願いできればと思います。

【宮岡】

奥田先生や野澤市長は、社会教育の専門家ですね。私が公民館に関わるようになったのは、このような先生がいたからなのです。私は学生の前で話すのは苦ではないのですが、人前に出て話すのはあまり好きではないのです。

初代の公民館運営審議会委員長をすることになったのは、奥田先生や野澤市長がいたからなのです。

私は生物学者ですから本来、社会教育には全然関係ないのです。しかし、現在でも社会教育の分野に多少の関わりを持っているというのは、この方たちの影響によるものです。それは、人と人との結びつきだと思っています。

当時、社会教育は実体的に社会的に認知され、だれもが意欲的に学習をしていました。しかも、なんといっても志を持って活動をしていました。現在は趣味のグループ活動の方が多く、それが過去と現在の大きな違いではないかと思います。

いわゆる趣味や個人的な学習、知識だけの学習であればカルチャーセンターやインターネット情報で間に合ってしまいます。全く、便利になったものですが、それでは公民館をすててよいのか？公民館活動の意義は何なのか？ということです。先ほど奥田先生が公民館の四つの役割をお話されていましたが、その中に現代的な意義をどのように組み込んでいくのかということがとても大事なことではないでしょうか。

過去にいわれていた「公民館での学習」という点については、やや重みを失ってきています。現在では、知識の取得だけであれば短時間に大量の知識が手元に入る時代です。知識の大量生産が可能になっています。

このような現実的な社会の流れを公民館がいくら追いかけても、とても追いつかないはずです。ところで、考えてみるとものの流れというのは、ゆっくり流れている部分や停滞している部分など、多様な流れがあります。公民館はその多様な流れの中で

どの部分をすくっていくのかということです。

インターネットの時代に入って公民館では、世の中の流れに忘れ去られたもの、落とされたものなどを、どのようにすくって（救・掬・援）いくのか。世の中の流れからこぼれたものをひろっていくという動きはささいなものですが、これを世の中の流れではなく、「地域社会」という観点からみてみると、非常に大切なことです。これからの公民館での学習は、知識という視点ではなく、知識をどのように知恵に転換していくかということを学習することが非常に大切だと思います。

私たちは、今日の流れを追いかけていくと、どんどんバーチャルな世界へ追い込まれていきます。これは良い悪いではなく、社会の流れであり、そう簡単にはかわりません。生物の世界では、一度味わうともう一度食べなければいられない。同様に、世の中の便利さは捨てることはできません。前提として、その流れを是認する必要があります。これを否定していっては、この世の中は暮らしていけません。

過去の生物の歴史をずっとみてきても、世の中の流れ（進化の流れ）というものはそう簡単に逆転はしない。現在の流れを否定するのではなく、流れの中で何を創造していくかがとても大事なことなんでしょう。

世の中が不安定なので、安定させようという動きがあります。安定というのは、固定させることではなく、また旧来のものを固守することでもありません。現在は変化の時代です。変化の時代とは世の中の流れのことで、旧来の安定を求めていくと、変化に対応できない。対応能力をどのように組み込んでいくのか。このことが学習にとって大事なのです。対応能力というのは、リスクに対しての抵抗力であり免疫でもある。

これからの公民館では、市民が学習したものをネットワークという形で地域社会の中で生かしていくにはどうしたらよいのか、そのことにエネルギーを注ぐ必要があります。

人は、箱ものができると安心してしまう。あるいは環境がよくなるとその中に安住してしまう。生物の進化というのは、環境の変化する中でいろいろなリスクを負いながら一生懸命適応する能力を創造してきたからこそ生き残っているのです。それを、昔はよかったという形で固守していたら、公民館の使命はないと思います。そういう意味では、公民館は新しいジャンルを開拓していく必要に迫られています。

先ほど野澤市長は、過去から現在まで公民館職員がどれほど増えたかという量の問

題をお話しされていましたが、これからの時代の公民館活動は、市民と職員との間の共進関係が問われてくると思われます。

過去においては、社会教育とは何かを理解して、情熱をたぎらせた職員や市民の開拓者的気概が見られましたが、公民館事業が軌道にのってくるにつれて、マンネリ化と情熱の希薄化がみられるようになりました。事業や学習に対して、もう一度仕切り直しで新しい血が脈々と流れることを念願しています。また、今や職員と市民との間で丁々発止がなくなってしまった。時代の流れに押されて市民も甘くなっている。職員だけをせめられない、相対的な問題でもあります。

先ほど、伊東さんが「ＮＰＯからみると公民館での学習は出口のない学習をしている」との評価があることを話されていましたが、これは当たり前のことで、ＮＰＯでは、ある一つの課題に対して志しを持った人たちだけが集まっているので、ほっておいても出口はあります。公民館というのは、そこがつらいところです。そのつらさに耐えていくには、職員自体の学習と市民の意欲が高くないと、公民館は発展していかないだろうと思います。

今はリカレント教育といって「生涯学習」を奨励していますが、生涯学習が徹底してしまったら公民館とどこでつじつまをあわせるのか、問題になってくるでしょう。ただ一つ違うのは、リカレント教育の場合は、その教育が個人とか特定のところに固定されていますが、社会教育の場合は背景には必ず地域社会があり、この地域社会と遊離したら社会教育の存在意義はなくなります。公民館活動が存続し行政の中で認知されるためには、公民館も市民も相互に地域社会に役立つ学習をしているかどうかといったことに、正面から対峙していかなければならないでしょう。このことがとても大事なことだと思います。

知識獲得の学習という点に関しては、現在では充分に可能な条件が整ってしまいました。単なる知識から生活者の知恵に、さらに地域社会の向上へどのようにして転換させるのかということですが、それは常にリスクを負う学習、常に変化を内蔵している学習をするということなのです。

変化を内蔵しながら安定させるためには適応能力を身につける必要があります。この適応能力を身につけ養うには、体験学習しかありません。これをさけた学習では、変化の時代に生かすことはできません。

公民館活動では、充分に体験学習を取り入れていく必要があります。野外に出れば

危険が予想できます。いつへびがでてくるかもしれないし、石につまづくかもしれない。そういったときに、「生物学的感性」がよく発達します。安全なところに住んでいては、生物学的な感性は発達しない。

子どもは藪の中で蛇をみつければその後ちゃんと注意するし、石につまづいて転べばその後は姿勢などを注意します。言葉ではだめなんです。教えられたことだけではだめなんです。自分が実体験して気づいたことが身に付くんです。子どもが気づくような学習が大事なんです。

アメリカでは、最近「レンタルスクール」という新しい試みをやっているようです。日本がそのままこのシステムを導入する必要があるとは言いませんが、発想としては子どもが自由に創造できる場を提供するのがスクールの本質だと思います。もちろん、勝手気ままにさせるということではありません。がんじがらめにすると、創造の芽を摘んでしまい、発想豊かにリスクに耐える子どもが育たないと思います。

これからは抵抗力と免疫のある教育であり学習であってほしいと思います。

日ごろ、生物学的視野からコンピューターというものがもつ社会的意味、あるいは人類文明にどのような影響をもたらすのかを考えていましたので、今日はこのような話しになりました。

【司会】

ありがとうございました。約1時間にわたって、奥田先生から東京の公民館の誕生から今日までの流れを概括的に話していただき、野澤市長からは、福生で20年にわたって社会教育の土台を作り、その後行政の責任を背負う立場からみた公民館の現状と課題、それは自立した市民となるはずだった社会教育の活動の中身に不足している部分があるのではないかという指摘であり、そして宮岡先生からは多様な人との交流、学習を積み重ねる中で、特に体験を通して身に付く学習の大切さがあり、そのことを通して身につけた力が今後の変化の中で新たな創造をしていける柔軟な力になるのではないか、というお話しをしていただきました。

地域の様々な生活課題を解消・解決していこうという体験や交流を伴った学習を通して、一人ひとりの市民が力を付けていく必要がある。そのために公民館がどのようにあるべきなのか、という話しをいただきました。

それでは、今日参加されているみなさんが三人の方の話しを聞いてどのように感じ

たのか、残りの時間を忌憚のない話し合いの時間にさせていただければと思います。

公民館で事業を専門に行う職員が少なくなっていることが良いことなのかどうか、体験を伴うような学習活動を継続させるためには職員が体験をしていることや深める必要があるわけですが、そのためには職員の人事の問題に関わってくると思います。

【田中】

三人の方から、公民館の過去・現在・未来を展望を含めて話しを伺い、私はこのような20年を福生で一部は関わり一部では関わってこなかったと思いました。昭和55年というのは息子が生まれた年で、それからしばらくして公民館を利用し始めたわけですから、私の利用も長くなったものだと思いました。私の人生の歴史でもあったかなと思いました。

福生の公民館の創設期から関わってきたんだなと想いを持ちながら、小さな赤ん坊を抱えながら「人と出会いたい、幼児語ではない大人の日本語でしゃべりたい」という仲間を捜していた、苦しい育児中に戸をたたいたのが公民館だったのです。

職員には時に厳しく、時に暖かく接していただいたことが、今の私を作ってきたんだと思います。

その意味では先ほどの奥田先生の話の中で「私の大学」という言葉がありましたが、その言葉がそのままぴったりするかどうかわかりませんが、18年間の公民館利用は大きい存在であったことは確かです。

また、宮岡先生から「職員と市民が丁々発止の関係」という話しがでましたが、私も少し前までは職員との間でそのような関係があったと思います。丁々発止の関係の中で相互に育ちあってきた部分があるのではないかと、胸を張りたい気分を持ちながら伺いました。

公民館は地域の市民にむけて本当に大きく開かれている場で、ただ開かれているのではなく平等に開かれていると思います。ただ、このごろは世の中の流れがあまりにも早く、インターネットなど「機械化」されている中での中身を創造していく大切さは、三多摩テーゼに書かれている四つの役割の中の一つ、人と人とが出会う地域のたまり場というのが、やはりこれからも元になるのではないかと思います。

私は公民館保育者として子どもたちと関わる場を持っていますが、今子どもを抱えている若いお母さんたちは、私たちが育った教育環境や生活環境全般と異なってきて

いて、人と関わるのが下手とか上手いうより前に、人と関わることができにくい状況にあると思います。人と目をみて話すがのが苦手だったり、自分が他人からどのように見られているのかということに敏感であり、細いドアののぞき穴から外を見ているような、自分の好みに適応しそうな人にはドアを開けるが、そうでない人にはチェーンごしのつきあい方をしているように見えます。そのような状況の中で母親が子育てをしているわけなので、その子どもたちが子どもどうしの関わりが非常に下手になっています。

先ほど宮岡先生の話の中ででてきた、自然（野外）の中で体験することができない状況になっています。野外がないわけではないのです。ある時、砂場で遊ぶことが幼児にとってはすごく大事なことだと保育室事業の講師の方がお話していただいたのですが、参加していた母親は、砂場はとっても汚くて寄ることもさわらせることもできないので、マンションの一室でシーツを広げ砂場に見立て、しかもたった一人で遊ばせたとのことです。シーツと砂では明らかに違うものだし、室内の閉鎖空間で子ども一人だけをシーツにまぶしてどうなんだろうと思いますが、その母親にとってはそれが精一杯なことなのだそうです。

公民館で保育室付き事業が始まってからだいぶたちます。保育室事業の中では様々な歴史がありました。一時は保育室事業予算の凍結問題なども発生し、宮岡先生にご尽力をいただき、今日まで続けることができました。現在は保育室事業を公民館の重要な柱の一つとして位置づけ、取り組んできています。

子どもたちの環境が危機的な状況に変化している中で、人と人とが関わる、あるいは自然と関わる幼児体験に嫌悪感すら持っている母親が、それでも息絶え絶えながら公民館になんとかすがろうとする姿をみると、公民館はやはり人と人とが関わる場であることを、次の世紀にも脈々と続けてほしいと思います。

先ほどの宮岡先生の話を聞いて本当にそうだと感じたのは、子どもたちや母親が教えられたから気づいたり変わるのではなく、人と人との交流から学んで気づくことであり、子どもが変わることで母親も変わる現実があります。教育の場でも社会の中でも本当に重要なことだと改めて思っています。

現在、白梅分館の事業の中で保育室事業は大切に位置づけられていますが、過去に逆戻りするのではなく、流れに棹をさすという形ではなく、時代の流れをとらえながらその中で人と人が関わることが、人間の社会の中で社会性を持ち自立していくうえ

で人と人とが関わらないと育ちあえないんだということを、大事なテーマとして伝えていってほしいと思います。

つい先日の公民館の集いで、福生市に生まれたから福生市民になる、公民館に配置されたから公民館職員になるということもいえなくはないでしょうが、やはり自覚して市民に、そして自覚して公民館職員がどうあるべきかという意識を持ち学んでいかないと、公民館職員にならないでしょう。

福生市がどうあるべきか、公民館はどうあるべきかをきちんと自分の意識の中で取り込んでいかないと、自立した市民にはなれないだろうと思います。今後、子どもの成長に関わりあいながら、さらに自分自身に磨きをかけられたらよいなと思います。

今日は、三人の方々の話を伺い、自分の考えていることをより明確な課題にすることができ、今後学習を続けていこうと思いました。

【吉田】

私は公民館に関わって4年しかたっていません。公民館白梅分館ができたのは上の子どもが小学校に入学したときでした。当時の私は専業主婦をしていたので、公民館には関心がありませんでした。

先日の公民館の集いのとき、現在の母親は子育てを人まかせにしているのではないか？と感じることがありました。

福生の公民館には様々な歴史があります。しかし、福生市民の中でもその歴史に関わらない人がたくさんいます。最近のサークル利用者には、お稽古ごと中心のサークルはたくさんあります。しかし、福生を学ぶ・語る、公民館のことを学ぶといったサークル活動は少ないですね。利用者の中には、「単なる習い事に来ているようなものだ」という人もいます。

公運審委員になって各地の公民館に行くようになり、そこの職員の様子を見ます。福生の職員は一生懸命やっていると思いますが、公民館そのものは4年間の利用の中でもほとんど変化がないように思います。

【司会】

変化がないということですが、これからは変化の時代に「変化のない」という指摘がありました。やはり変化することも大切と受け止めたいと思いますが、、みなさんいかがでしょうか。

【野澤】

先ほど専門家という話しがありましたが、最近、私は公民館で仕事をする職員というのが、何が専門家なのかということがよくわからないというのが、本音です。社会教育主事の資格を持っている職員が、社会教育の専門職として他の一般職員に比べれば、集団活動を構築していくということではより上手いとは思いますが、そのようなことより情熱や熱意のほうが大事なのではないかと思っています。資格があってもダメなものはダメで、市民の方にうまく鍛えてもらいたいという想いがあります。

全体として450人弱の職員のうち56～7人が社会教育部の職員です。私が福生に就職した当時は社会教育職員は私と嘱託の人だけでした。現実的な話しになりますが、社会教育部全部の職員を専門職にするのは不可能に近いので、私を含め市民のみなさんにはぜひ鍛えてほしいと思います。

もう一つは、習い事の問題は青年団のころからありました。学習活動をしないのなら意味のない活動ということでした。私は、習い事はある意味であってよいと思うのです。習い事を中心にしながら、地域の問題や横の人間関係を広げることであったり、多様な意味で新たな関係を作れるのか否かということが問われていると思うのです。

【田中】

私も、そこがカルチャーセンターと公民館の違いではないかと思います。

【宮岡】

現状のグループ活動は「セクト」であって、ネットになりにくいという部分を今少し乗り越えて欲しいですね。野澤市長が、文化活動があってよいのだとおっしゃっていたように、単なる文化活動を越える何かが欲しいですね。グループ活動が何百団体あるということは、本当に意味のあることなのかということを考えなくてはならないと思います。いくらセクトがあっても、現代的意味はないですね。セクトをやぶりネットの形で文化を自然発生的に地域社会の中に作りだしていければ、理想的ではありますね。

【司会】

三宅島の子どもたちがあきる野市の学校に避難してきてから１週間くらいの時です。公民館白梅分館利用の「子どもはやし連」というグループの子どもたちが、私たちと同じくらいの子どもたちのところへいって、一緒に過ごす中で励ましたいという希望を寄せられたので、すぐに電話しました。

結果的には、受け入れ側の準備が整っていない段階で、１週間後に「現在は結構で

す」との返事がきました。しかし子どもたちはしたたかで、相手のスケジュールを調べ、勝手に割り込んでいって、しっかりと交流してきてしまいました。

【宮岡】

そういうたくましさがすばらしいね。

【司会】

地域の問題を自分の問題としてかかわろうとした子どもたちがいて、それを大人が支えていたということだと思うのです。宮岡先生が言われていた、セクトの活動からネットへという足がかりの時に、地域の大人がどういう手伝いをしていけるかという、大人の姿勢が問われていると思います。

【宮岡】

スポーツなどのグループでは、能力的に低い人は仲間からはじき出されてしまうことがあります、かえって邪魔者扱いになってしまうわけです。このような状態は、果たして社会教育に必要な活動なのか？ということなんです。向上心があるということは結構なのですが、そのような人を抱え込むかということまで想いを巡らせてほしいのです。確かに弱い人を抱えて試合に臨めということではないのです。日常活動の中で、下手な人も抱えた上で自分たちの望んでいるスポーツをしようという発想が必要で、意識レベルの問題で難しいものがありますね。

【司会】

勝つか負けるかという試合に臨むと、日常の意識レベルとは違った選択をせざるを得ないことがあるでしょう。しかし、日常的には相手を思いやる力をどのように作れるのでしょうか。

【宮岡】

先ほどの砂場の話しでは、お母さんから教育しなければならないですね。教育というのは怖いですね。現在の母親が受けたような教育をいったんしてしまうと、20年～30年後には今日のような状況が起きてしまうわけですから。

【田中】

２～３歳の子どもでも、汚い不潔という意識が進んでいて、粘土で遊んだ後手に付いたにおいで吐きそうになってしまうのです。何度も手を拭いてにおいをかいでいるのです。粘土が持っているにおい、土の持っているにおいや感触についていけなくな

っています。子どもが生まれ持ってそうだったのではなく、そのようにすり込みが始まっていると感じています。

【宮岡】

母親が周囲から子どもを隔離することで、「純粋培養」をしてしまっています。生物学の言葉に、「人間は自己を家畜化する生物である」という言葉があります。自然の状態から自分を隔離して純粋にばい菌が全くない状態にという方向へ進むので、逆に見れば白血球のT細胞が少なくなり、免疫・抵抗力を自らが弱めています。自分で自分を弱くしてしまっています。どこまで人間がセーブできるのか？ということです。人間は頭が働くので、自分で自分を囲い過ぎどんどん弱くしてしまっています。

【奥田】

澤井さんは、まだ二十歳前なんでしょ。それなのに公民館に関わって10年というのは、長いですね。どんなことをしてこられたのかも聞きたいし、今までの利用の中での感想なども聞きたいですね。

【澤井】

私の姉が公民館白梅分館主催の「自然たんけん隊」に参加していたので、姉にも勧められて自然たんけん隊に参加するようになりました。それが10歳（小学4年生）のときですから、約10年になるわけです。隣の杉浦くんが中学生になった時に、自然たんけん隊の広報記事を見て参加しようかな？と思っていたところへ、自分が行っていると言って一緒に参加するようになったのです。

それから田園児童館にもお世話になっていて、杉浦くんとも一緒に出入りするようになりました。現在、田園児童館のイベントには積極的に裏方として参加しています。

今日のみなさんの話しを自分なりにまとめてみたのですが、人と人とがつながりがない、効率だけを優先してきたためにつきあい下手な母親や相手の目を見て話せない世代が生まれていているのではないか、という感想を持ちました。

私も小中高と通学し、現在大学に籍をおいていますが、「大きな流れからはずれずにとりあえずその中でうまくやっていればいいや」という部分があり、これをやりたいと思っても飲み込んでしまっていました。とりあえず学校へ行っていて成績よければそれなりに過ごせるではないですか。私の学校へ通学する理由というのは、学校へ行っていてはみ出さないで進んでいくと考えていたのです。しかし最近では考えが少しかわりました。学校の先生が40人の子どもを全部対等につきあうというのは無理があ

るとは思いますが、やはりつきあいが浅いような気がします。効率を重視して来た部分が大きいと思います。実際としてはしょうがないとは思いますが、それだけではなく、少人数制のクラスや対応方法を考えてみたらよいのではないでしょうか。

それから公民館の利用については、率直に言って公民館は古くさいです。若者が出入りしている感じがない。公民館の部屋がいつでも空いていて、時間のある人が勝手に入ってきて自由に話し合えるオープンな感じができれば、もっとすばらしくなると思います。今日のこの会合も、今日だけでは話の中身に限界があります。回数を重ねもう少し心を解放して話せるようになれば、もっとみんなが自由にしゃべれるようになると思います。

知識だけではない体験を伴った話しを聞いて、新たな興味や関心を広げていける機会となるのではないでしょうか。

【吉田】

公民館白梅分館の利用者交流会がありますが、その場に出てきて今のようなことをお話していただけると、新たな展望も開けるのではないでしょうか。

【野村】

私は利用者交流会がいつ実施されるかということに関心を持っていないので、ほとんど知りません。チラシなどがあるのは知っていますが、参加したことはありません。

１階のロビーにはよく来ているのですが、４人で座って話をしていると、他の人が来て立ち話をしても狭いですね。ちょうど講座が終わったりしたときに、ちょこちょこと話すくらいですね。私の祖母がここを利用していたとき、私も祖母の友人と話しをする機会がありました。そのように、いろいろな世代の人がつながればおもしろいですね。

ここを利用しているだけで、利用する同じグループの人と話をするだけで終わってしまうことも多い。自分でもっと広げようという努力をする必要があるんだと思ってはいるのですが。

【奥田】

野村さんは公民館との関わりは長いのですか？

【野村】

私は、小学２年生の時、自然観察グループが実施した自然観察会に参加したのがきっかけで伊東さんとつきあうようになり、その後、福生市外の中学校へ通っていたの

ですが、公民館主催の自然観察会にずっと参加していたので、福生とのつながりを持つことができていました。福生での友人はほとんどいなくなってしまいましたが、観察会や観察グループに参加することで、宮岡先生をはじめ、年齢の異なる方々と知り合い、おつきあいをさせていただくことができました。現在まで約25年ほどのつきあいということになります。

【杉浦】

両親からも時々「公民館って何やっているところ？」と聞かれます。自分でもうまく答えられず、「何やっているところだろうね」と話しています。

体育館ではスポーツを、図書館では本の貸し借りなどと説明しやすいのですが、公民館という三文字からでは中で何をやっているかわからない。自分としては、自然たんけん隊という事業に参加していなければ、まずこの場に来ていることはないと思います。

公民館では様々な事業をやっていたり、部屋を貸し出したりしている場所なんだと言えても、その中身についてはうまく説明できないというのが今の自分です。

【司会】

実際には、野村さんや澤井くん・杉浦くんなどが、小学生や中学生に現場で対応しているわけです。子どもたちと一緒の様々な活動で、世代間の交流もしているわけです。

異質な年齢・職業の人が交流しているのは珍しい、そして、現在では意図的に作り出さないと存在しなくなってしまっている。その中にいる彼らがうまく説明できるかどうかは別ですが。

【奥田】

ご両親は公民館を利用しないのですか？

【杉浦】

南田園に住んでいまして、幼児の頃から田園児童館を利用していました。ふり返ると15年くらいの利用になるのではないかと思います。自分としては職員は時々変わってしまいますので、職員より詳しく知っている部分があります。

小学生まで単なる利用者でしたが、中学生のころからは利用者を教えるような立場になっています。その経験があったからだと思いますが、現在は保育士・幼稚園教諭資格取得のための専門学校へ行っていて、将来は児童館の職員になりたいと思ってい

ます。

【綿貫】

私の参加しているサークルは、特に地元のみなさんからの要望を受けて活動を始めた経緯があります。特に鍋一のみなさんに広げていきたいとの要望でした。公民館白梅分館が開館する４～５年前からは個人宅で始めていましたが、公民館白梅分館ができた以降はこの建物を利用させていただいています。

昨年から、公民館白梅分館利用者交流会代表として「公民館の集い実行委員会」にも参加しています。公民館白梅分館が開館した当時には、15～16サークルの利用しかなく、現在の約60サークルと比べても４倍ほどの利用率向上となると思います。利用者の数的な部分では飛躍的な向上になっていますが、問題はその中身ですね。

公民館白梅分館が開館してから２年目に、第一回白梅会館利用者発表会を開きました。当時は利用グループも少なく、また、利用者も熱意をもって取り組みました。

最近のグループ間の交流はほとんどなく、ただ自分のグループの活動をしているのが実体ではないでしょうか。

利用者交流会は、少ない団体数の時には意思の交流というものもたやすかったと思います。

最近は利用者交流会への出席率がよい状態ではなく、グループ内でも申し送りやコミュニケーションが不足しているのか、今一歩連絡がうまく通じていないようです。

実感としては、職員に依存しているというのが正直なところでしょう。これからは職員の支援を受けながらも、利用者発表会一つとっても自立した形を求めたいと思います。

利用者交流会の内容を吟味し、より参加しやすい形を考えていく必要があると思っています。

【高橋】

公民館に関わるようになってから約25年になると思います。最初はPTA役員をした７～８人のメンバーが、このまま別れては寂しいということで、公民館を利用して私たちで勉強してみようということで、公民館に出かけ相談したのです。

そのうちに公民館主催事業の英会話教室に参加するようになり、職員からずいぶん学ぶものがありました。楽しく学習をすることができたのが、大きな収穫でした。その後、自然の成り行きというか、外国人の方々の学習を手助けするような活動をして

いますが、最近ではその外国人も含め、自分たちのサークルから他のサークルへ出かけていき、交流するようになっています。具体的には、絵画サークルのメンバーからは、外国人の方をモデルとして派遣してほしいとの要請を受けたりしました。

サークル活動は楽しくしていかないと、続きませんね。公民館って、いつでも気楽に学習できる場なんだ、あってよかったと実感しています。

その裏では、職員に多様なサポートをしていただいたと感じています。自分でやってみたいことはなんでもやってみたい。他人から暖かみを受けたりするのは、長くやっているうちに気がついたことです。先ほど、奥田先生から「公民館は私の大学」という話しを伺いますが、本当にそうだと思います。もし、私が公民館を利用していなかったらどうなっていたかと思うと想像できません。子どもたちは巣立ってしまい夫との会話しかないので、多くの方々とふれあい多様な話しをすることができ、本当にありがたいと思います。

【司会】

公民館で学習し力を付けた市民の人がそれぞれの形で公民館に関わっていただき、また、公民館で出会い、交流し、新たな力を創造する場なんだということがわかったような気がします。

21世紀、変化を是認しながら変化に対応していける力を身につける公民館をめざすということではないか、変化をみながら大切にすべきところを大切にし、しかも大切にしながらも変化に対応できるように作り直すということが大切だということがわかりました。

若い人に期待することは悪いことだと思いませんが、若い人におんぶにだっこではなく、自分たちもそれなりの役割を果たしていきたいと思います。

これからが、楽しみという状況で、今日のところは終わりにしたいと思います。本日は、多忙なところたいへんありがとうございました。

福生市公民館白梅分館20年のあゆみ
白梅分館20周年記念誌

発　行　日　2001年（平成13年）３月
編集・発行　福生市公民館白梅分館
〒197-0003　福生市熊川559-1
☎ 042-553-3454　Fax 042-530-2513
印刷・製本　（有）セイビ印刷所
〒197-0012　福生市加美平3-8-14
☎ 042-552-0505

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています